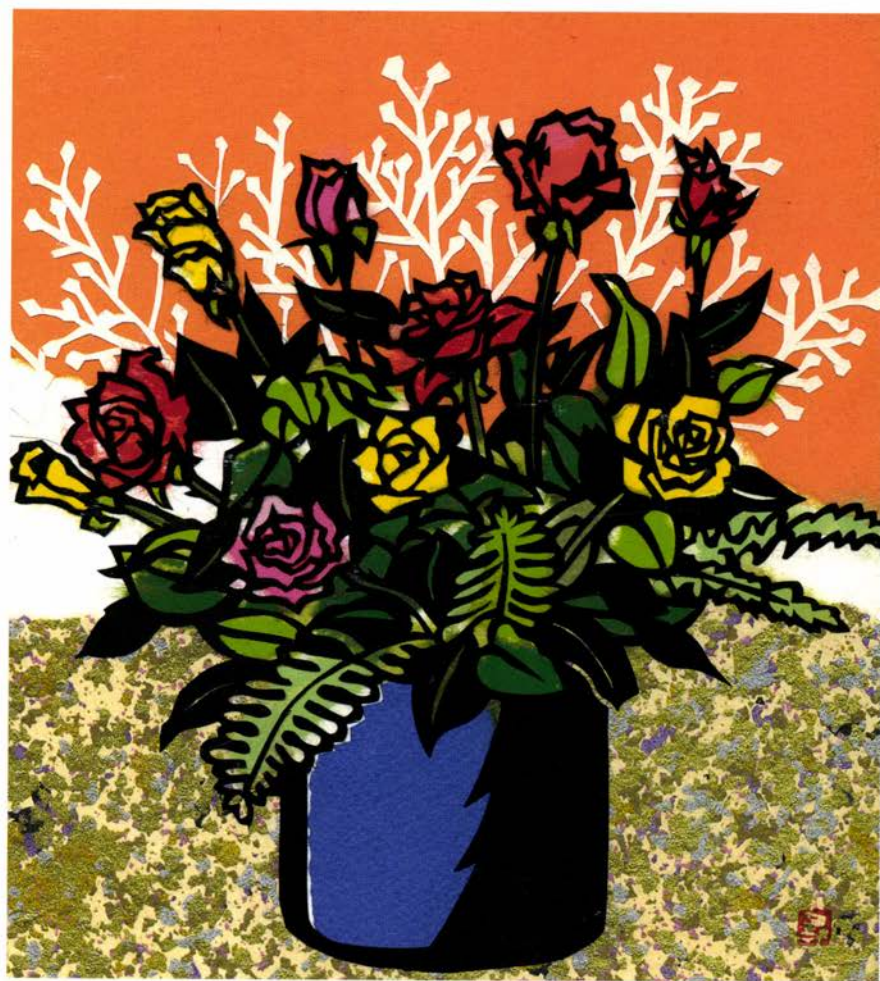


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十六年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇四九号



日川協加盟

No.1049

平成二十六年 六賞発表

十月号

新鮮で旬のテーマ別秀句集

三省堂

新現代川柳必携

田口麦彦[編]

A6判・432ページ 定価(本体 1,800円+税)

新発売

- ロングセラー『三省堂現代川柳必携』の待望の続編。明治から現代に至る佳句を網羅的に収集した前作に対し、本作では、現在活躍中の川柳作家による新鮮で旬の5,000を超える秀句をテーマ別に収載。
- 「震災」「原発」「津波」「絆」「メール」「ツイッター」「介護」「終活」など最新のテーマを取り入れた。「現代を読み解く事典」。
- 付録として日本経済新聞連載「現代川柳のこころ」他を収録。
- 現代川柳の観賞に、句作に必携！



既刊・好評発売中！



現代川柳のテーマ別秀句集
三省堂 現代川柳必携

田口麦彦[編]

A6判・528ページ 定価(本体 1,800円+税)

第23回熊日出版文化賞受賞

- 現代川柳の創作によく詠まれるテーマ約1,400を採録。
- 広範な作品より、約7,000句の秀句を選択して、テーマ別に例示。



現代川柳の精鋭250名の秀句を鑑賞
三省堂 現代川柳鑑賞事典

田口麦彦[編著]

A6判・528ページ 定価(本体 1,800円+税)

いま、もぎたて、
新鮮！
現代をかけぬける、
旬の川柳たち。
田辺聖子氏 推薦



現代を鋭く切り取る！現代川柳の精鋭たち
三省堂 現代女流川柳 鑑賞事典

田口麦彦[編著]

A6判・528ページ 定価(本体 1,800円+税)

これは劃期的川柳集といっ
ていいだろう。
女性川柳家たちの、^{とき}聞の声を
聞く思いである。
田辺聖子氏 推薦

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14 ☎03(3230)9411<編集>
<http://www.sanseido.co.jp/>

90周年記念大会を前に

小島 蘭 幸

今、私は故人となられました川柳塔の大先輩の皆さまをしみじみと思ひ出しています。

「二十歳になるまでに、どうしても川柳塔の同人にしたいんや、受けてくれるか」と、鋭い眼差しで熱く語られた情熱の人、山内静水竹原川柳会会長、私は昭和42年6月、十九歳で、静水、白柳お二人の推薦で同人になったのです。当時、川柳たけはらの作句教室で熱心に指導されていたのが清水白柳さんでした。同人になってまだ日の浅い私に、「蘭幸さん、遠方から本社句会に出席していただきたいのに、本日は選者のお願いが出来ません」とやさしく話しかけられたのも懐かしい思い出です。白柳さん亡き後、作句教室を担当されたのが菊沢小松園さんでした。結婚記念に発刊した私の句集『再会』の序文を書いて下さいました。竹原の記念大会で天国の白柳さんに届くように天に向かって披露されたのも、はつきりと覚えています。川柳塔創刊号から秀句鑑賞を担当されていたのが後藤梅志さんでした。梅志さんはある日、「にしなり」という古い柳誌を届けて下さいました。その中に私の作品と同一句があったのです。

暗号句です。お便りの中では、その事にはいっさい触れておられませんでした。今でも私は無言の教えとして梅志さんの心を大切にしています。

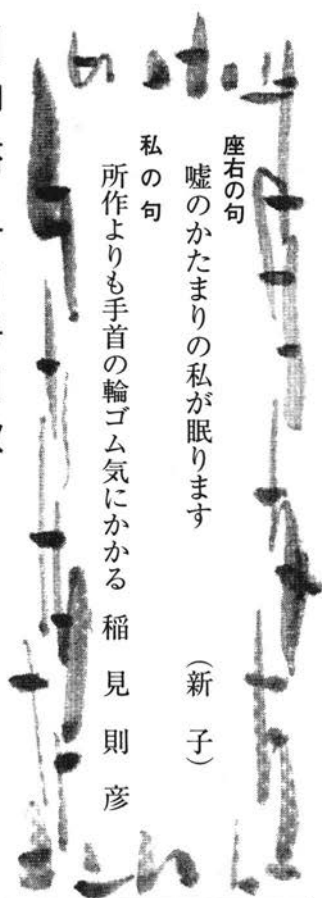
路郎忌句会に出席した時、静水さんと一緒に、西尾栗郎に一泊させていただきました。まだ独身だった私ですが、栗ご夫妻の最高のおもてなしを受けたのです。それからずっと後に、ご夫妻で竹原の川柳大会にご出席された時、私の妻が、美しい町並みをご案内させて頂きました。お寺の石段でのご夫妻の一枚の写真、とてもいいお顔をされていました。

夜市川柳大会で私の披露のあと、すっと側に寄って来られて、「私、蘭幸さんの披露好きです」と、やさしい笑顔で言われた小出智子さんも忘れられないお一人です。

路郎先生の文学碑建立に尽力された八島白龍さんにお礼が是非言いたいと、三原市で開催された神明祭川柳大会での橘高薫風さんは、正に川柳の鬼の形相でした。体調が優れなかったのです。それでも懇親会の最後まで誠意を尽くされたのです。翌日、無事帰宅したと、電話をいただいた時は、本当にほっとしました。

今年は11月の高野山川柳塔碑合祀祭にも是非出席して、記念大会の皆様方のご報告をしたいと考えています。

10月4日の記念大会のご出席を心からお待ちしています。



座右の句

嘘のかたまりの私が眠ります

(新子)

私の句

所作よりも手首の輪ゴム気にかかる 稲見則彦

川柳塔 十月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「祝 創刊90周年」

■巻頭言 90周年記念大会を前に	小島 蘭 幸	(1)
川柳の原点と江戸六阿弥陀	川上 大 輪	(2)
川柳塔(同人吟)	小島 蘭 幸 選	(4)
川柳塔の川柳讃歌 ⑪⑨	木津 川 計	(44)
西尾 葉句抄		(45)
自選集		(46)
温故知新		(49)
水煙抄	西出 楓 楽 選	(50)
新川柳鑑賞 ⑫②	麻 生 路 郎	(71)
平成二十六年度		(72)
路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞		
檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞		
六賞のあゆみ		(82)
俳風柳多留一二篇研究 16		
英語 de Senryu ③④	吉村 侑 久 代	(90)
江戸を楽しむ ②②	小 栗 清 吾	(91)

川柳の原点と

江戸六阿弥陀

川上 大 輪

五番目は同じ作でも江戸生れ

川柳の原点「俳風柳多留」初篇の巻頭句です。「俳風柳多留」初篇は明和2年(1765)7月、呉陵軒可有によって刊行され、来年250年という節目を迎えます。所謂「柳多留250年」です。この句の五番目というのは六阿弥陀の五番目、常楽院です。六阿弥陀詣は江戸の人々が春秋のお彼岸に、行基菩薩が作ったと伝えられる六体の阿弥陀像が安置されているお寺を巡拝するもので、ご利益は、女人救済、女人往生で女性には特に人気があったようです。この六体の阿弥陀像は同じ一本の木から彫られたものと伝えられ、また同じ木の余った根元の部分から彫られた一体を木余りの弥陀、さらに残りの部分から彫られた観世音菩薩を木残りの観音、または末木の観音と呼ばれています。この霊木は熊野権現(那

愛染帖	新家完司選	(92)
檸檬抄	「パ	
「斜	牧野芳光・古久保和子共選	(96)
「め	松本知恵子選	(99)
一路集	「コピ	
「理	岡本花匠選	(100)
「管	野口節子選	(101)
初歩教室	「沈黙	
川柳塔鑑賞	山口光久	(102)
水煙抄鑑賞	川端一步	(104)
民族の詩歌	石橋芳山	(106)
「麻生路郎読本」余滴	三好專平	(107)
「余滴」	三好專平	(108)
せんりゅう飛行船	新家完司	(112)
九月本社句会	新家完司	(113)
句会燦爛	岩崎眞里子	(117)
各地柳壇(佳句地十選／堀	正和・太田扶美代)	(119)
十月各地句会案内		(130)
柳界展望		(132)
■編集後記	朱夏・いさお	(134)

座右の句

眼を閉じて無明の闇に耐えている

(五楽庵)

私の句

終の町川はずうっと澄んだまま

高橋洋子

智権現)で見つけ、海に流したが、沼田川に流れ着いたとされるものです。

「六阿弥陀縁起」には「清姫伝説」と「足立姫伝説」の二通りが流布しているが、今日では「足立姫伝説」がネットなどでは有力のようです。いずれの伝説も姫と侍女が沼田川(荒川)に身を投げてしまう悲しい物語です。詳しくはネット「六阿弥陀詣」で検索してみてください。

この六阿弥陀の位置関係は、古くから北斗七星の形に置かれているといった見方が伝わっています。六阿弥陀は「六」ですから「七星」にはなりません。「木余りの弥陀」を加えると北斗七星に似た柄杓形になります。

さて五番目の常楽院に戻りますが、常楽院は上野広小路にありましたが、関東大震災で焼失、上野広小路から池之端に移り、昭和8年、調布市の連倉寺の地に再建され、福増山常楽院と改名して今日に至っています。常楽院のあった上野広小路には「東天紅」があり、その敷地内に「常楽院別院」として残されています。東京にお出かけの際は六阿弥陀詣を楽しんでみてはいかがでしょうか。



小島蘭幸選

奈良市 大久保 眞澄

聞くほどに迷彩色の自衛権
できる人に敬意一日一万歩
君もドジだね友達になれそうだ
原発を遠巻きにして推進派
生き上手でも不器用にしか死ねぬ
ミサイルを水鉄砲のように撃つ

大阪市 津村 志華子

まな裏に家族揃っていた景色
行間に母の思いを埋めてある
東北の地に輝かん黄金の穂
現実にもどるとロマン遠くなる
小川さらさら里は心の寄りどころ
境界で意地を張ってるバラの刺

堺市 加島 由一

朝顔を数える株のいい動き
折々にジョークを入れて老いてゆく
教員の免許を持ったフリーター

台風一過金剛山が近くなる
日の丸を立てて日本を考える
ありがとうゴメン笑顔がスーイスイ

弘前市 高瀬 霜石

成人病抱え老人病になる
千手観音あと千本は欲しかろう
突然のチャイムステテコウろたえる
指切りは苦手根無し草でござる
ひと晩でこんなに伸びる毒キノコ
お互いさま落ち葉を愛でる歳になる

大阪市 栃尾 奏子

恋の実が弾けて生まれ出た妬心
やりなおせないから明日が美しい
たましいを売るライバルを見てしまう
雪月花霞める長いながいキス
秋の戯画抜けて少女は母になる
更衣済ませて母は芋を煮る

枚方市 藤村 亜成

励まして出た病院の空の青
神様に目隠しをして買う馬券
塔に注射され膨らんでる雲だ
被写体を礫にするレントゲン
浮雲よやがて千切れる縁の友
電柱から落ちた蟬痛痛しく拾う

大阪市 谷口 義

金木犀すぐ立直る母だった
残った残った勝って残ったわけでない
ひまわりはきっちり仕事して終り
知らないことをよく聞いてくれました
体脂肪計と一つまみの塩と
ぽっかりと雲ぽっかりと生きてます

和歌山市 木本 朱夏

父母の在せしころのうちわ風
頼りにはならぬ男の骨密度
青汁を飲んで闘う顔になる
引き金は引くまい秋が来るまでは
痛み止め効いている間の羽繕い
時代遅れの素顔で良かったらどうぞ

河内長野市 山岡 富美子

花散つてからの流れが速くなる
不戦への誓い煮崩れてはならぬ
5Bが小さな狼煙あげている

電腦の完全主義にくたびれる
乱高下の市況でにをはが狂う
断捨離をするならまずは皮下脂肪

橿原市 居谷 真理子

体温を保つ程度に燃えている
千年の樹齢と今日の蟬の羽化
貧相な書棚も曝書して愛す
海は海の広さで大空を映す
逃げて逃げて逃げてふたたび元の位置
この世という夢を見させてもろうてる

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

白壇の香りと見てる大花火
こだわりの味の蕎麦屋の堅い椅子
一途なものは傷つきやすい絹豆腐
いもうとの一身上に萩こぼれ
頬杖のあたりで止める悩み事
逢うのはよそうわたしの老いが可哀そう

松江市 石橋 芳山

難しい顔して答まだ出ない
腰の位置あたりにしなやかを隠す
惑星が混み合いだしてきてケンカ
暗闇になにを掴んだのか不明
認めたくないが次元が違う脳
そろそろを拾い集めて愚痴になる

川西市 山口 不動

それなりに病院の中小宇宙
ひそひそと大病院に群れるひと
待つことも治療であると覚えてたり
治つたら行こうネのそこ増えてゆく
白桃の如く我が孫育ちけり
シラボワのかけ声一瞬のエロス

大阪市 原田 すみ子

古希になる小さく弱いままなのに
古希の秋酸いか甘いかそろり行く
仏壇の母を追い越す日も間近
早朝のひと時夏が光る時
主食より旬の野菜の賑やかさ
矢面のあなたやる時はやるんだ

富田林市 中井 アキ

日進月歩恋は小さくなりました
シグナルの黄の辺りから立ち直る
原点に埋めてあるのは亡父の喝
横抱きにされて頷く他はない
日向ほこ出来る相方探してる
結び目をゆるめて温度差と遊ぶ

和歌山市 柏原 夕胡

花時計止まったわたしが壊れた
泣かないで足元の幸見てごらん
人間らしい人間が減っている

螢火に癒されている夏ひと夜
夏祭り恋した頃が蘇る

台風目のの中に居て大欠伸

堺市 村上 玄也

症状を言うとな薬を増やされる
薬だと思つた酒止められる
酒代は減つたが薬代が増え
禁酒とは辛い夕食不味くなる
酒止めたのでカラオケも行く気失せ
時どきは夢で痛飲しています

鳥取市 岸 本宏章

公園の猿が暇かと寄ってくる
スパゲティフランクで食べたことがない
原発が地震のたびに気を揉ます
夫婦でも歴史認識くい違い
「議事進行」の野次は飛ばしたことがある
出口調査だけでバンザイする勇氣

西宮市 片山 忠

覚悟してかぶった泥は落とせない
仙人の真似などしてはいけません
クラス会恩師に発破かけられる
年に二度履くかもしれぬ靴を買う
訥弁じゃないと誤解をされやすい
病院が儲からないという不思議

鳥取市 森山盛桜

塊はこれ我欲とも五欲とも
人生のついでは実に面白い

釣り針に疑似餌をつけているところ
ご破算で願いましてはさし向い
たとう紙ひらく形見の草木染

ちよつと横向くと共犯者にされる

和歌山市 福井菜摘

電車待つ時はだあれも隙だらけ

人格の所々にある癪

相席で同じ料理を食べている

出雲市 竹治 ちかし

綺麗ごと言つても金の要る余生

晩酌と語り記念の日を創る

朝霧に人文字浮かせしじみ舟

生かされて幸も苦勞も負わされる

死に急ぐことなしたんとある時間

良きこともあれよと昇る陽と約す

倉吉市 牧野芳光

ライバルを提げてウエイトトレーニング

退屈にならぬ程度に仕事する

あるとこに治まっているゴロタ石

五月雨のようにお叱り受けている

曲りたがる胡瓜を何で曲らせぬ

何でもない日がこんなにもいとおしい

篠山市 酒井真由

樹々わたる涼風ひとりとは侘し

ひよっこりと息子が来たる大暑かな

レンタカーついでに彼も借りてゆく

踏ん切りがついたか声が弾んでる
自我ひとつ捨てれば風も丸くなる
頑張っているんだ口を挟むまい
身の丈を生きて余生を弾ませる
苦しかった向い風にも恩がある
米を研ぐ後姿に見る平和

京都市 高島啓子

遅れてもいいと思うと楽である
制服へどこかで出している個性
タバスコが効きすぎ家出してしまふ
半分にした人小さい方をとる
あいまいに別れ消息霧の中
一度きりですよと花を持たされる

熊本市 永田俊子

句友との出逢いバラの花のようだった

一期一会か握った両手がはなれない

ワープロと仲よしになり笑わない

叱つても私は私歌わない

まだ消しゴムが必要な私の足跡

靖国参拝やめた総理の口ゆがむ

香芝市 大内朝子

さらさらととんぼの羽根に透ける秋

わたくしに会いたくなつた独り旅

辛酸を嘗めた割にはまだ未熟

ともだちの居る幸せを飛んでゐる

燃えなはれ発破をかける曼珠沙華

亡母さんのふところみたいだな夕日

堺市 柿花和夫

聞き手が代わると大きくなる尾鰭

熱中症と対峙している万歩計

念力も今は残滓の千社札

車椅子を析るかたちで押す介護

只酒を気合で蹴って縄のれん

割箸の先で突いてくる図星

大阪市 笠嶋惠美

一日の予感びたりと句集来る

川柳塔記念句集は宝物

キルト展大作ばかり見て疲れ

大仏に導かれたか依水園

一匹の蠅は亡夫か纏い付く

一对の盆提灯に娘の想い

三田市 堀正和

一点差人生変えた甲子園

柗席に着物姿の粋な人

お見舞のついでに病院下見する

そろそろとシニアランチの欲しい歳

お誘いの返事は昼寝醒めてから

年金を使い切れない夢を見た

和歌山市 坂部紀久子

年輪の悲鳴聞いてるチェンソー

鉛筆を削る遣る気を募らせて

場を読んで妥協もします生きるため

汲み取ってほしい心の花切手

最低限の家事で猛暑の日を過す

畦道を日傘くるくるる里帰り

富田林市 関よしみ

指切りを守り通して五十年

シュレッダー私の本音まで食べる

好奇心まだまだあつて傘寿です

幸せな命弾んで阿波踊

仏前に硬いメロンと畏まる

成人のゆかた姿にふる里も

和歌山市 上田紀子

包帯を巻けば優しくなる家族

何もない何も書かない日の気概

二の足を踏んで獲物を攫われる

無理だけはしない元気でいたいから

夏なのに食欲あつて秋が来る

出し切った力が神の眼に留まる

豊中市 藤井則彦

野菜サラダ食べてる時はみな笑顔
大海を知らぬ蛙がのさばる世

聞く力持てば本音もほの見える
再検査月に祈った帰り道

空蟬の生きざまにふと欲も消え
なるほどと部下にも学ぶいい職場

堺市 矢倉五月

草引きも気になるメ切りも迫る
順番と言われ会長さんになる

逢えないが励まし合っているメール
お互いに知ってるへそくりの在り処

恨みっこ無しよと腕の蚊を叩く
そよ風が味方いつ気を書き上げる

大阪市 大川桃花

山小屋にコーヒー香る朝まだき
祭りばやし不快指数をぶっ飛ばす

アンコールの声を待つてる舞台裏
危険物扱う心軽すぎる

鮎ひとつ賭けて活気の出るゲーム
お役所の窓口わたし丸裸

鳥取県 竹信照彦

人類の惨禍広島原爆忌
長崎の日に九条を詣じる

列席し去年のコピー読む総理

八月忌日本人の闇がある

盂蘭盆会ご先祖様に今を問う
平和でも自然災害避けられぬ

檀原市 安土理恵
前行くか戻るかわたしわからない
不機嫌な男がかえている事情

十五夜さん夫もまああるくなれたらな
満開のひまわり眩しくて苦しくて

改札抜ける泣きたい私の手を引いて
どんでん返し待っていいそうなエピソード

高知市 小川てるみ

陽の彩をいっぱい吸った夏野菜
具沢山今日が始まるお味噌汁

浴衣着へ欠かせぬ老母の鯨尺
不平不満息子にカツを入られる

戦争の修羅を知らない机上論
台風の動き気になる鏡川

鳥取市 中村金祥

草野球金の卵を追っている
歩数計ついたスマホに励まされ

少子化へ孤独な墓が増えていく
雨宿り出会った人を見極める

インテリも人間くさい酒も飲む
無事投句明日はきつと晴れだらう

鳥取市 両川 無限

満天の星ふる里はまだ元氣
残酷なシナリオ書いたのは神か
坂登り切ってわたくしだけの天
とめどなく問いかけてくる滝の水
耕やすと微笑みかけてくる大地
にんげんに疲れて海が見たくなる

松江市 松本文子

哀しみを脱いで哀しみ深くなり
先ず生きよ骨は拾ってあげるから
困った時はダンゴ虫の真似しよう
一人で行く道ひっそりと華やかに
捨てようか老後を描いた設計図
小さな声だけど私の声である

大洲市 中居善信

とろとろとしていたくだらないテレビ
反省はたぶんしてないお役人
糊代の余裕くらいは持っている
脈拍が七十打つとよく寝られ
昭和平成ゆっくりさせてくれなんだ
カラフルに盛る掌の十二錠

高槻市 島田千鶴子

失敗が続く穴から出られない
ひまわりがおしやべり止めてから秋に
花鍬きれいな薔薇を切りたがる

悩み事打ち明けられて不眠症
びっくりはするが慌てる歳でない
だんまりの策を使えば肩がこる

寝屋川市 平松 かすみ

かわいいた自分の影を追いかける
癖になる痛い所へ手を当てる
ふるさとの元氣わたしの栄養素
社会人になり遠くへ孫が跳ぶ
淋しいなカセットで聴く孫の歌
百年誌広げ鹿兒島県人を

八尾市 村上 ミツ子

八月六日今年も起立して祈る
高野山ひと足早く秋が来た
鈍行の台風に駄駄こねられる
びっくりが別のびっくり連れてくる
娘を守り娘にまもられて生きている
茸飯何かいいことありそうな

長岡京市 山田 葉子

わだかまりシユワシユワ弾け仲直り
元の場所に仕舞うこれなら忘れない
すんだこと忘れていいよ吾亦紅
ずけずけ言う友またひとりいなくなる
進んでも退いても悔いは残りそう
氣がつけば友達みんなマイペース

鳥取県 石谷 美恵子

根気よく遠くで見ててくれるひと

やさしくて忘れたことにしてくれる

相棒のパワーにいつも助けられ

相棒を悲しませないよう生きる

青空へ恥ずかしくない今日の幕

鳥取県 岩崎 和子

一番に川柳塔誌夫読む

八十路坂二人揃って本を読む

八十路来て二人黙々読書する

時々目薬タイム息を吐く

幸せのコーヒー二杯夢を見る

鳥取県 斉尾 くにこ

しつとりと溜め息ほんのりと吐息

カーテンを引こう裸心になりました

こつこつと音する地味なところから

言葉がおちる耳たぶに穴がある

ゾウに鼻サイに角ありカバに愛

鳥取県 西谷 悦子

懐の深さ潤す種がある

泣き笑い生きる実感編んでゆく

あしたへと引つ張ってゆく陽の光

雑魚ですがなかなか芯は折れません

生まれ来たテーマしつかり生きてゆく

鳥取県 細田 裕花

仲直りするまで揺れている空よ

うっかりミス仕事で返さねばならぬ

何でも同じところでもまた転ぶ

真剣に遊ぶこの世の隅っこで

花丸を目指す近道ないけれど

鳥取県 松川 行男

俄雨あわてないのは雨蛙

一面を見ないと朝が明けてこぬ

秋読書急がなくては下巻くる

一食に老々介護愛をこめ

アルコール抜きで辛抱できますか

鳥取県 山下 節子

人の字になるほどどの支えあい

孫育ち駄賃紙幣になつてきた

よそ見など出来ぬ私は運転中

高齢化選挙の出来ぬ人がふえ

一生をローンの始末して終る

鳥取県 山本 正光

ヘルパーに優しくされて脳に湯気

この歳へダンディーなどと照れました

杖なくて歩け足向く散髪屋

生きるには暑い寒い身勝手だ

サルスベリ咲いて今年も孟蘭盆会

鳥取市 池澤大鯰

暗証を受けつけた人みんな知り
臨機応変管理の枠をはずして
信じれば本物無視ならばコピー
急傾斜屋根は廂が浅いまま
麺類の延長だろうパンを食う

鳥取市 奥谷彩子

たおやかに生きたし昨日今日明日
自我浄化したくてくぐる寺の門
生きる道弥陀に問うてるまだ解けぬ
一怒一老笑って融ける人の輪に
四面楚歌老いの幕引き考える

鳥取市 加藤茶人

名誉捨て赤子に戻る紙オムツ
ぶつぶつと不平を言うが保守強い
子が出来て守りの姿勢から崩れ
蟻とは身を美で叩くとは書かぬ
体罰が禁止だそんな自衛隊

鳥取市 岸本孝子

自分史のような句集を残したい
女子会もたまに政治の話する
体内時計狂わず今日も腹が減る
出口調査本音がポロリ出てしまう
気力失せ妥協すること苦にならず

鳥取市 倉益一瑤

みんな留守私ひとりのカーニバル
背信の背なに雷雨の降り止まぬ
びしょ濡れになって大人になってゆく
わたくしを成長させた好敵手
体重計に叱られているつまみ喰い

鳥取市 鈴木一弘

乗るがよい知恵と力の馬ならば
登り口それぞれかえて富士登山
丹精がかがやいている昼さがり
茶わん酒罍り思案をふきとばす
夭折は軌道はずれた流れ星

鳥取市 永原昌鼓

スイーツを見ると胃袋燥ぎだす
箱入りで蓄なかな開かない
着たい服どれも体型無理と言う
この浮き世美味しい話ざらにない
世渡りへお世辞も時に役立てる

鳥取市 夏目一粹

人情も薄れはしたが疑わぬ
どこまでが人の道だかわからない
人生の卒業式は逝去の日
合掌の五本の指が脈を打つ
蟬の亡骸を拾って供養する

鳥取市 西川和子

時どきは耳傾けて欲しい笛
ポケットの笛を吹く間の無いままに
恰好を決めては見たがまた転ける
棚牡丹の潤いだから身に付かぬ
席順は上座やっぱり齡の順

鳥取市 春木圭一郎

とりあえず持つてるもので勝負する
練習でできる自信が増してくる
本番で自分のベスト尽くせるか
受け入れてくれるか弱さ認めたら
生きてればいつか真贋見えてくる

鳥取市 平尾菜美

ダイエット腹決まるまで揺れ動き
フレッシユマン私明日から旅に出る
墓守りへ敬意忘れていませんか
出し切れる余力まだあるしよげないで
腹心の友のパンチが身に染みる

鳥取市 福西茶子

免停がくるかも夫が捌けない
頼りたい蹴っ飛ばしたい人がある
夢のだけで試した倍返し
プライドを捨てるとわたしアミーバー
外税のお店は詐欺師にも見える

鳥取市 前田楓花

玄関の帽子に秋が置いてある
どうしても好きになれない蛙の目
愛犬も老化は避けて通れない
許したら心はきつと晴れるはず
幸せをゆっくり回す観覧車

鳥取市 吉田孔美子

エプロンは脱がぬ車も手離さぬ
帯襦袴脱ぐスビードはスマホなみ
ウォーキング脱ぐなら着るな持たせるな
七年後形見は脱いで捨てました
散骨を宇宙でやつてもらいたい

鳥取市 吉田弘子

口下手の感謝の気持手を合わす
役に立つ老婆だと自負惚けられぬ
海水浴臨時の駄のあつた頃
九条も老いたか揺らぐ自衛権
去年まで届いた棚が高くなる

倉吉市 猪川由美子

これ野党日本のために強くなれ
愛子さま微妙な立場お悩みか
スタップ女史また傷付いた過度取材
日本人横綱早よ出て国技救えよな
アスカ容疑者品格の無い裁判だ

倉吉市 山中康子

感心はしても言えない褒めことば
悶もんをひっくり返すコンサート
気遣いじゃないこういう性格です
この趣味は開けっ広げてアクがない
通じ合う柳友のお蔭で今日がある

米子市 後藤宏之

しなやかな男がやたら増えてきた
袴を脱いでおまえと今日は飲む
災難がソフトな顔でやって来る
マストなど必要ないと波まかせ
資金繰りすこしゆっくり回り出す

米子市 後藤美恵子

赤とんぼに盆の準備を急かされる
盆飾り老い口実で少なめに
若き僧熱く浄土を説いてくれ
良い母か今更聞いて何とする
鰻重を子のボーナスでありつけた

米子市 竹村紀の治

磨き切り十七音を解き放つ
肝臓が功労賞を労れと言う
風紋は砂と風とのジャムセツション
八の字の眉毛家紋のように継ぐ
使いみち考えてある当せん金

米子市 中原章子

他を思いゆずる流儀を取り戻す
年齢と気分の違い埋めて生き
脳味噌に打出の小槌欲しくなる
奈良の鹿ベコリとお礼愛らしい
引っ張る人火消しする人コンビ組む

米子市 成田雨奇

日曜日だから机の下も掃く
酒を買う役と飲む役分業で
人間はどうも困った動物だ
あと三億五千万秒ほど生きる
平成の子らに家訓もゆるみだす

米子市 吉田陽子

一つずつ祭りを済ませ生き急ぐ
輪廻転生いつかあったねこんなこと
子の帰省身体の棘が抜けて行く
下描きは出来たし紅葉待つばかり
虫籠も戦場秋が深み行く

島根県 伊藤寿美

青空にわたしの鎧脱ぎ捨てる
淋しさにも慣れて気儘な十三忌
土用の鰻素通りさせてサンマ待つ
老いの愚痴聞く赤ヒゲに逢う診療所
号泣しても嘘は許して上げられぬ

松江市 小川 注湖

広い肩惚れたあんに明日賭ける

食べること幸せ家族膳並べ

コンビニで僕の人生考える

宇宙開発国名入りのごみが舞う

親の背を子が見て育つコビーして

松江市 川本 畔

事情あり愛の暮らしの針の音

膝すり切れたパンツで語る平和論

つくつくぼうし満月に抱かれて

一日を凜として咲き崖の百合

虫達は光をめがけ這っている

松江市 錦織 禮子

にが虫をつぶしたような人も輪に

老々介護静かな音を立てはじめ

帰省した竹馬の友と墓参り

お見舞に添える花柄ハンカチーフ

父戦死 幸せ薄い一生に

松江市 藤井 寿代

動かないでキミのハートに真つしぐら

言い訳をラムネの泡が語り出す

切り離された貨車に心を置き忘れ

頼りない尾氈骨だがよく笑う

合掌の手からこぼれているせめて

松江市 松本 知恵子

骨無しの魚が好きで猫墮落

網干して港のんびり日が暮れる

逃避行したいな夏の雲ふわり

海に落ちたカモメの噂それっきり

風見鶏みなと神戸を見続ける

松江市 三島 淞丘

悲喜劇の最終編の幕が開く

本当の僕で散ろうと脱ぐ虚栄

宍道湖に夕陽浮かんで明日も吉

わたくしの本音を探る聴診器

一年の早さ終焉ふと思う

出雲市 石倉 美佐子

信長を見てから寝るむし暑さ

大島紬をモンペにしてたあの頃

八月十五日動員学徒の私でした

父を還して兄を還して涙は頬にとめどない

友三人の自決を今も忘れない

出雲市 伊藤 玲子

逢いたい鼓動鎮める茶を点てる

しなやかに誘い躲して去った蝶

旅鞆ひらけば余韻ころげでる

叩き売りのバナナに笑顔五つ咲く

くねくねの路も違わず八十路まで

出雲市 岸 桂子

ゆとりとはこんな物かと爪を切る
ケイタイに閉じ込めてあるお友達
切々と弔辞弱点には触れず
いらぬ忠告今は黙って聞き流す
仏像もわたしも同じ空気すう

出雲市 小白金 房子

朝顔と対話大きな数をやむ
年号を重ねて逝った葬の列
普賢菩薩わたしを守る白い数珠
ほほづきの笑顔手向ける野の仏
この道を選んだひ孫のユニホーム

広島市 岸 本 清

一日をトイレに行つて締めくくる
大好きな演歌に孫はアレルギー
どうにでも解釈できる自衛権
生欠伸噛み殺してゐる通夜の席
どの医者も素振りを見せぬ商売気

竹原市 石 原 淑 子

午前二時希望の朝がノックする
七歳の告白を聞く好きなひと
胸がいつぱいそれでもお腹鳴るのです
核家族の歪み子供に回るツケ
バスデーキーキを睨む四つの瞳

竹原市 岩 本 笑 子

アリの列夏の暑さのその中に
あんパン一つと朝のドラマ見る
時々未来の地図を塗りかえる
濡れるのは平気キウリナストマト
締めきりは明日鉛筆にぎりしめ

府中市 藤 岡 ヒデコ

初盆の提灯供養殿かに
お題目唱えて偲ぶ姉夫婦
やさしさが身に沁みるなり黄昏れる
さすが敵わたしの急所ばかり突く
生きるとや難行苦行くり返す

宇部市 平 田 実 男

こつそりと喫うて煙草の味がせず
俺々詐欺来たら私もかかるかも
また妻に逆転された口喧嘩
高齢化六十歳は青二才
五七五五七五で暑氣払い

南かがわ市 川 崎 ひかり

微調整しながら今日も生きてゆく
墓参り故郷は知らぬ顔ばかり
顔を見て安堵と共に出る小言
阿波の盆セミもトンボも皆踊る
ケイタイを操る人に顔がない

松山市 古手川 光

台風がいけず祭りがばあになる
最後には玉虫色にして妥協
平均寿命延びて幸せ不幸せ
生きるのも辛いと盆栽がぼやく
日日成長孫は次第に遠ざかる

松山市 宮尾 みのり

まだ道は半ばへ寿命なのですか
刻々と迫る術ない母である
三十キロ瘦せたとわらう薄い肩
線香花火家族みんなの息止まる
結束の固さその日へ立ち向う

西予市 黒田 茂代

あれは夢だったと思う事にする
夕空を彩る雲の抽象画
小鳥の声もわくら葉も友露天風呂
オニグモの罨にかかったのはわたし
後方からわが家見守つてるお墓

高知県 小澤 幸泉

以下余白そんなドラマにおどらされ
自画像のあと一筆が定まらず
自惚れも野心もとおい老いの部屋
病む足に二分遅れの汽車が出る
子ら三人それぞれに越え父の河

唐津市 坂本 蜂朗

見所があると生け簀で泳がせる
河口まで来て浮き沈みする未練
インテリの顔が粹から出られない
天国へ昇る体力蓄える
百歳までまだ十分にあるゆとり

唐津市 山口 高明

眼福は豊明殿の金屏風
羊水の海で泳いだ憶えあり
幣帛を催促なさる神もあり
順番が来たと我が家の念仏講
お粗末なビジョンで税を垂れ流す

熊本県 岩切 康子

助つ人に甘える夏の有難さ
目まい葉終日眠るから吞まぬ
誕生日貰う言葉が温かい
温泉で心身ゆったり誕生日
何回も情報くれて覚悟する

札幌市 小沢 淳

秋は思惟始末するものされるもの
老春に芽出しさせたい花もある
一合で詩人五合で天下獲る
リサイクル外国製が僕に合い
肉牛がTPP TPPと啼いている

援農のお盆休みが終戦日

札幌市 三浦 強一

炎天下ラジオで聴いた神の声

ほろ酔いに泉のごとく沸くジョーク

古典落語江戸の人情味に浸る

道行きは妻の手を取り花の道

青森県 松山 芳生

多情多恨おんが渡る虹の橋

薄れゆく昭和の森が揺れたまま

黄ばんだ昭和が鎮座するノート

素質を見抜かれ研究棟にいる

神童の名をほしいまま世を渡る

黒石市 相馬 一花

ややこしい事を気にせぬ女王蜂

鍵盤を流れるような魔法の手

悪友が悪友を呼ぶアリ地獄

花束にむせぶ現在過去未来

いつ見ても微笑んでいる猫被り

弘前市 稲見 則彦

国訛り絶えて久しい津軽衆

いつからか双曲線で暮らす老い

熱帯夜の張本人だとは思えない

ねぶたの戻りっこ出来秋の匂い

シャッター街乾いた風が吹きぬける

紅白より思い出メロディーわくわくす

弘前市 今 愁女

懐かしさ昭和の歌に郷愁が

長寿国せめて身綺麗に生きるとす

明日はわが身か台風進路目を凝らす

完熟までの林檎案じている農家

弘前市 岡本 花匠

精一杯生きて米寿の寿詞を受け

石頭ゆつくり解けて良い笑顔

ふれあいてデイケアの笑み灰汁抜ける

ねぶた祭最中に論す原爆忌

握力計足りぬ力に苦勞する

弘前市 須郷 井蛙

大陸になるかも知れぬ西の島

心にも栄養剤の法話聞く

ママ迎え園児の靴が蝶になる

司令塔どたばたしない蟻の列

パズル解き家族の絆強くする

弘前市 高橋 洋子

百年先睨んだ政策何処へやら

登坂車線ゆつくり登る趣味ひとつ

前向きな友から学ぶ粘りっ気

気遣いをしすぎて重い荷を担ぐ

ほんのりと梅酒色づき蟬しぐれ

弘前市 福士慕情

如何に生きいかん死ぬかと脚を組む
地獄極楽生きているから味わえる
保育室あしたへ寝顔あどけない
健康のために晩酌飲んでいる
泥水も飲んだ父の鉄兜

さいたま市 星野育子

訛より外国語増え上野駅
人手不足の割には多い無職
物欲少なくトラブルも少なく
声かけも控え「ガン闘病記」展
仏前に涼しく光るレモン置く

東京都 伊勢田 毅

熱帯夜遺影の妻の汗を拭く
缶ビールまた手が伸びる熱帯夜
ぐっつりの金魚眠れぬ熱帯夜
夢うつつピーポーを聞く熱帯夜
へそくりを数え数えて熱帯夜

東京都 まえで とよこ

アンテナショップとうもろこしも肩ならべ
とうもろこしひとつぶ味見すめられ
どこそこの玉蜀黍に親しむ日
あけがたにめざめておもう水平線
日本海へミサイルとんでくる日頃

横浜市 小野 句多留

中東の未来に羅針盤がない
土用の日その日に限ることもない
喜寿過ぎて平均寿命見えて来た
七月の蟬は残暑をまだ知らぬ
人の名が出ない話がすぐ尽きる

横浜市 菊地 政勝

奥の手は謝ることと見つけたり
無農薬氣にする妻の薬づけ
死ぬことはないと思へ出す期限切れ
父母想う心は失せぬろくでなし
お辞儀する角度で見える品の良さ

富山市 島 ひかる

少年と少女に還る村まつり
晴天へ命を運ぶヘリの音
表から見えぬ難所を通り抜け
他人には言えて妻には言えぬ事
我慢してされて頑固を底い合う

可児市 板山 まみ子

どうにでもなれと言いたくなる暑さ
ヒグラシにせきたてられる秋仕度
昨日なら許せたけれど今日は無理
物忘れいつか自分も忘れそう
サイレンの音忘れぬ終戦日

愛知県 早川 遯行

京都府 西村 益子

何もかも失つてから人強し

マイホーム車がないと暮せない

それだけの価値があるから並ぶ店

良いことはそう続かない内視鏡

栈敷席流れるような京言葉

犬山市 金子 美千代

私の為によつてるボランティア

プライバシー保護と立ち入り禁止なり

期限切れ並べ思案の備蓄品

子に遺すつもりないから暮らせそう

風呂敷の包容力を習いたい

犬山市 関本 かつ子

平凡な日日に時どき石が飛ぶ

遺言のつもりで語り出す昭和

干し物が揺れてかわいい声が聞け

脳ドック異常無しでも物忘れ

どうしても言えぬ私の自尊心

京都市 清水 英旺

線香の煙の向こうから招く

憲法がこんなに柔とは知らなんだ

知る人ぞ知る無印の底力

通じない筈だ異次元に棲む人だ

同じ空気で生きているのに殺し合う

リフオームも余命考え押さえぎみ

築七十年修繕だけで終りそう

ビザギョーザ孫に付き合う夏休み

昼寝して起きたら腰が どうしよう

食べて飲み喋りたおして友帰る

京都府 藤井 文代

意地通す頭の中のねじれ糸

憤りたぐれば我にたどりつく

サポートするよりされる今角削る

涼しい顔できるかなあと顔洗う

見渡せば立ち位置知らず目があった

京都府 榎本 宏子

息子同居煩わしさも便利さも

息子には夢をいっぱいもつ過信

着飾って遊びに行く近所の目

愛読書句集も仲間入る棚

二階には明かりつかない独居宅

八幡市 今井 万紗子

空元気今日もくるくる腕捲り

虹色に一色足して旅半ば

退屈なはずでなかった定年後

わたしは私まだ青春の光しあり

ほどほどの錘で夫を泳がせる

大阪府 桑田 ゆきの

お話がまた聞きたくて川柳会
日に背く向日葵もある被災の地
まだ耳朶に残っています千の風
一言が腹の虫まで裏返す
ハローワーク尻尾の切れた蜥蜴出る

大阪府 野田 栄呼

この顔が更新最後免許証
片付けて無駄骨を折る探し物
齢並の動きできてる大事です
混み合っているの一円玉のせい
この齢でまだ包丁を研いでいる

大阪府 初山 隆盛

つゆ晴間わたし丸ごと天に干す
夕立のシャワー浴びたい夏の像
風向きがことば一つで裏返る
嫁ぐ娘にこもごも父のひとり酒
香水でわたしをバラに近づける

大阪府 米澤 倅子

北斎の絵から聞こえる波の音
月下美人律儀な闇に咲く香り
一人また一人が消える縄電車
諸肌を脱ぐと元気を出す太鼓
試着室私ひとりの小宇宙

大阪市 池上 清治

陽が落ちる景色見飽きぬ故郷の海
落日を今日も見に來た故郷の海
船酔で初めて知った海の荒れ
人の世を漂う術は易くない
お迎え団子年寄りだけで作る盆

大阪市 井丸 昌紀

じつくりと考えて歩を一つ突く
すりガラス見るとひっかく癖がある
ネクタイを締めて紳士の振りを
死をおそれ生をおそれ生きてゆく
ありがといつでもちよつと口ごもる

大阪市 江島 谷勝弘

小鳥たちさえずり出すと午前四時
お花つて意外に強い香りです
三歳児トムとジェリーにはまつてる
幸せだ水道水を飲める国
議員さんはよく昼寝しておられます

大阪市 榎本 日の出

太陽は燃えてるだけで喜ばれ
喜怒哀楽しげきとなつて呆けられぬ
勉強が苦手のままでついて来た
泥つきの野菜を煮れば芽えた味
最後には重たい方が残ってた

大阪市 榎本舞夢

川柳して自分自身が強くなり
古希過ぎてプロ目差してる友が居る
新しい小銭入れ買う消費税
暑くても食べたいものは買いにゆく
別別に明日の予定のある夫婦

大阪市 奥村五月

オレオレと言うな我が家は女系です
川柳と言う名葉の惚け防止
叩きなや釘と子供はすぐ曲る
船長に逃げる模範を見せられる
ヘソクリは増えて家計簿また赤字

大阪市 川端一步

老いてなお生きる下絵を今日も書く
柳友と図書館で会い握手する
褒めことば一つ貰ってまた走る
根っからの人間が好き酒が好き
マスクしたクレオパトラに逢いました

大阪市 熊代菜月

おしゃべりをしたくて今日もデーに行く
値切ったら負けるつもりでつけた札
暮れ泥む生駒の山が燃えて居る
生と死を両手に持って早や八十路
自分色まだ出せなくてまた迷う

大阪市 古今堂蕉子

浴衣ブーム太鼓を叩け笛を吹け
頭の中ボウーンと汽笛鳴る奇妙
恋から愛愛から哀に変わり候
二人乗せスマホのママの曲技団
幹事の愚同窓会のカニ料理

大阪市 小谷集一

若い日の甘い言葉が死語となる
妥協点下げて世間を広く生き
生き上手深入りしない距離に住む
一生涯妻を愛するのも戦
粗大ゴミ楷書で生きて来た男

大阪市 近藤正

九条が守る海外ボランティア
安全に役立ちますか核の傘
名護の海壊さないでと泣くジュゴン
原発の帰するところはゼロが良い
彬の碑百日紅背に凜と立つ

大阪市 坂裕之

ちよつと揉め仲直りする心地良さ
諦めた途端に雲が消えた空
調子よく世渡りするが薄っぺら
悔やむことないさ自分で決めた道
弱い振り演じ味方を増やす人

大阪市 佐藤 忠 昭

紙とペンアナログ人間まだ元氣
締切日今朝もペン持ち句作りだ
人の価値密かに測る文字恐い
広辞苑焦る時には重過ぎる
棺桶にメモと鉛筆忘れるな

大阪市 澤 田 定 子

クールビズ太い頸には無理がある
裏のママ子へ声高の夏休み
愚痴多い女の先生厭がる子
この猛暑年々つらさ増してくる
神秘的灯籠流ししてみた

大阪市 田 浦 實

虹かけて恥ずかしそうな生駒山
小言より一喝される心地好さ
静は勝る分かりかけたわ古希なかば
手を打つと飛んで来るのはボチだけだ
海外から和食ブームがやってくる

大阪市 津 守 なぎさ

滝しぶき蟬も元氣な宿浴衣
よく育つゴーヤ近所と比較する
蒲焼は穴子どっさり匂い立つ
テレビ欄旅とグルメが競い合う
青空へ原爆ドームそびえ立つ

大阪市 寺 井 弘 子

腕時計外して主婦の顔戻す
一坪の庭を彩る茄子トマト
新大関大和魂燃え立たせ
アンティークぜんまい巻いて時刻む
何時だって母に合わせる旅プラン

大阪市 板 東 倫 子

ロボットに戦争などをさせないで
不景氣にした責任は棚に上げ
インテリは弱いと知ってから騒ぐ
寝て待てと言われたチャンスまだ来ない
不景氣な町でゼいたくしてみた

大阪市 平 嶋 美智子

まだ役に立つと思っている元氣
飲み会は小一杯と決めている
カンパイと飲めば至福の声もれる
秋恋し猛暑の中でおよいでる
夏ばてが纏わり付いて離れない

大阪市 伏 見 雅 明

ハルカスを見下ろしている青い空
人並みにペットも悩む肥満体
見わたせば「ながらスマホ」の多いこと
あみださま涼しい顔をしてござる
水銀がぐんぐん夏を突き破る

大阪市 升 成 好

言い訳のまずさ善人だと思ふ
服薬の序曲のように食事する
古時計余命を刻む音がする
もう一杯いや止めとこうせめぎ合い
まっ黒に日焼けした子の陽の匂い

大阪市 松 尾 柳 右 子

猛暑中外出ひかえ作句する
二人居の小言聞く事多くなり
留守番に爪切っている暇つぶし
うらやましヒールはいてる若い人
大空にジェット飛んでる乗りたいな

大阪市 山 崎 君 子

昨年の押花美しじつと見る
新しい机嬉しく娘に感謝
朝早く今日も差入れ嬉しくて
友想う空を見つめてひとり言
夕やけ雲部屋から見える嬉しさよ

大阪市 山 本 加 お り

リハビリの指にやさしい風が舞う
ありあまるファイトが壁を開けさせる
夢枕歳をとらない風の盆
父母介護手を合わせてた中年期
ご先祖へ愚痴を洩らしてよっこらしょ

大阪市 吉 内 タ カ 子

八月は苦い思いで慰霊月
ウナギ井元氣を出せと宅配屋
孤独でも趣味の味方に手を合わす
ネタ探し錆びた脳です邪魔をする
客の声元氣になったとカラオケ屋

堺 市 奥 時 雄

床屋の孫は床屋が避暑地
気まぐれな姫にチケツト無駄にされ
ファールだとすぐ分るのにアナウンサー
包帯でミイラのような相撲取り
介護の仕上げは湯灌に相違ない

堺 市 源 田 八 千 代

熱中症未然に防ぐ同じ寝間
快適な暮しに嵩む電気代
蝉時雨の中早朝の墓参り
腕白も大人びて来た電話口
繰り言も口のりハビリ聞き流す

堺 市 齋 藤 さ くら

冷房に蝉の鳴き声のどかなり
急かすから反ってミスをしてしまう
減りもせず増えもしない体重計
甲子園ピッチャーの名覚えとこ
坊さんが時計ちらちらするお盆

堺市 澤井敏治

九十周年明日を夢見て集う朝
顔のないスマホ同士が話し合う
テレビ消し虫の声聞く月明かり
月明かり駱駝の親子絵本読む
今いくつシーラカンスの独り言

堺市 遠山唯教

一病に人間力を試される
価値観のちがう親子が譲り合う
長生きのために雑念ふり払う
贅沢な湯船に一人たまらない
孫娘の心遣いがあるがたい

堺市 内藤憲彦

漱石が昭和男の胸を打つ
すぐ喜ぶ両親が居て三世目
ケセラセラ折り合いつけて世を泳ぐ
あつさりと初心に帰る私流
定年後自我にめざめてマイペース

堺市 西村りつえ

ハルカスの上でストレス飛び廻る
大きすぎ風呂敷一つじやまをする
計画どおりに増えた消費税
おかしくも淋しいことも物忘れ
また電話ホームも墓地もあせつて

池田市 栗田久子

健やかな余生きれいな陽が昇る
輪の中のひとりとなって手をつなぐ
忘れぬようにと咲いた彼岸花
秋刀魚は高値詩人春夫も苦笑い
月並みな会話波紋は広げない

和泉市 横山捷也

騙された振りしてドラマ幕が開く
その前に母を納得させておく
手の届く空の青さに跳んでみる
父母は無いが実家に泣きにくる
借金も無く真夏の大きいびき

茨木市 島田誠一

ピリオドが打てないスマホへの呪縛
あと一歩やっと相手の背が見える
絵手紙のナスときゅうりで暑氣払い
少しずつ義理欠き老いの荷をおろす
裁判員そつと性善説を置く

茨木市 藤井正雄

辻地蔵路地のドラマを見て御座る
飛ぶ鳥を落した頃の酒の量
負け試合酒に溶かしてから帰宅
伯母の背に見とれる母の三回忌
地獄耳何か仕込んできた笑顔

大阪狭山市 矢野 梓

敗戦の昭和潜って今が有り

故郷に飛ばしてみたい夏帽子

年寄りが歩いていない炎天下

黄泉の旅夫婦一緒にとは行けぬ

八十路過ぎ普通に暮らす難しさ

交野市 森本 弘風

杖持つと電車で席を譲られる

終戦は中学生の暑い夏

終戦と民を欺く負け戦

自衛論弾飛ぶ所でしなはれや

先輩に予科練帰り怖かった

河内長野市 植村 喜代

八十五の手習い始めてのケイタイ

覚えかけのメールを打つさびしい日

淋しさがどつと来る日暮れどき

ケイタイ勉強中に孫笑う

娘ケイタイ持つてくれたら助かるよ

河内長野市 梶原 弘光

当てのない一人旅なら早いうち

戦況を見渡し揺れる風見鶏

ピンナップ肴にグラス傾ける

オレオレに備え秘密の合言葉

蝉しぐれバツクに百度玉の汗

河内長野市 木見谷 孝代

台風が意地悪をする盆帰省

お帰りと野の百合合がご挨拶

水平線心ゆったり広がる

そこかしこ傷む古家と私と

島人は家も心も鍵かけず

河内長野市 黒岩 靖博

照る日曇る日亡母の笑顔に助けられ

垣間見た目線の奥にあるシット

頼みごと軽く引き受け四苦八苦

三枚目うまい道化で主役食う

置き土産の学費と定期する

河内長野市 坂上 淳司

着痩せするタイプと妻は夏も食べ

天引きで年金瘦せてから届く

うんうんと名医は耳を傾ける

老いたなと自認を迫る物忘れ

パートだと納得迫る給料日

河内長野市 谷 久美子

人並みの暮し夢見た焼野原

軽率な私を叱る孫のジャブ

親しさについ御無礼を申し上げ

親しさと絆で繋ぐお付き合い

祭り後塵を処理するボランティア

河内長野市 辻村ヒロ

愛嬌を振り撒く序列ボチに聞く

体調がコロコロ変る古希の日々

閻魔様と一緒に遊び惚けてる

カラオケで恋いろいろに酔ってます

ハートメール妬いてもくれる妻の勘

河内長野市 松岡 篤

都会地のビニール屑の雀の巢

雨漏れの音さびし気な無人駅

髪のことご法度ですと目で合図

マニユアルで弱味を見せぬ客さばき

点滴を見詰め退院待ち望み

河内長野市 水谷 正子

PLの花火に泣いた子が六十

PLの花火去年は病院で

花火見た友や妹極楽で

切なさを秘めて花火は色変える

ああ花火皆逝き吾は一人みる

河内長野市 村上 直樹

もうお酒止めてと睨むおしゃまぶり

子育てを終えてそのまま子養い

その昔拾った部下に奢られる

老いてなおのび太と夢を追う出窓

親しさにも濃淡老いの処世術

河内長野市 山室 光弘

闊歩するミニの素足に知る平和

手に職をつけた努力が今の幸

原爆忌語り部減って高齢化

見つめられ軽く覚える恋心

夏痩せも嫌喜びの秋が待つ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

ふる里は無人の駅のままでいる

骨のある男に会ったしやんとする

取り敢えず尾を振りながら考える

大義など振りかざすのはやめなさい

ひとりですびびることなどありません

吹田市 太田 昭

無遠慮をあらためて知る隠居の身

敬老会平凡ながら不整脈

猛暑のなか北に越したと通知くる

泣き笑い丸い地球に棲んでいる

俺という男が吐いた嘘ひとつ

吹田市 木下 敏子

人の輪に入りおいしいお茶の味

焦らずに墨磨つてますまだ八十路

引き際を夕陽のように飾りたい

底辺で流されまいと根をおろす

もう何も言うことは無い蓮の花

吹田市 須磨活恵

齢ですぬ出不精になった影法師

純粹で心は若い頃のまま

生きている限り人間学びです

春は春の秋には秋の実を食べて

お蔭さま五臓六腑はまだ元氣

吹田市 野下之男

神様はご不在でしたウクライナ

あてもなくミサイルロケットなんですか

泣いたけど僕の本心判るまい

あの日から同級生が怖いなあ

英霊はいつも祖国を見詰めてる（特攻記念館）

吹田市 山本 希久子

下り坂だんだん陰し風強し

季節感失わぬよう西瓜食べ

涙溜め過ぎたか網膜に水たまり

大らかに生きたとひまわりの挽歌

題名のない絵とやがてくる傘寿

四條畷市 吉岡 修

相槌を打ったら奉賀帳が来た

ご意見は出揃いました要は金

絵の具箱ぶっちゃけたって足りぬ色

辛い点見込みあるからだとつける

鋭角に打ち込んでくる愛もある

高石市 浅野 房子

日に一度末期の水を飲んでいる

蜘蛛いなくもの巣蜘蛛よどこ行った

目の上のたんこぶになり切ってやる

つらいなあ子猫が死んでいた朝だ

ランナーは走る一人になってもた

高槻市 井上 照子

お神輿をかついで女もえている

飲めば友競うライバルよい絆

人の世の渦いく度か越え米寿

ポケットに内緒を隠し堪えている

炎天の高校野球無事祈る

高槻市 初代 正彦

鳴き様の信念変えぬ油蟬

病窓へ回復祈る千羽鶴

何故という三面記事が多過ぎる

爺の背もちゃんと見ている幼い目

慶びを小皿に載せてお食い初め

高槻市 杉本 義昭

母が好きなだけいいいい鉛筆がコロコロ喋る句会場

雑魚なりに真っ直ぐな橋渡り切る

その他だが私なりのオンリーワン

尾鰭一杯付けて戻って来た内緒

高槻市 富田 美義

生き下手で敵の暗示にかからない

T五輪皆それぞれが望み持ち

土壇場で神を呼び出す勝手居士

葬儀屋のボスター要と付箋つけ

CMは長所を並べリスク伏せ

高槻市 富田 保子

就活は生きる敬語のお勉強

煮えたぎる胸中抑え茶を入れる

遅れても元は取ります飲みつ振り

冷蔵庫薬にビール押し出され

旅ゆかば必ず試食土地の味

高槻市 原 洋志

救急車秋を一瞬止めている

さよならを上五においたまま九月

晩秋の夜更けどこかでボブデイルン

時間差を埋めてはくれぬビートルズ

ブティックの奥で手招く秋の色

高槻市 安田 忠子

カルチャーのおしゃべり弾む良い仲間

遊んでも帰りはやはり主婦の顔

二円足りずに返送されて間に合わず

蟬しぐれ毎朝五時に起こされる

病弱の姉に頼られ惚けれない

豊中市 荒木 郁子

ギヤル神興体力勝負オーディション

山鉦の京を彩るうだる夏

天然のクーラー求め山ガール

猛暑日にゴーヤもわれも萎れそう

素麺に恋する妻の夏メニユー

豊中市 池田 純子

アマチュアのキユロキユロとなるバイオリン

揉みくちゃになってもやはり里帰り

ちちははにコーヒー入れて盃蘭盆会

真夏日の大樹の陰であつた父

花丸を今日の日記につけておく

豊中市 江見 見清

働いてはないけど税は納めてる

堅い口かわれて秘書のままでいる

どの国も防衛用という軍備

評論が上手で定まらぬ個性

丸くなり過ぎて何でもないお方

豊中市 松尾 美智代

祈る事ばかりが増えて老いてゆく

万事休す立ち上がらないパソコンよ

大切な記録が消えて少し鬱

じっとしていると老いはぐんぐん加速する

振り返り反省ひとつポケットに

豊中市 松村 里江

切つ掛けを無くして上座抜け出せず

飲み込みの早いお人で座を保つ

ドタキャンの仕打ちの痛み忘れない

遊び上手個性豊かな仲間達

イチビリはピンチヒッター要員に

豊中市 水野 黒兎

音程がずれても妻と二重唱

単調な日々ゴミ出しで知る曜日

町会の役員グチを聞かされる

大根の面取り覚えやがて喜寿

下駄箱にゲタが残っている故郷

富田林市 中村 恵

懸命に遣る気や良しと誉められる

多事多難今日も朝から神は留守

溶けてゆく脳に大きな喝をやる

絵日記に手前勝手な色を塗る

守られて大波小波泳ぎきる

富田林市 肥山 一文

自分史は消しても消せぬわが思い

元気だけそれが取り柄で日を過す

議論して声の大きい方が勝つ

亡き父と飲んだコーヒーの店今いずこ

昔から心通わす友一人

富田林市 山野 寿之

世渡りのうまい蹠持つ河童

一品のおまけは愛か父の膳

七人の敵が育ててくれた僕

一対の夫婦茶碗にある歴史

子も孫も老いを労わる風の海

寝屋川市 籠島 恵子

変わらない人ねと言われ少し鬱

モノクロになった昭和の盆の窪

夾竹桃ドレミドレミと咲き続け

三歳が手強くなった嘘その他

追伸に秋の予定が書いてある

寝屋川市 富山 ルイ子

おだやかに心安らぐまで日にち

みんなから大事にされて役降りる

選者室七年もしてありがとう

八月にもう新米が生協に

迷子札今は携帯はなせない

寝屋川市 森田 麗

盆参り般若心経早すぎて

送り火にまた来年が二十年

ひよっとして我が家のエリートお犬様

米櫃に白米移す八月忌

花の路と名付けて弾む万歩計

寝屋川市 森

茜

人去った部屋にきょとんとして夕陽

トルコ桔梗ひと枝おちよぼぐちをして

ポイ捨てをしたゆううつな影法師

雨続き軒深く干すプライバシー

救難へり爆音おとし屋根かすめ

羽曳野市 安芸田 泰子

阿呆やなあ自分を叱る一人言

常識を少し歪めて生きている

赤トンボ炎暑の中に秋の使者

猛暑続くウインドに見る秋の彩

出不精を促しに来る秋の空

羽曳野市 宇都宮 ちづる

思春期の子育て悩む娘も四十路

わたくしと寿命比べをする愛車

ネット買い知って会話をまた減らす

世間並をウェブで調べ御香典

ありがたい話仕事が少ない

羽曳野市 徳山 みつこ

山の冷気を額縁からもらう

一分の黙持家事の手を止めて

身の丈のくらし仏へ庭の花

くるくると動ける内はわが世です

衛星がたとと回っている宇宙

労わりの心も温い国訛り

場の空気察せずひとりやしやく人

老老の介護の果ての共倒れ

介護保険使用歴ゼロ払うのみ

サッカーの痛がり方はちと過剰

羽曳野市 三好 専平

保育所も老人ホームも消えた村

ギャンブル依存戦争依存へ世はうごく

あの世でも娘を抱いているみすゞ

ブラックがおいしい酷暑の地下喫茶

平均が八十なのになぜ後期

羽曳野市 吉村 久仁雄

裸電球過去をやさしい色にする

実力のなさは折りでカパーする

一人居の窓を満月狙い打つ

二本目の酒年金がむくソッポ

終章の予感小石にけつまずく

東大阪市 笠井 欣子

お坊さん見送り疲れがドツと出る

孫等帰り二ツたまったごみ袋

子に言われ八十八の誕生日

忙しく過ぎた八月の幸せ

お坊さんきれいな新車法衣乗せ

東大阪市 北村 賢子

見渡せば苦しむ人のたと居る
なごませてくれた金魚のお命日
逃げられぬ行く手互いの杖になる
蟬しぐれ消えて金魚も昇天す
心配をしてるされてるあたたかい

東大阪市 佐々木 満作

人頼みすると思わぬこと起こる
疲れたと口癖の妻今日も留守
世渡りは下手でも人は裏切らぬ
合格の通知を祝う虹の橋
抒情歌をワイン片手に聴く夜長

枚方市 安達 忠央

ホスピスは静かみんな最後日知っている
長老の一声を待ち座が静か
初対面無口同士で弾まない
定年後居酒屋の隅我が居場所
愚痴こぼす相手になつてくれる妻

枚方市 海老池 洋

豊かさの死角で危険ドラッグ売れ
台風一過涼しい声で鳴くカラス
自分史を開くと未練転げ落ち
見回せば僕だけ男専用車
人並みを嫌って白い曼珠沙華

枚方市 小林 わこ

何が何でも最の出番はお父さん
菓子一つ貰って甘くなる調べ
出合いがほしく急に片道切符買う
あなたから夢中をとればただの人
ひたすら歩く前行く母の背なを見て

枚方市 伊達 郁夫

夏の海眺めて風に触れてみる
太陽がきらきらしてる寝ておれぬ
赤ワイン恋の沸点上げてます
残された人生囁んでまた囁んで
原色の夏がじとじと溶けていく

枚方市 寺川 弘一

愛犬は私の教えよく守る
下戸だってお酒を使う隠し味
手配写真は本人の一番悪い顔
この猛暑水遁の術学ばねば
妻が留守矢張り寂しくなるもんね

枚方市 二宮 紫鳳

蟬の声小さな庭を独り占め
この猛暑追い打ちかける蟬の声
手作りの野菜に元気をもらう夏
打ち水に涼風うけて遠花火
日焼けした孫の笑顔がおもてなし

枚方市 二宮 山久

趣味多忙宝を抱いて生きている
腹時計確かな時を刻んでる
命ある限り酒税を納める気
腹の虫収まり兼ねて出る散歩
定年後シナリオ通り生きている

藤井寺市 伊藤 アヤ子

ワンちゃんもくつ下履いて炎天下
この夏もど根性西瓜ありました
涼しげな風鈴の音にうとうとと
大好きな西瓜があればいいのです
熱さが増す蟬の鳴き声身にしみる

藤井寺市 太田 扶美代

ネクタイの歪んだ人にある魅力
神様はなぜか私に手厳しい
怪獣の絵孫のサインが頼もしい
花のある暮らしで一日が早い
パソコンができますなんて少し法螺

藤井寺市 鈴木 いさお

秋や良し五臓六腑はみな元気
老後とはこんなに暇が無いものか
飢餓の子へ届いたろうか義捐金
誰も見てなくても信号は守る
午前零時動き始めた都市砂漠

藤井寺市 高田 美代子

銃後の守り苦勞苦勞を語り部に
いのちがけで生きて来たのは高齢者
戦争の話をしなくなった父
靖国の柱は安らかであるか
戦争に勝っても嬉しくはないぞ

藤井寺市 津田 シルク

リフォームに柱のキズは遺しとく
ほんの少し脳が冴えてるまに作句
財産はお金でないと孫に説く
タクト振る蟬を見つけに朝の森
時世どうあれ衣食住足りている

藤井寺市 俣野 登志子

孫三歳確かにピカソより上手
川柳の合間の家事と夫言う
入社時は下戸定年時はアル中
忘れてました死ぬの生きるの言うた事
過去形の話が多くなる傘寿

藤井寺市 吉田 喜代子

肉無しの野菜カレーも夏の味
ひもじさの辛さ知ってる平和展
図書館を書斎にしている男達
バス旅行おんなの好きな道の駅
特殊詐欺無い袖振れぬ幸もある

藤井寺市 若松雅枝

嫁の留守キッチン今日は我が天下

中国チキン知らずに食べた恐しさ

九十歳ギネスブックに程遠い

猛暑豪雨で出番の来ない万歩計

莊嚴な秘仏を拝む山の寺

松原市 森松まつお

植木市妻に馴染の店がある

昼寝から覚めると雨の降った跡

風呂掃除かけて花札対決中

あの芸人出るとチャンネル変える妻

方向音痴余分なことは覚えな

箕面市 酒井紀華

赤鬼をいっぴき飼って襟ただす

眉をかく今日の迷いがそのままに

細やかに私ひとりの乱おこす

たわいない夫婦の会話ほしくなる

赤いセーター沈まぬように自己主張

箕面市 出口セツ子

年だなあ八度の熱で起きられぬ

服ブラシ靴と労らない夫

メロンスイカ好物ばかり子が帰宅

買い物も看病も子がしてくれる

看病でうつし心で詫げる風邪

箕面市 広島巴子

初盆の母へ迎え火赤赤と

子ら帰省スイカ丸ごと冷やし待つ

村過疎化ますます店が遠くなる

月下美人一夜の逢瀬切なすぎ

暑氣払い友と長いティータイム

守口市 井上桂作

遺言を残したいけどネタもなく

書きました読まぬ自分史残すだけ

ヘソ繰りを妻のペン字でありがとう

歯をなくしそばの食べ方うまくなり

好奇心八十路すぎてもなお盛ん

八尾市 内海幸生

長命はメタボ気味だと聞く迷い

朝顔へ生命の水を忘れかけ

羨んだ光源氏が見た地獄

地獄へは行きたくないが無理やろか

事故の記事免許返納決めたけど

八尾市 高杉千歩

長生きを勿体ないが持て余し

人生八十年驚きません米寿

消費税じわじわ年金減っている

ゆるキャラの中を思うと笑えない

手の甲に書いて忘れた仕舞い風呂

八尾市 寺川 はじむ

年金のおかげ分つて出る不足
納得の旅から帰るなり茶漬け
大げさと思いたくなる蟬しぐれ
ロボットの介護に人手恋しなる
貰います若返るなら玉手箱

八尾市 宮崎 シマ子

年金の額に合わせてひとり旅
健康法みんなやったら一日がかり
大水警報故郷の家の横の川
地震台風父さんだけが真面目です
呆けたふりして家族の愛を確める

八尾市 山根 妙子

今月のひらがな手本恋の文
ビール税名前替えても追ってくる
地球儀に弾が飛び交う痛ましき
軍服の父の写真と会う葉月
体操に蟬も奏でる夏の朝

神戸市 白川 淑子

野の花の様にシンプルイズベスト
衝動買い女に乳房有るかぎり
花子とアン猫が起こしに来てくれる
気が付けば抜き差しならぬお婆さん
まかしとききつねうどんのリクエスト

神戸市 能勢 利子

優等生よりやんちゃが光るクラス会
夕食を待つ人いないのも気楽
燕の巣大事にしてたやおやさん
年金日ばあちゃんちよつと太っ腹
百円メガネいくつあるのか分からない

神戸市 福原 悦子

御苦労と磨いて使う農具あり
父母の遺影に満ちている追慕
生家の空気の中で深呼吸
涼しさも暑さも体に満ちて来る
小さいが重く古里に居る

神戸市 松井 文香

夢叶い永久の眠りは高野山
決断は直感信じ惑わない
高くても叶う日のある志
三代でほたる見に行く夜の和音
終章は「ありがとう」だけ書いて完

神戸市 山口 美穂

触れないでただ今脱皮しています
あほやなあ今日はここまで探し物
平成の世にと娘に笑われる
敗戦だとまだこだわっているわたし
メロンより西瓜が性に合っている

神戸市 山崎武彦

尼崎市 市坪武臣

焼酎に嘘少し割り盛り上げる

割り勘が苦手でいつも損をする

生と死の隙間で少しだけ遊ぶ

雨の日は君の体温ほしい夜

飛び切りの笑顔がお茶を出す職場

明石市 糀谷和郎

幸せの切り口きつと丸いはず

やらねばのゝねばが近頃纏い付く

法話聞く菩薩の色に染められる

フランスパン気分はバリへ急降下

ラーメンを食べる矢先に鳴る電話

芦屋市 黒田能子

この歳になっても暗闇が怖い

妻だからあなたにつらいことも言う

切り札はやはりあなたの笑顔です

素のままで暮せる人とリラックス

バタバタとするから余計泳げない

芦屋市 竹山千賀子

自叙伝の中にもう一人の私

生きていく角度に首をすげ替える

明日には優しい風になれそうだ

許そうと空の高さを見て思う

許す気になってコーヒー入れ替える

割り箸は使ってませんこれもエコ

体力が落ちてきました四股を踏む

約束のかたい握手にある安堵

サン Glas きちんと外し銀行に

手渡して受けた賞与のありがたみ

尼崎市 加川靖鬼

飛び出さぬように押さえた二枚舌

底上げの靴で世間が広く見え

停まったらマグロと同じ轍を踏む

スーパームーンいつもと違う夜の闇

句読点わたくし流に打つ手紙

尼崎市 春城年代

うちの水ぐいぐい飲んで落ち着けた

仕残した後悔ばかり増えてゆく

兄だけがホントのことを知っている

柳行李でお嫁に來ました戦時中

これが人生終着駅で充たされる

尼崎市 藤井宏造

過疎の村虹を見ている老案山子

眼帯を外して視野を広くする

悪筆はかわつていない古日記

男の顔のこけし人形見かけない

それから知らないままのシャボン玉

尼崎市 藤岡りこ

可愛かった癖も今では鼻につく
息子の癖を叱るがあなたそっくりよ
ピアスした浴衣ヒールで闊歩する
いつだって若くていいな妹は
雨の日の散歩スッピン心地良い

尼崎市 山田耕治

一年生のノート覗いて見ましたか
いいお部屋ですが夜通し波の音
太陽をもったいないと思う夏
打たれ強いなどと勝手に言わないで
ピンチピンチ先ずは机を片付ける

加西市 金川宣子

孫が来るだけで頑張る大掃除
一人居はショートケーキで誕生日
台風が邪魔して遊びキャンセルに
自分史に書けぬ部分がきつとある
蕎麦打ちで味に深みの祖父の愛

川西市 西内朋月

缶ビール末期の水のように飲み
のほほんと年金だけで生きている
古里の夢追っている赤トンボ
線香の煙がしみている仏事
お茶よりもお酒が欲しい友がくる

三田市 石原歳子

故郷の蕎麦はおいしい日本一
ひとりぼっち心の傷はそのまんま
レシートの子エック今でもしています
胡瓜囃むこれぞ真夏の音がする
電線の陰を笑って歩いてる

三田市 上垣キヨミ

朝飯が旨い幸せ咀嚼する
昇る陽に家族の今日の無事祈る
自分史に綴る戦中派の記憶
大型の店舗が街を破壊する
ふる里のニュースも届く夏野菜

三田市 尾崎一子

グルメよりママが作ったオムライス
キラキラと美貌を狙う紫外線
三猿を指す私の肩が凝る
食べて寝て明日を生きる好奇心
朝ドラのデンスケさんに朝の恋

三田市 北野哲男

五年生あなどり難いことを聞く
里の家漬物石も役を終え
村まつり笙ひちりきもテープから
喜寿と古稀放物線のどのあたり
流れ矢に当ってからの五十年

三田市 久保田 千代

風向きの变りに気づく子の育ち
幸せも太郎花子が分けて来る
終戦の暑くて長い日も遠く
食慾が豆腐のように崩れる日
ゆつくりと聞く耳心ひらかせる

三田市 福田 好文

酸欠を知らず金魚の丸い口
遠花火律儀に音が後を追う
目覚しが起こしてくれた頃が華
オール3屈託の無いランドセル
ロマンズグレイ夢見た男髪が無い

篠山市 北澤 稠民

人間は強さと弱さ共にもち
松蟬の声を背にして神参り
いろいろな出会いがあるから生きられる
今日もまたよく働いた背伸びする
あれとこれ片付けすぎてもの忘れ

篠山市 酒井 健二

世渡りの上手に愚痴を聞かされる
上等な自慢話に聞き疲れ
カッコ良く生きてる人の真似をする
山頭火真似て四日の旅終わる
食う事を一日休み身を愛う

宝塚市 田中 章子

仮面の乾いたところださあ出かけよう
寺参りやたらと増えた夫婦道
食べることだけは気の合う夫婦です
完熟のベリー早起き鳥に負けぬよう
電話下さいと娘にまずメールする

西宮市 秋元 てる

人間はか弱いものと蚊が笑う
科学にも切り張りがある面白さ
その主張一度括弧に入れて見て
待つて見る任せても見るとそれが愛
見る位置を替えたなら変らぬ人でした

西宮市 足立 茂

海鳴りはボクを励ます亡父の声
履歴書に夜遊びと書く特技欄
挨拶もできぬスマホの副作用
古希だから余生見直す句読点
即答は避けてタバコで間を稼ぐ

西宮市 梅澤 盛夫

年金という安定に居る不安
凡でいい人の気持ちに汲める子に
元気で卒寿迎えた甲子園
故郷の応援に行く甲子園
ほっとするタバコが吸える喫茶店

西宮市 緒方 美津子

濡れ落葉一念発起してカルチャー
みんなが笑うから僕も笑つとく
病院のある駅なんだこの手摺
けんかして野仏の笑み思い出す
保険屋と妻時々小声になる

西宮市 亀岡 哲子

自己流で医者に逆らう匙加減
和田監督思えばしょうもない悩み
8%に馴れて刺身の盛り合せ
SMAPの中の二人の名が出ない
OGだつてみんな若いなTAKARAZUKA

西宮市 西口 いわゑ

ハイビスカス悩むわたしにぱつと咲く
スランプの脳に時々酒満たす
日野草やさしい彩でなくさめる
さるすべりふつと故郷うかび来る
マチユピチュへ雲よ乗せてはくれまいか

西宮市 福島 弘子

文豪の個人情報丸裸
ペテランの中でお尻が落着かぬ
暑中見舞返事書きたくない暑さ
アサガオの青に胃袋目を覚ます
寝てばかりの猫もお腹はすくらしい

西宮市 牧 渕 富喜子

明け方に昨日の重さ眠らせる
曇天の八月六日蟬しきり
父母の顔祖父母の笑顔盆に入る
よく似てる句と言われてもオリジナル
世も末と思うテレビを消している

西宮市 山本 義子

歳月はそろり傷心癒します
量はいらぬおいしいものを買うてくる
無手勝流料理ですでも母の味
頑張ろうひとりにだつて明日はある
夕焼けよ今日も明日も一緒だね

西脇市 七反田 順子

こつこつと積上げて行くツバメの巣
マスコミのいじめ学者が耐えられず
常識の境界線は何処なのか
納得の講和に耳も冴えてくる
転換に青春切符泳がせる

姫路市 古川 奮水

夏休み若さが跳ねて旅弾む
秘密箱箱根土産に知恵試す
河童橋カメラへ暫し立ち止る
山歩くあいさつの声清清し
一番星ネオンの海が防げる

奈良県 中原 比呂志

白ばかり黒ばかりではない情
満腹感得られぬままで待つ次号
爆発音歓声あげる平和な夜
直球をカーブと感じる読み違い
泣きどころ握って数を引き寄せる

奈良県 渡辺 富子

ふる里のみどり香ってくる便り
しがらみを捨てて涼しくなりました
切り捨てた想いに未練ありません
どうしても夫残して逝けません
につこりと運命線を撫でる医者

奈良市 阿部 紀子

彼岸花亡父の命日花盛り
車窓から世界遺産のさすが富士
東京駅ホテル変わらぬおもてなし
スカイツリーの眺め勝つてハルカスに
苦節越え品格備えみんな喜寿

奈良市 岩本 浩二

見栄張って少し背伸びの法螺を吹く
嫁いだ娘客の顔してやって来る
妻の槍ピタツと的を突いてくる
近未来今のまさかが陽の目見る
フアスナーの悲鳴聞こえる試着室

奈良市 加門 萌子

この猛暑節電すれば死にまする
ほんとうの夏ばて残暑の頃に出る
人間の心の闇に打ちのめされ
平和祈念首相が行って涙雨
原爆の惨禍を越えて頑張った

奈良市 辻内 げんえい

夏休み孫の来襲心待ち
コレステロール気にして食べる目玉焼き
旅に出て朝市ぶらり気が和む
ネジ巻きのブランド時計亡父の顔
孫跳んだ溝が爺には遠すぎる

奈良市 天正 千梢

念の為鍵でも掛けておこうかな
念入りに置いた所をまた忘れ
二幕目そろそろ弁当広げようか
ボールペン探している間に句を忘れ
贅沢な昼食今日はうなぎ丼

奈良市 山本 昌代

日々快晴小さな幸と巡り合う
階段を使って老いをせき止める
日陰選る忍者のような足さばき
あのねばあば百歳までは大丈夫
絵手紙に描きたくなった花の色

祝卒寿川柳塔社甲子園

奈良市 米田恭昌

雲の果てあとは頼むと往ったきり

九条固守性善説を疑わず

有頂天これ見よがしに伸びる鼻

お隣のドラマ窓からまる聞こえ

生駒市 飛永ふりこ

いざこざの真ん中夏かぜが襲う

砂浜でかけっこセーラー服の恋

激励もどんでん返しある浮世

へこまずに地道を論す仏さま

ポイントがずれてモザイクかかり出す

大和郡山市 坊農柳弘

胸に棲む虫一匹を手なずける

浮き雲にひと色足して秋を詠む

逆らえぬ位置で腕組みしたまんま

遺らずの雨おんな一人の宵化粧

らしからぬ秋にコスモス拗ねたまま

和歌山市 岩本美智子

五七五へ心写せぬ口惜しさよ

速達料局へ尋ねる締め切り日

とうふそうめん体重計に勧められ

時は走る足うごかずに嘆くとも

おしゃれ好き紅もさせずに点滴を

割り切って片付けられぬ人の道

計算が絡むと答遅くなる

本屋閉じ読書の秋が消えて行く

大映し朝から見たくない画面

向う意気チョッピリ残す八十路坂

和歌山市 楠見章子

子は自立住めば都のいいコンビ

さりげない仕種美人の背に習う

大皿に盛った田舎の人間味

賞味期限少うし残す声の張り

友情というお宝を抱いている

和歌山市 武本碧

目の前のヒントに何故か気が付かぬ

休みなく管理されてる電子音

ライバルも地獄で逢えば無二の友

たそがれて自己満足の旗を振る

愛という諸刃の剣抱いている

和歌山市 玉置当代

梅漬ける亡母の教えが生きている

肩の荷を軽く断捨離決意する

身辺整理そろそろせねば間に合わせ

歩行訓練そろそろそろとなる術後

精いっぱい動いて今日の絵を描こう

和歌山市 土屋 起世子

黙秘権いつまで続く金魚鉢

自分だけの家事洗濯は苦にならず

近すぎてお互い愛に気付かない

見えなくても欲しい物あり生きている

羽繕い飛び立つ夢を捨てられず

和歌山市 福本 英子

盆が来る御巢鷹山へ散った友

台風十一号やはりテレビのお守りする

二円不足とハガキに付箋ついてくる

月見草似合わぬ道の割れ目から

傷つくが少うし鈍いのが救い

和歌山市 古久保 和子

父の帽子掛けるためなら釘を打つ

新盆の友と今宵は酌み交わす

晴雨兼用の傘でお役に立ちましょう

わたくしの影を切り絵にして飾る

自己暗示月下美人の開くとき

和歌山市 堀 富美子

お喋りも毒気を抜くと和が弾む

楽な方らくな方へと転ぶ毬

嘘つけぬ鏡私をお見通し

熱中症エコと命を替えられぬ

味しめた道楽元へ戻らない

和歌山市 松尾 和香

仏様空気になって側にいる

心にもふるさとの山父母が住む

山越えた人生だけどいい笑顔

川柳の神が支える生きがいも

ふるさとの海に癒され幸続く

和歌山市 松原 寿子

ストレスを故郷の風が吹き飛ばす

小銭たちが汗の心を知っている

蒼い炎を灯し続けている日記

和食好きだけどソースも手放せず

癒す言葉包み扉をノックする

岩出市 藤原 ほのか

自分史の余白を埋めるありがとう

寄せ植えて私の個性光らせる

花一輪飾り命を深くする

モノクロの母の笑顔に諭される

モノクロの世界に夢が詰まっていた

海南市 小谷 小雪

ご近所の御隠居の耳遠くなる

これからの計算合わぬかもしれぬ

朝顔の蔓私より頑丈だ

メールより勢いつけて来るハガキ

樹の陰で次の一步を拵える

海南市 堂上泰女

幸せの空間心足る人と

アンニユイを脱却したく海に出る

明朗闊達いつも爽やかなあなた

八月の雲のカーテン有難い

色付いた千日紅に亡母が立つ

紀の川市 宇野幹子

夏みかん重い命がぶらさがる

野茨の白そのままに少女の死

軍艦を二隻並べて孫のくつ

歯ぶらしをくわえて見入る大惨事

張りつめた心ゆるめて喪服解く

紀の川市 北山絹子

足音が途絶え震えがとまらない

鍛えれば付いて行けそな歩数計

面白い人の側には敵がない

なつかしい女に出会った始発駅

生かされていつも同じ朝が来る

紀の川市 辻内次根

絵の中が風雲急を告げてくる

思い出し笑いをしなくなった日々

ボンボンと外で花火の音がする

人生の晩秋である蟬時雨

平凡な今日にピントを絞り込む

田辺市 岡本昇

やれる時やりたい事をやっている

歩くのが仕事シューズを買い替える

中居さんの立ち居振舞い無駄がない

飲んで寝て起きて文句を言う夫

お早うで今日の元気を分かち合う

橋本市 石田隆彦

梵鐘が寺の空気を浄化する

お通夜の空気じつと動かない

隣りから良い香を乗せて扇子風

野良仕事続け曲った母の腰

晩成と信じた夢も折れた今

水煙砂

(つづき)

弘前市 吉川ひとし

近所の輪無職になって見えて来た

雑巾を絞り握力確かめる

激流に揉まれ河口の砂になる

十円の玉子で済ませます朝餉

つくば市 嶋本喬

戦争と無縁の大和魂を

熊蟬が朝を乗っ取る温暖化

未だ残る空き官舎住み避難民

夏水仙咲き連なつて秋呼ぶか

川柳塔の

川柳讃歌

(118)

木津川 計

微積分分実用もなく喜寿祝つ

澤井敏治

男が3人、女が2人いる。縦一列に並べるとして何通り並べ方があるか、とあるときの座興にだれかが問うた。50通りぐらいと違ふかと皆は言い、そんなもんやろと僕もうなずいた。ところがなんと、5040通りと問うた男が答えたから一同嘩然としたのだ。

「順列組合せの簡単な問題や」と公式を説明されて思い出した。高校生の頃、微積分分とともに習うたおぼろな記憶が甦つたが、敏治さん同様、実用もなく僕は喜寿も過ぎた。

もう会える機会もないと友が来る

江見見清

知人のAが死んだあと、あちこちでAの言動を聞いた。行きつけの飲み屋を訪ね、付け金を払って回った。中に、何年もそのままの借金を返済に行った。電車に乗り、借りた本を返しにも行った。Aの計報はそれから間も

なくだった。「あれが別れの挨拶やったのか」と誰もが言い、身辺をきれいに片付けて逝つた、その振る舞いに感心した。僕もかくありたいと思う、となると、さていつから始めるべきか、早過ぎず、遅過ぎず、これが難しい。

体重の半分ほどは恥である

原洋志

人間の体重、その半分以上は水分だという。成人の60〜65%。老人の50〜55%を占めている。老人が少ないのは、筋肉の衰えと同様に細胞内の水分が低下するからだ。皺ができてたるみが生じ……。即ち老化である。

すると洋志さんの体重は恥と水で成り立っている。こんな奇怪な人物がおりますぞ、と叫べるか。僕は半分の水分に恥が4分の1、不義理が4分の1、懺悔の塊が人間を装っているのである。洋志さん共々恥じ入る他ない。

さわるでないさわるでないというに桃

緒方美津子

露の五郎は怪談咄の名手であるとともにバレ咄(艶ばなし)の達人だった。こんな咄だ。「結婚なさいますとお結いになる頭が丸鬚、年とともにだんだん鬚が小そウなつて、後家はんになると切り髪。もうすぐお嫁入りするなアという年頃が桃割れ。どっから考えてあんな名まえつけたんでっしゃろ。もうじき嫁

入りやさかいモモ割れて、情がおますなあ、これだけの咄と仕種にエロがにじんだ。桃割れも桃も美津子さんに従い、触つてはいかん。あべのハルカス大阪井は似合わない

藤井宏造

気を張り、構えて行かねばならない百貨店など御免蒙りたい、と言いながら家内のお伴で僕も14階のレストラン街へ。エレベーターで20分待ち、二度も参りはいたしませぬ。やっぱり大阪人は、「ハルカスより通天閣の塔が好き」(指宿千枝子)だし「ハルカスに名所譲れぬ通天閣(宇都宮ちづる)に軍配を上げると今号で。えらい人もいて鈴木いさおさんは「普段着のままハルカスに登る」と。

大方はバートで支えてる社運

岸野あやめ

只今の非正規雇用者は1996万人で過去最多。全雇用者5274万人の37・2%。正規の平均年収467万円に対し、バートを含む非正規は168万円(うち男性225万円、女性143万円)。(このデータはいずれも日刊ゲンダイ8月28日の政府統計)

天国と地獄ほどの開きである。雇用者の4割近くがこんな低賃金でながアベノミクスか。あやめさんの指摘通りにバートが土台だ。

〔上方芸能誌発行人〕

西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

香港マカオ行

団体の我が年頃に似た夫婦

足腰のたつ間という旅だより

母のせてマイカー制限速度なり

旧友に齒医者のあるを思い出し

釘箱の釘大きすぎ小さすぎ

印相まで気にする程の不倖せ

栗ごはん嫂の在所をたずねられ

髭の社長菊の一鉢約束し

元旦や米寿の母を囲む幸

元旦や我泰山の如く座す

六疊は我が城にして黄水仙

寄せ書きが円陣となる良い仲間

テトラポッドあざらしに似て冬の海

もういつぺん欺されましようと言妻が言う

夫婦円満女房上位とはいわず

満ちたりた舌山菜をほめちぎり

石段は記念写真を撮るところ

音痴もうここまできると拍手もの

母の日の米寿の母は家宝めき

夕月に誘われて出て恋でなし

漫才師電車の中で目をつむり

漬物がいっちおいしい老夫婦

読初めや句集旅人福寿草

自選集

小島蘭幸

フィアンセと僕と重なるところが無い
フィアンセを呼び捨てにする孫がいる
見詰め合う二人遠くを見る二人
熱熱を妻よ妬いてはいけません
天高しふたりにエール響き合う

西出楓楽

売り言葉買わなくて悔い買って悔い
苦瓜の苦さは一家言を待つ
AKB好きな男で他愛ない
この暑さついついおんな忘れそう
猛暑日の脳から何も生まれない

仁部四郎

定番で安心代読無事終わる
定番の折詰め昭和の子らが待つ
定番でブランド里のお漬物
安心の定番それは風寛氏
定番を外した弔辞なら受ける

波多野五楽庵

過去形で話せば暗いことばかり
手をつなぐ事も忘れた夫婦です
ほっとする言葉一行書き添える
心電図話せば長い物語
つまりいた事は言わずに石をける

林瑞枝

山紅うカメラの放列浴びている
シャボン玉飛んで燕の毬となる
タレントの笑いを活ける花ばさみ
しなやかな右脳の友の良い笑顔
蟻たちに優しいキリンの長い足

前たもつ

金婚日家族五倍に増えました
柳誌読み電話する人二三
独り居の古里思う帰省時
町平和知って猪子ども連れ
飯の世の旅をゆつくり二人連れ

政岡 未延子

老いは密かに眉根のあたりからすすむ
耳鳴りに交じる蟬の大合唱
秒針がとつても速くまわつてゐる
どの部屋も老いの匂いがしてならぬ
老いてきてその日その日の温度差よ

三宅 保州

生きていることに油断をしてしまふ
四捨五入したら三日月消えました
菓子折りの底の小判で食あたり
流麗なひらがなを書く親日家
イチニイサンの三と説明する漢字

宮西 弥生

好きなだけ遊ぶひとりの24時
乾杯の泡がひとりに刺激する
コスモスの迷路にいまもあるらしさ
人間の匂いが欠けていくメール
天空の青と会話をしてみたい

八木 千代

伐る
私が植えてわたしと老いた木が枯れる
道行く人に香りを撒いていたその木
いくつかの訣れを庭も知っている
想い出が濃すぎて揺れているのです
宿生木も虫もゴメンネ伐るつもり

両川 洋々

等距離を保つ鬼とも仏とも
反戦を叫ぶピカソの絵が叫ぶ
亡母の住む星座が好きになりました
年金を持つて檜山行くと決め
妻よ子よ愛の狼火が見えたかい

板尾 岳人

太平洋に地球が浮いている喜劇
ナポリからローマの月を観た手紙
樹に登り曾根崎心中観てる猫
表札は八月十五恐れない
近代化拭いて流して乾かして

奥田 みつ子

小銭だけでも千円は千円だ
お互いさまと思えばみんな許せそう
歳の差を埋める優しさ祖母と孫
余命みじかし雨のち晴れと信じたい
いつも待つて夕立のあとの虹

河井 庸佑

発想を換えてヒントを見付け出す
捨て石で相手の出方読むとする
愛犬も老いてゆつくり散歩する
どちらとも取れる言葉で躲される
反論を自問自答で吟味する

川 上 大 輪

ダイエットしよう隠れるところがない
自由っていいね二度寝が出来るから
副作用かもしれないがいい調子
簡単に切れなくなつた足の爪
ユーモアの数だけ哀を抱いている

小 西 雄 々

腰痛むコマーシャルではすぐ直る
蓮の葉にもう座つたか逝つた友
口ひらき蜆は何を思ふのか
馬が啼く軍馬以来の久し振り
くじ運は無いが戦地の生き残り

斉 藤 嘉

さりげないことばの奥にある温み
手づくりの梅酒にいのち洗われる
散りそうな花だがそつと水注ぐ
ダム底で村のドラマが生きている
豊作の汗をいたわる子の版画

新 家 完 司

天国のまどろみ起床五分钟前
のどあめを三つ舐めても知恵は出ず
軽率に言つてはならぬ「かわいそう」
あの世でも同じ仲間で乾杯だ
ほどのほどが解けて二日酔い

津 守 柳 伸

恐ろしい地震台風自衛権
四人旅シニアプランへホイサツサ
あら川の桃は格別亡母の里
クーラーはせぬ根性にアイスノン
丁寧に暮らし八十路を恙無く

土 橋 螢

誰よりもやさしくなれる日曜日
定型の恋を品よく整える
台所の近くに何もせぬ男
ソーメンを流すふるさと此処にあり
償いと思ふトイレの掃除する

都 倉 求 芽

浮き世とやお互いさまで過ぐす日々
夏なんかこんなもんだと汗の背
明日の分取り残しておくひとり
抜け殻になる夜もあつて遠い星
約束をみな焼きつくす大文字

第20回 川柳塔まつりは

10月4日(土)開催。

詳細は9月号表紙裏をご覧ください。

第56回 豊中市民川柳大会

と き 11月23日(日) 正午開場
 ところ 豊中市立中央公民会館1階ホール
 会 費 1,500円(記念品・発表誌呈)
 宿 題 (各題2句・13時締切)

「謀 反」	長江 時子	選
「鈍 い」	天根 夢草	選
「うすうす」	上野多恵子	選
「伸 びる」	住田英比古	選
「アナログ」	了味 茶助	選
「無 理」	森口 美羽	選
「と ろ り」	川上 大輪	選

ジュニアの部(事前投句) 11月22日必着

宿 題 (各題2句)
 「 風 」 「 雨 」

連絡先 田中 登柳

〒560-0033 豊中市蛭池の中町2-3-1-411

TEL 06-6853-0470

主 催 豊中川柳会・豊中市立中央公民館

第38回 寝屋川市民川柳大会

と き 11月3日(祝日) 午後1時開場
 出 句 2時締切

ところ 寝屋川市立 産業振興センター
 5F 大セミナー室
 〒572-0042 寝屋川市東大利町2-14
 (京阪寝屋川駅 西側 徒歩3分)
 TEL 072-828-0751

会 費 1,000円(投句 82円切手 5枚)
 おはなし「九条活動で学んだこと」
 荒川 鈍甲 氏

題と選者(各題2句)

「楽 園」	久世 高鷲	選
「怠ける」	井澤 壽峰	選
「浅 い」	平松かすみ	選
「浪 人」	村上比呂秋	選
「計 る」	久保田千代	選
「伏 兵」	村上 直樹	選

投 句 10月29日必着 下記事務所宛
 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9
 高田 博泉 方 川柳ねやがわ

主 催 寝屋川市川柳協会

温故知新

『谷垣史好句集』より

横道が好きで歩いたわけでなし
 ボタン一つとれたままなり百カ日
 ヘソを見てこわい顔する人はない
 湯に浮かばいつそおかしいあばら骨
 平和主義者ばかりではない駅の鳩
 おんな運ひとつ消えたらみな消えた
 クラリネットはときどき粋な嘘をつき
 理不尽は声の大きな方が勝ち
 幸運はいつも股間を抜けて行き
 楕円球より扱いにくいのは女
 ひとりだけ育ちが違うメロンパン
 年月や友だちでなし恋でなし
 お湯が出る暮らしにはなれませぬ
 追い出した猫にときどき町で会う
 戒厳令の夜は抱き合うほかはなし
 桜散る男尊女卑も美事散る
 夢の一つに君と時計のない暮らし



西 出 楓 楽 選

松山市 栗田忠士

割り切ったつもりへ灰汁が浮いてくる

曖昧もあってこの世を生きられる

喇叭吹く者がいなくて立ち消える

生きるとは息することと辞書にある

嵌ったら抜け出せそうもないスマホ

ステテコが大手を振ってクールビズ

横浜川島良子

少しでも寄り道してもいいですか

ゆらゆらと揺れるところは罪ですか

ハードルを下げてストレスから脱皮

平穏な暮しの中にあるまさか

暑さには勝てるが淋しさには負ける

平均寿命延びてため息ひとつ出る

山口市 中前幸子

雨だれのリズム飽きずに聴いている

身籠ったらしい無口になった風

わたしはかもめ漂う夢のエーゲ海

騙し絵の中へ逃げ込む処世術

省略をし過ぎて影が消えてゆく

パレットへ原色を溶く濃い日差し

河内長野市 大島友子

ふるさとの風はいつでも羅針盤

薄味を旨く感じる妻の毘

女心誘う秘境の美人の湯

老いの坂物を増やさず友増やす

リタイアの夫を育て直す日日

鼻の下伸ばす夫にチクリ釘

倉吉市 中村毅

こんなにも瘦せたと煽るコマーシャル

夏痩せをしたら私は骨と皮

朝練のランペットが目覚しに

風鈴も役に立たないこの暑さ

O型で酒が好きです蚊の餌食

脳テスト受けてみたいがちと不安

鳥取市 田 中 天 翔

出雲大社ビッグニュースがおめでたい
ふるさとに積もるストレス置きに行く
ごめんなさい生きるためにはズルをする
泥仕合逃げるが勝ちと決めている
骨休めしたらどうかと蟻に言う
ありますわ浮いた話の二つ三つ

神戸市 山 根 弘 子

使い捨てられないように脳みがかく
高のぞみすぎて階段踏みはずす
吉報を今か今かと待つ夜明け
手のひらで愛をころばすにくい人
終章にわが人生の会心句
狭くても住めば都の十五階

岡山市 前 田 恵美子

線香花火打ち上げられる夢をみる
老いてゆく姿を見せてくれる父母
長寿会誘わないでよまだ翔ぶよ
四十年添っていびきも子守り歌
茶柱の立った湯のみを手で包む
生きるのが下手でいつでも体当たり

大阪市 田 中 ゆみ子

頑張ってみよういろいろあるけれど
快い毒舌くれる君が好き
肩の荷を下ろした途端医者通い

腹にないものは決して出てこない
いい事がありそう朝顔が五つ
好きにせよ責任逃れともとれる

岡山県 田 中 恵

刈草の匂いが残る風が好き
ほどほどの喧嘩相手で仲が良い
必要になって気が付く忘れ物
はつらつと洗濯物は陽を浴びる
拭き掃除老眼鏡が指図する
手探りで百まで生きる夢を追う

大阪市 寺 本 実

子が嫁ぎやつと書斎に恵まれる
真実はいつも真綿につつまれる
手短かに言えばやる気がないので
卑屈にも天狗にもなる自尊心
無理ですか飲んで騒いでポックリと
善処するそれは前にも聞きました

瀬戸内市 東 槇 ますみ

まだパワーあるから明日の靴を買う
パワー全開今日も明日も鳥になる
本心は隠して磨く赤い爪
夏過ぎて答がだせぬ握り飯
過去形をたぐりひと日を遊ばせる
共白髪聞こえぬふりがうまくなる

東京都 川 本 真理子

失くしたものはかりがよぎる炎天下
うたたねから危うくもどる夏の午後
夕暮れに不思議と羽化の予感あり
白い猫暗闇に身を置いている
鬼を待つ一人でできぬかくれんぼ

佐渡市 高 野 不 二

郵便が今日一日のおたのしみ
新聞はざっとじっくり見るチラシ
利子がいい三年定期組む傘寿
肩膝の痛み自分でする初診
終活に先ず出して見る預金帖

静岡市 渡 辺 芳 子

激動の中よく生きて来た自分ほめ
よろこびを上手に生きる八十路すぎ
うれしがりそれがよかった八十路すぎ
今生きる身体全部にありがとう
夢を持つかなわなくても豊かです

江南市 脇 田 雅 美

流暢に話す言葉に不安感
紅一点男の中で鍛えられ
恋グルメ心がいつも躍ってる
頼みごと困らせている神仏
団塊人義理人情を重んずる

豊橋市 藤 田 千 休

井戸端にコメント好きな評論家
自衛権日本の平和チャラにする
多数派のエゴが九条弄ぶ
朝の来ぬ夜は無いよと不眠症
スピーチのよいしよに虫歯疼きだす

小野市 田 中 辰 夫

ピカピカの子供の笑顔夏休み
トロよりも俺の懐赤好き
夏休みバーベキューにも飽きて来た
和食より肉を頬張る古稀祝い
夏休み終って元の過疎の町

長岡京市 日 置 み どり

好物の初物揃え待つ帰省
される人無垢な瞳に恥じるべし
タイマーに管理されてる我が料理
レシートをもらい商品置き忘れ
災いは軽い口から始まった

大阪市 太 田 と し お

毎朝がその日その日の初日の出
名人も時にはミスることがある
正直者に神も仏も味方する
消費税これから長いおつきあい
記憶力良すぎて時に嫌われる

大阪市 大 治 重 信

七人の敵に加えて妻を足す
重ね着に記憶を順次脱いでゆき
帰省子の大人になった喉仏
台風は逸れて行ったとちろろ鳴く
敬老のお祝ですとタオルくる

大阪市 柴 本 ばつは

先達の踏跡シカと踏みしめる
お帽子は赤と決めてる富士登山
貧しかったけど頑張った若かった
やりくり引けをとらないうちの母
そこそこの甘さからさで子を育て

大阪市 高 杉 力

新築は整骨院かケアハウス
ほとんどがS席だったコンサート
さつきまで寝ていたくせにアンコール
百均に行くとアレコレ欲しくなり
短いと並んだレジはアルバイト

大阪市 橋 本 典 子

猛暑にも負けるもんかと茄子実る
楽しみに家事が出来る日絶好調
甘やかしペット私を目で使う
昔人こんなに不平言わなんだ
早起きの蟬に起され二度寝する

大阪市 藤 田 武 人

卒業の組体操に涙する
嬉しいな妻が浴衣でお出迎え
下心見えているのに騙される
騙された振りをしながら舌を出す
記念日に感謝の言葉贈ります

大阪市 松 田 聰

平成も四半世紀を過ぎました
脱法を危険と変えただけのこと
スポーツ後つつい麦酒飲みすぎる
模倣犯悲惨な事件あたたため
オプチさんと一緒に消えた二阡円

大阪市 若 本 安 代

塔の鐘聞こえるあたり君が住む
流灯の別れを惜しみ川面いく
送り盆はてりの残り打水し
地下水になれない電が都市に降る
酔芙蓉一緒に酔ってくれますか

池田市 上 山 堅 坊

うっかりを重ねながらも元気な日
点滴の袋見つめている祈り
親になる資格がないぞというニュース
電子音へ返事している独り者
信用をしすぎてはダメ冷蔵庫

泉大津市 助川 和美

妻の客楽しそうだだいつ帰る

戦中の苦労話を繰り返す

蟬時雨吾かんせずに昼寝する

古本屋奥でのんびり読む店主

おかえりとタマとルンバが待つ我が家

貝塚市 石田 ひろ子

ストレスを吐き出すような蟬しぐれ

真つ青な空吸い込んで羽が生え

手術した足で広げるテリトリー

休耕田衣更えしたケアハウス

猛暑日のミニバラ意地を見せている

貝塚市 吉道 あかね

信号が青ばかりでもしんどいね

毒吸つたらしい溜息愚痴が出る

私も夫もふくらはぎを揉む

ありがとうごめんなさいを言つて住む

新聞を読む丸い背は義母に似る

河内長野市 穂口 正子

年金者浮世の義理も軽くなり

大海をととう知らず地味に生き

インブットされてはいるが出てこない

惜しみなく愛を奪った母さんの

じじばばの声裏返り孫の守り

岸和田市 中岡 香代

ブリズムの色とは違う虹の色

たくさんの試練を越えたスニーカー

頂辺で思案めぐらすかたつむり

カタカナのオモテナシでは堅すぎる

はいはいと口から嘘がついて出る

堺市 近藤 治子

駆けのぼる人を横目に一歩ずつ

映像で満足してる富士登山

のぼる時痩せなあかんとまた思う

台風の猛威に蟬も鳴きやんで

素顔では逝きたくないと言っておく

堺市 羽田野 洋介

こっそりなら許されるとは限らない

そうだった人のふり見てわがふりを

大きな山一つ越えてもまた次が

同じ音昼と夜では大違い

狭くても勝手気ままなおれの城

高槻市 三谷 白黒

奥方のプラン通りに行く旅行

目標のあったあの頃懐かしい

孫達に蹴られて寝てる夏休み

齢につれ時計の回り速くなり

怖いので自衛隊には行かないよ

寝屋川市 荒川 鈍 甲

しみじみとこの憲法のすばらしさ
株買えぬ猫も株高うれしがり
ときどきは徒然草と語り合う
増税被害想定内と取り上げず
はかなさは空蟬並みかわが一句

寝屋川市 岡 本 勲

年金だけで上手に回す妻がいる
眼と耳はいいがロレツが回らない
行く先を妻にタマツて出るスリル
タメ息で鏡の曇るメタボ妻
講演会演者以外は爆睡し

羽曳野市 安 本 美 喜

二十八度設定いのち預けます
夏にカツ皆にやりたい優勝旗
ハルカスのおしゃれ着買ってご満悦
宇宙船おならの話電波飛ぶ
古里の盆踊りにも高齢化

東大阪市 織 田 登 子

住大夫最後の芸に酔いしれる
住大夫万感胸に納めたり
アナ雪を見にゆく孫に遅れじと
娘来るみやげどっさりもち帰る
独居して料理作りを忘れそう

枚方市 河 田 洋 子

古き良き過去を力に生きている
母からの手紙私の宝です
ボランティア昔の歌が喜ばれ
母の汗しつけの着物捨てられず
アルバムを開いてしばし時止まり

枚方市 松 原 保

長々と答えているが意味不明
刺すような暑さが怖く外に出ず
庶民にはたいした金だ県議さん
AKBエンピツみたい細い脚
国際化進み過ぎてる相撲界

箕面市 村 田 恵 子

指きかず小銭財布にジャラジャラと
子らくれる物は何にも捨てられず
腰眼病み晴耕雨読ままならず
子に言えず孫が欲しいと桃に言う
天袋取手だんだん高くなる

八尾市 前 田 紀 雄

寝たきりにならない様に四股を踏む
被災者の祈り無視する再稼働
玉音を聞いた世代も喜寿傘寿
こころ一番勝てば横綱見えて来る
武器輸出これも成長戦略か

大阪府 小 栢 こずえ

待つていた雨も突然牙をむく
急ぐのに汗が着替えを遅らせる
近くても手の届かない子の咥
親が逝き近くて遠い里となり
ひらめいて今日の舞台を輝かす

大阪府 神 野 千恵子

ジャズを聴くオンザロオックの音がする
好きだった服がそっぽを向いている
温暖化風神雷神そこかしこ
もう少し探してみよう青い鳥
国会で右向く癖の人が増え

大阪府 畑 中 節 子

雨あがり紺あざやかに茄子光る
ゆつたりと窓全開に青田風
庭の松一人占めする蟬の声
年月を食べ過ぎ退屈古時計
池の面アメンボ泳ぐ鏡ゆれ

神戸市 木 村 忠 義

猛暑日は半ドンらしい蝉しぐれ
海よりも夏は森林浴が好き
おもしろい日本力士の活躍で
増え出した老いの暮らしの珍ブレイ
晩酌のうまさでわかる充実度

神戸市 富 永 恭 子

何の事はない足の着く深さだ
忘れモノ取りに行きたい向こう岸
覗くなど言いつつ隙間こしらえる
ファスナーで開け閉めしたい腹の中
婆さんと呼んで老妻頼り切る

小野市 藤 原 泰 宏

妻元気俺よりビール好きらしい
熱帯夜寝相の悪さ加速する
久しぶり酒より愚痴でよくはずむ
三つまでしつかり嫉してほしい
子育ての期間はスマホしもとい

川西市 大 坪 一 徳

戦いを終えた男の刀錆び
ねばならぬ事など無くて今日を生き
穏やかに生きているから悩まない
暇なのに早食いの癖直らない
嫌なことから手を付ける処世術

三田市 足 立 つ な 子

あしがる句会前途洋洋船出する
寒さより暑さがしみる齡かな
盆供養御先祖さまに棚経を
トレッキング荷物になると断られ
逆らわず流れに沿うて策を練る

三田市 上田ひとみ

奈良市 尾畑なを江

母の背ただ追っていたあの夏も
とびたくてただとびたくてひとりぼち

直感であなたの味方そう決めた
何もかも許してくれるお月さま
困ったらきつと誰かが来てくれる

宝塚市 丸山孔一

消費税一円玉もドヤ顔に

奈良県 谷川憲

宝塚すみれ百年咲き続き

二円足す切手をやつと使い終え
気をつける日本語解るうちの犬
川柳を趣味と言うには気が引ける

頑張れよ産まれた途端立つ子鹿
ニョキニョキとビル建ち老舗店じまい
アクセルとブレーキときに迷いだす
古稀過ぎて夢の引き出し底をつく
線香花火最後の粘りに共感

西宮市 株元玲子

和歌山市 磯部義雄

油切れ体の痛み医者頼み

戦争を語れば父の背が丸い

平均寿命までまだ間がありそう
まだ大丈夫だと囁いてほしい
猛雨つづくも神も仏も知らん顔
頼り合うは今ここに居て手を繋ぐ

水槽の金魚憫れむ籠の鳥
主義主張姿勢貫く平和主義
商魂が見えみえ揉み手低姿勢
神さまと医者に預けてある余命

南あわじ市 萩原狸月

和歌山市 北原昭枝

につこりが美味しいですと言っている

たつぷりと栄養ためた皮下脂肪

ただいまの声が大きい重い魚籠
野仏に稲穂二礼三礼す

器用ではないが世渡りばつぽつと
とんとんと脳を叩いて刺激する

松風に耳遊ばせて渋いお茶

逃げるよに時間が過ぎて古希のみち

月桂冠みな冠る気で走り出す

絵手紙にふる里の風ついてくる

紀の川市 楠原富香

羽ばたく子見守るだけの親の位置

許す気になると荷物が軽くなる

とき水が澄んでお米は万華鏡

子の結婚寿ぐ裏にある涙

プライドをすてて素直な老河童

田辺市 小川イセ

どの畠にも五風十雨のありがたさ

海渡るツバメの無事を祈る朝

旅三日そろそろ茶粥恋しなる

終活へ背なも心も丸くする

母さんは苦勞したんだ丸い背な

鳥取市 近藤秋星

暑くても季節は秋へ向かつてる

なぜ戦争同じ地球に住みながら

敬老の日の式典に謝辞を読む

車椅子は僕の伴侶だ分身だ

春は桜秋は紅葉の日本地図

鳥取市 谷口回春子

添い寝する孫は大の字婆は小

一匹の蚊死んでなると逃げ回る

わがままな孫わがままな爺に似る

沈黙はただそれだけで恐怖です

背広着て食べる御馳走味がせず

米子市 生田和之

台風をダシに約束反故にする

土砂降りに郵便までもやって来ぬ

二次会があれば句会も盛り上がる

切ることができぬ健康保険料

要らぬものだけが溜って行く老後

米子市 永井三津子

知恵と意地開かぬ鍵との根比べ

ほど程を忘れ我欲と落ちた罌

親なのに亡き母恋うてまた涙

腹が減るこんなに辛い時なのに

朝生けた花も猛暑に頭垂れ

米子市 野川宣子

時間いっぱい立っていたいなこの足で

賞罰は無し白いまんまで走り切る

結び目が緩むと続く擦れ違い

堅物のあなた緩める酒がいる

茄子の牛降りて先祖が立っている

米子市 湯浅俊久

大半は暑い寒いと言っている

慎重に時期を見定め出遅れる

今消えたあの句はきつと入選句

責任は酒に取らせて逃げている

敗けたとは言わぬ頭の色は白

鳥取県 橋谷 静江

性格が少しわかってきた仲間
友達のふれあいまずはお茶会で
脳味噌が今日はだめだと働かぬ
物忘れチョクチョクあつて焦る脳
気力持ったために毎朝散歩する

松江市 武島 千代枝

見て学び聞いては学ぶ事ばかり
一日のプラン時計にリードされ
子の手綱離してからは迷い箸
曲り腰亡母そっくりになってきた
目のかすみ心はちゃんと読めてます

岡山市 永見 心咲

もう今日は笑顔の暖簾しまいます
また夏が巡り来ましたクレマチス
封開けてみれば私の夕茜
ストレスを満タンにした砲の筒
満を持して夾竹桃も咲きました

備前市 森 ふみか

鳴きすぎる蛙の畝で止まる風
明日のスリムより今日のスイーツ
窓閉めて今日の雷鳴聞き流す
笑われて済む事だけを曝し出す
思うほどときめきはない秘境駅

岡山県 池田 たか子

大花火恐怖ひきずる焼夷弾
「風立ちぬ」夾竹桃の鎮魂歌
マンネリの食事ジョークふりかける
ちまちまと貯めてばあーと遣う癖
合鴨に草取り頼み大昼寝

尾道市 日谷 寛

にんげんも鬼も欲にはきりが無い
にんげんも鬼も苦悶を繰り返す
にんげんも鬼も親父の背なを追う
にんげんも鬼も氣を抜く縄のれん
にんげんも鬼もふるさと忘れない

竹原市 若年 幸子

綺麗どころ侍らせ亡夫夢に出る
むくげ芙蓉あでやかに今いまを咲く
豪華客船どこのどなたが乗るのだから
原爆忌空も追悼 涙雨
封印を解いてみようか焼棒杭

三原市 鴨田 昭紀

ヒロシマの夏が溢れる八月忌
振り向いて見る人生の分岐点
存在を示す小さな咳払い
助走して越える世間の水溜り
失言がボロリ三角波が立つ

宇部市 高山清子

佐賀県 真島久美子

心にも止り木ほしいせわしなさ
弱点を隠さず生きる老いの智恵
平仮名にするとやさしくなる絆
笑い合ううちはまだ良い物忘れ
本音を言えば周り白眼永田町

松山市 神野きつこ

蟬時雨お堂の鐘によく響く
菩提寺の芙蓉の花が柔らかい
仏前に煩惱もって手を合わす
寿司桶に散りばめられた母の愛
親子旅ナビゲーターは子供たち

今治市 渡邊伊津志

生け垣がプロの鋏で蘇る
文明の驕りの脆さ原爆禍
のど飴に文句さらりと溶かされる
気休めを顔色冴えぬ友に言う
ちっばけな視野で産み出す浅い知恵

唐津市 吉富節子

陸海空どれも安全とはいえぬ
うすれゆく脳にはつきり終戦日
飲めないが酔った振りして下手な歌
臥せても曾孫の声は活力剤
飲んで憂さはらす男の羨まし

息継ぎをしていなかった恋だった
透明な感情だから掴めない
最強の武器だと思ひ思い込み
人生を語る小学生二人
振り向いてくれない背中から宇宙

シドニー 坂上のり子

二三歩さえ出たくない日の寒い空
封切ると柳誌キラキラ夏景色
試験前のあの悪夢また締切日
書き損ないの絵ばかり切ってコラージュに
普通の温さ伝わり難い嫁の距離

弘前市 高森一吞

まあだだよ御先祖様におことわり
人生をちよつと寄り道した拳
とれたてのトマト月まで届けます
団塊の迷ったカード蟻地獄
神仏あるなら息子返してよ

塩竈市 木田比呂朗

神無月あわだち草の自己主張
碧天とワイシャツの白競わせる
まだまだと出番気にするサン格拉斯
出来秋の好期に数値のブレーキ
悔しさは十分わかる惚けてない

あせらずに次のチャンスを待つ構え
やましさが厚かましさに衣がえ
欲もなくなつた黙々と歎ふるい
雲掴むような話で煙にまき

東京都 大竹 一良

東京都 高岡 弥生

明日やろう四十回で夏終わる
いつまでも子供扱いする親父
子の成長背丈だけでは測れない
誰にでも下から目線素敵だな

横浜市 長島 亜希子

ペディキュアでちよつと私に色を足す
ばあさんと言われムカツキ合点する
パソコン故障読書昼寝の時間増え
介護の友瘦せて苦勞を思いやる

川崎市 成田 せいじ

お茶の間を地方議員に占拠され
カチ割を舐めて母校の応援歌
憲法を違憲議員が審議する
政活費地方議員の生活費

愛知県 樺 嶺 志

抗癌剤続ける止める決心日
副作用辛抱するか癌縮小
癌縮小ついタクシーで声はずむ
忘れてたビールで乾杯独居だが

日本国どこも老人過剩気味

孫ガードつもりが今はガードされ
孫馬鹿とわかりながらも甘くなる
人生を甘くみていたつけ届く

大阪市 浅井 公平

豊中市 荒巻 夢

サングラス掛けて悪ぶる八十歳
悩みごと聞いて元気が湧いてきた
電気代思い切ったよ熱中症
数独に挑む八十ああしんど

大阪市 磯島 福貴子

タレントが食べる笑うのテレビ界
古希過ぎたそれでも私道半ば
備忘録置いた所を忘れてる
背中見せ育てた子供どこ見てた

羽曳野市 磯本 洋一

税金を泡銭だと消費する
議員連我が身を律して出直せよ
秋刀魚焼く積りが高く鰯焼く
百合鵲揺れる舳先で見張り番

大阪市 魚住 順子

ああ暑い買い物ないがスパーへ
無理にでも口角上げて脳だます
孫達が台風つれてやって来た
何事も少し控えて長続き

大阪市 内田 志津子

大阪市 吉田 知之

居住まいを正して宝連れてった
いつも晴れ波風立たぬ日記帳
故郷をもたぬ都会の味けなさ
自販機がカチャンと鳴ってする覚悟

大阪市 宇都 満知子

クーラーと猛暑のはざま風邪をひき

河内長野市 藤塚 克三

家で避暑夏の旅行は諦める
聞くのいや噂話は言うもいや
近頃は顎があがつている総理

大阪市 土井 舞蹴

甲子園応援するのはくに訛り
アフリカで死ぬのはいつも子供たち

河内長野市 渡邊 修

甲子園開会式で涙する
海水浴でポイ捨てタバコ気にかかる

大阪市 梅里 南天

澁む血の蚊も寄りつかぬ梅雨の明け

堺市 梅木 澄空

沈黙の悲鳴をあげて落ちる髪
熊蟬がわんわん吠える夏が来た
抒情詩の溶けて染み入る暑さかな

大阪市 前川 善之

足元をオシヤレ楽しむ夏の街

堺市 増田 わこう

頑張りも十人十色皆違う

今日明日を楽しむ為に夢を見る
誰にでも勝れた技がきつと有る

奨学金返さぬ人が多いらし

食い倒れ今も黒門忙しい

オリンピック見たくて通うマッサージ

生駒山浪速守りと教えられ

後は頼む笑って言える財が無い

愛想良いふりはするけど根は頑固

ごきげんよう朝ドラ済んで妻に言う

よく嘸んで亡母の教えはあごにくる

竿燈が夜空にゆられドッコイシヨ

大逆転汗を涙が押し潰す

知事選に本音貫く島の意志

明日咲くと月下美人が香り出す

事欠かぬ偉いお方の体たらく

写メール好きに電話料金ハネ上がる

土いじり猫の額になんやかや

オレオレに品切れ無くて新手口

県議さんカラ出張を任務とし

渡り鳥日本の夏を敬遠し

地下資源孫子の分を喰いつくす

戦争を知ってる国民減るばかり

堺市 大和峯二

失敗に向きあい生きて今がある

まだ夢は捨てていないよこの世には

限りある命に芸を磨き生き

いい球を返してくれる聞き上手

四條畷市 西川 ひろし

炎天下平和言う人目が涼し

核見てた夾竹桃が風にゆれ

東電に罪人いないこの不思議

戦争を陽炎にする自衛権

豊中市 貝塚 正子

時々腹を立てねば呆けそうだ

美味しいもん食べて笑って日が暮れた

沈む陽にありがとさんと手を合せ

蛙飛ぶ柳は風と右左

豊中市 源田 啓生

また言うた八十路の坂でドッコイシヨ

戦争をしない証拠に長寿国

日本海若布のゆらぐ里を恋う

羽化出来ず背中の中羽根は閉じたまま

豊中市 南 正代

こめかみに梅干貼った頭痛薬

バイキング元をとるぞと孫をつれ

ありがとう草の葉ゆらす墓掃除

ママは留守冬はおでんで夏カレー

羽曳野市 仲谷 真一

草魂を座右の銘の元投手

くるくると回る忍者の風車

やっと咲く浪速大関豪栄通

長崎に戻り雨降る原爆忌

羽曳野市 藤原 大子

迷いながら忘れながらで日は進む

プライドが恨みの種を播いている

予防線はった笑顔を見透かされ

笑い袋少女のように使えない

藤井寺市 田付 絹枝

観音さま千日詣りにや里帰り

冬仕度進んでいるか夏の蟻

夏草に嫉妬している伸びぬ腰

カウンター足はふらふら遊んでる

箕面市 寺井 柳童

保冷剂首におでこに熱帯夜

学び舎の記念樹見上げクラス会

目覚しは朝のコラス ハト・スズメ

ふるさとは行きも帰りも人の波

八尾市 田邊 浩三

七夕竹勝手な夢で重たそう

ハンドルの遊びが欲しいわが人生

ヘルパーの笑顔に光る玉の汗

パチンコは勝った時だけ打ち明ける

八尾市 中岡 妙

叱られる側に回って油断する
幼子は打算持たない目を向ける
夏空の眩しさ雲の奔放さ
嬉しいねシャンと自分の足で立つ

大阪府 高木 道子

サンガラスちよつと気取つて顎あげて
蓮池にカメラ構える夜もすがら
台風へひまわり向きの儘ならず
文字なぞり記憶も遠い墓洗う

大阪府 西川 冷子

惜しげなく井戸水流し足洗う
静寂を破る蛙の断末魔

努力して会得したもの我が宝
猪あばれ残る野菜はねぎばかり

神戸市 井上 忠貞

ハイテクを使いこなせず片隅に
高嶺の花も攻める所はありそうだ
夜が明けた今日も一日頑張るぞ
夢求め母の説得はねかえす

神戸市 輿水 弘

細いけど続いています赤い糸
フルムーン叶わず今は地図マニア
微笑んでひそかに抱く隠しごと
揺れる月亡妻を乗せてる露天風呂

伊丹市 平井 富夫

お盆ですお経待てずに大ジョッキ
差しのべる心と気持ちにじみ出る
喜寿迎え顔は五十路と見てほしい
朝一でそつと咲きます蓮の花

加西市 中川 修

新病院待合室は銀座並み
耳遠く問診ナース喧嘩腰
ビールやめスイカの味を知った夏
風呂掃除終わった頃に妻が起き

加東市 岩本 美緒子

点滴の時間辛抱この命
日除け植えフウセンカズラ数かぞえ
立秋という暦只今猛暑刻
ゴーヤ蔓の道標する孫愛し

川西市 日野岡 和之

砂つけて男を磨く苦労人
嫌なこと忘れて暮らす果報者
みな孫と思つてエール甲子園
楽しんで生きる老いの日感謝状

篠山市 佐々木 勇

優しさをいつでも咲かすきみわたし
公平に何処の屋根も陽の恵み
優しさはいつも心に抱いてます
太陽がいつも笑つていて安堵

篠山市 永井 かほる

せかせかと精出す母に感謝した
先輩がよくて勤めも長続き
お盆月皆に出合い話したい
仲よしが急に旅立ち尚淋し

篠山市 藤井 美智子

一言が心配の種まき散らす
笑くほある愛着の鍋離せない
正直が抜け道あまり捜さない
人生の先輩やはり亡父と亡母

三田市 今西 廣子

白黒の真ん中辺が灰汁らしい
旅先でバツタリ出合い月が出た
ちよろちよろと燃えた恋ならし
父逝きて残した杖で母背伸び

三田市 多田 雅尚

花よりも育ちの早い庭の草
雲海は国も領土も無い世界
大安も仏滅も無いお中元

麻雀を打っているのはお年寄り

三田市 辻 開子

祖母と孫片言だけアウン息
待合いはいつも満員癒やす医師
並ぶレジ愛想いい娘の列にする
苦と楽の道を辿ってやつと古希

三田市 野口 晶子

ギスギスの報道世論切り刻む
出合いある街に住んでも独り者
守るため続けています一夜漬け
赤い灯がポツリと一つ胸に咲く

三木市 山口 久子

梅雨上り待ってましたと蟬しぐれ
物忘れ七度考えやりなおす
七転びやつと人並生きられた
炎天暑左右手ひかれ墓参り

奈良市 前田 弘恵

争いの絶えない地球円い筈
換気扇暑さ掃き出す役もする
体内の時計狂わす旅枕
そろそろと身体労わる歳となり

奈良県 安福 和夫

三世代生活リズムかなりズレ
孫たちのペースに合わす難しさ
二世帯の新生活にやつと慣れ
若い声聞けるだけでも得した気

和歌山県 森下 よりこ

ここに来てひまわり疲れ見せはじめ
句誌がくるたびに友の名確かめる
疑わずパンは耳から食べている
メロンパンいつも買ってるおばあさん

和歌山市 平田元三

無邪氣つて得だと思ひ妻を見る
親馬鹿の長い話を義理で聞く
まだ子供なんて言葉は優し過ぎ
食通も免許制度が要りそうだ

岩出市 村中悦男

簡単にあやまるお人よくしゃべる
忘れごと年相応となくさめる
落し穴気付いて跳んだ過去もある
風呂を浴び恙ない夜に見る花火

田辺市 大峠可動

物価高老々の夢泳がれず
酒たばこやめて世間の三枚目
自衛権やがて大地に血を流す
堅実な一步はリズムを持つている

鳥取市 大前安子

ただ生きるただの重さがおもしろい
上向いて歩いてごらん星が呼ぶ
丸呑みの教えのことば噛み直す
家計簿へ聞きたいことと話すこと

鳥取市 坂本とも湖

財産を継ぐ継がないの泥仕合
泥仕合アラブのテロに神も泣く
湯けむりをくぐり混浴いざ行かん
地獄までバッチリ君といざ行かん

鳥取市 高原かおる

この日照り歩くのつらく昼寝する
打ちこめぬ日照続きの鍬の先
子のサイン気づかぬ親のエゴイスト
遠足のおやつ値段とにらめっこ

鳥取市 津村律子

そんなもんだと軽く言われりや腹が立つ
おおびらにしてから笑顔取り戻す
損得で変らぬ頑固本物だ
汚染処理能力不足稼働拒否

鳥取市 山下凱柳

冷たい視線じつと耐えてる割烹着
精も根もおまけにお金も尽きてきた
星占い今日は大吉大勝負
何しても思い届かぬ倦怠期

倉吉市 岡崎美知江

火の鳥を隠し生きてる深い皺
残った奥の手そつと出してみる
はけたかな意味なく人を恋しがる
はらわたのどのあたりかな恨み節

倉吉市 鈴木たけ代

口下手で言えぬ想いを句で結ぶ
八月は無念の風が宙を舞う
無理だよと足が囁く一万歩
大声で叫んで腹筋強くする

倉吉市 田 中 紀美恵

注目されはずかしトマト赤くなる
淋しくてずるずる食べる晩ごはん
卒寿過ぎずるずるしていいですか
悲しみはずるずる引かず笑顔でね

倉吉市 堀 かずこ

ラーメンを食べれば太るでも食べる
縁という二人を結ぶ赤い糸
いやなこと大声出したすつとした
説得が足りない言葉宙に浮く

境港市 中 井 虎 尾

蝶々は毛虫の記憶知って舞う
にわか雨百均に入り無駄を買う
酒飲めば酒好きの蚊が寄りてさす
Vの夢踏んで行進甲子園

米子市 池 岡 たけし

食不振夏瘦せ見事元氣消え
凍て空の寒さ懐かし熱中症
暑氣払い火照る夏場の智恵比べ
秋風を待てぬ月日の汗っ掻き

米子市 小 野 鶴 子

打ち上がるビルの谷間に万華鏡
アキアカネ穂波の風も秋の色
熱帯夜梅酒ロックで眠られる
腕白に蟬の仕返しオシッコだ

独り話上手になった独り者

歳だから検診などはお預けだ
口数が多くて意味がわからない
独り者最後に家がお荷物だ

米子市 加 藤 正 二

過ぎ去った時間はみんな宝物
歴史には黒白つけぬ謎がある
白髪になって世間の目が違う
初盆を花とお酒で迎え入れ

米子市 田 村 周 子

どん底を亡母は笑顔で乗り切った
笑点で笑い薬を飲んでいる
八句出す時いつも心が揺れてます
穏やかな夫も少し頑固になり

米子市 森 脇 麗

住む人は何処帰らぬ空家です
住む人の面影変る故里も
鍬を振る腕も調子に乗ってくる
美しい日本憲法生きて行く

鳥取県 飯 野 菖 子

過疎のムラお菓子一つに花が咲く
好きだとも言わず暮らして金婚へ
雨続き過労気味にはよい休み
熱中症水とドリンク追い払う

鳥取県 岡 村 孝 明

鳥取県 下田 茂登子

夫逝つて身辺整理考える

寂しさは庭の草取りして癒す

一人寝の夜に電話は怖いもの

八十路来て敵も味方も消えて行く

鳥取県 田口 清帆

ひらめきの一句に酔っている至福

川柳でのんびり過す余生です

快眠快食快便でーりや健康だ

サルスベリ盛夏に耐えて美しい

松江市 相見 柳歩

出逢うたび君の美点がまたひとつ

仏さまお蔭で脈がありました

あの世でも役目があつて生きている

信仰は心のフィットネスクラブ

松江市 山根 邦代

会話する心の窓は開けておく

同い年顔き合つた胸の内

認知症聞くとび思う行く道と

この暑さ元氣もらえる甲子園

出雲市 黒目 英男

川柳との出会いそれは宝です

核兵器減らして皆幸せに

未来図を描いてほしい首脳たち

原爆の怖さ伝えて後世に

雲南市 菅田 かつ子

おくさまと呼ぶから要らぬ物も買い

ばあちゃんを騙す狸と見透かされ

そのうちに塵になるのか小物入れ

昼さがり朝の気力はどこへやら

雲南市 松本 昌

退屈は老妻不在友も来ず

水着には縁がなかった女です

年老いて教条主義が捨て切れず

妥協する心になった寺の門

安来市 原 煩悩児

老い耄れて学ぶことあり孫の知恵

帰省子へ先ずはうなぎに出雲そば

爺ちゃんを励まし続け嫁と孫

産地など問わぬ土用のうなぎ丼

岡山市 工藤 千代子

薄目して敵が去るのを待っている

万策も尽きた月がとつてもきれいです

論理で叩く二枚の舌に攻められる

原点に戻ると溢れる血と知恵と

岡山市 丹下 凱夫

6Bを削りなおして明日を書く

オイラクノ恋ラシテイルココア色

耳鳴りとシャンシャン蟬の二重奏

白木槿女涼しい嘘を言う

岡山市 藤 成 操 江

防府市 坂 本 加 代

真ん中で左右の風を見極める
クーラーとテレビで夏を遣り過す
風りんが昔の景色呼び戻す
ひと言も喋らなかつた日の憂い

玉野市 片 岡 富 子

挫折して心のリフォーム旅へ出る
還暦越え肉食女子の仲間入り
墓参終え心すっきり洗われる
7割引寄らずに通過できません

竹原市 土 井 輝 恵

年金に見合うたように介護され
加害者を庇う証言事故哀し
雨の日はアッシー君の機嫌とる
無視してはいません妥協しているの

竹原市 六 田 半 徳

生まれ来た蟬が待つてたせみしぐれ
ぶどう園カラス集まりかしましい
八朔も風雨に耐えて丸い顔
庭に出て無事に感謝し深呼吸

山口市 増 田 め だ か

冷静になれるまではと目を閉じる
夏山に登ってみたい花畑
一面の緑一色山ガール
我が家から花火見学一等席

三世代仲良く同居思いきや
さしあたり年金もらい生きている
ひっそりと誰が決めたか家族葬
畑仕事二人でやればまたケンカ

大洲市 花 岡 順 子

上品な口調できついことを言う
反対を数に出来ない白紙票
反対が半分重い荷を背負う
しっかりの代理へ部長昼寝する

高知市 三 谷 待 太 郎

どうしても聞き分けのないエルニーニョ
その昔貧乏神も家に居た
古里を桃源郷と囁言い
喪中らし静かなドラマ洩れてくる

北九州市 小 松 紀 子

お年頃ついうっかりが又ふえる
元氣げんき口ほどないが言っておく
蟬とりをしない子等の夏休み
ごめんネと有り難うは持ち歩く

福岡県 本 田 さくら

杉木立何の迷いもなく天に
童謡を歌うふるさと近くなり
草むらで蟬螂の子が身構える
無言館生きたかつたと呻く声

佐賀市 清水園實

山鹿市 三谷直男

人生はユーモア生かし自分流
俺よりも肥えてる人が頼もし
病院へ行きたくないが薬い
二週間食事のつけが診察日

生きもので最低なのは人間だ
タバコだけはやめろ言うから吸ってやる
病院のメシのまずさで気絶する
医者が言うあっちこち悪いが性格も

唐津市 北村松風

山鹿市 米加田恭代

両親へ言えぬ悩みを聞かされる
村の辻僕を見送る地藏尊
錫杖を鳴らし門付け遠ざかる
五十日垢を落して退院日

繕いを辞めたからかな荷が軽い
毎年咲かない花もあるを知る
水蓮を見るめだかの恋心
自慢するネタなど何も持っていない

佐賀県 門井孝

山鹿市 柳田百沙

脂肪増え酒止められて泣いてます
ゴルフ場カップはずしてカラス鳴く
ネクタイが遊んでいますクールビズ
年金で買える程度の夢のくじ

青二才言われた頃が華でした
あら不思議会話成り立つアレコレで
古希の子に信号見よと卒寿母
ふり返ろう常識という非常識

熊本市 杉野羅天

札幌市 斉藤宏子

OB会ボチボチ椅子やお茶になり
白い肌無になる露天無になれず
旧切手何か使うの惜しくなり
手練りでは粒あんさらに味上げる

泣きながら叱る方にも残る傷
歳重ねいまだ答えが見つからぬ
草の香を身に浴び夏を謳歌する
まんまるの西瓜にノック夏の音

山鹿市 前田幸子

札幌市 富永恵子

デイスリーブスちよっとお洒落してみたい
髪と爪衰え見せず伸びてくる
留守番はお酒とビール気ままです
尊い命銃撃戦の絶えぬ国

炎天に日傘くるくる見舞う足
積乱雲バイク少年突っ走る
灼熱の地のかぎろいにはぐれ鳥
幕溜り胸の高なり待つポーズ

(吉川ひとしさん、嶋本 喬さんの句は43頁にあります)

新川柳鑑賞 (32)

麻生 路郎

商売のうまいやつちやと見下げられ

(保美)

商売にかけて抜け目のない人間は、ウソも平気でつく、悪事も悪事とは思わない。それがいつもほどにか習性になるので、下劣な人間になってしまう。そんな人間を世間では、商売のうまいやつちや」と云うが内心では人間の風上にもおけぬやつちやと見下げるのである。面白いネライの句だ。

商売があほらしくなつて来る人出

(文秋)

ボカボカ暖かくなつて来ると、どこからとなくゾロゾロと人が出て来る。ジツと店番をして僅かな商いをしているのが、あほらしくなつて来た商人心理を巧くキャッチした句である。

メートルに直す間横へよらされる

(圭井堂)

メートル法実施後、斯うした情景をあちこちの店先で見せられるに違いない。

時事吟だけに、いのちの短い句であるが、一寸横へ寄らされて、換算しているふぜいに

捨てがたいものがある。軽い穿ちの句。

ひまだから床屋へ来ればこゝもひま

(幽王)

店がいそがしすぎて困るが、ヒマなのも困る。不渡りの手形のこと、イヤな税吏の顔等々々、くだらぬことばかりが次から次へと頭にうかんで来る。看板の剥けたのが眼につく。塗り替えたらしいことぐらいいは判っているが、ヒマな時にたとえ少しでも経費をかけたくない。そんなことを考えていると、頭がムシヤクシヤして来る。いっそ散髪でもしてやろうと、床屋へ来たら、こゝもヒマで、扇風機だけが生ぬるい音を立てていたと云うのであろう。淋しい市井風景ではある。

スポンサー羊羹の次胃腸薬

(千永)

偶然ではあるが、羊羹のスポンサーの次が、胃腸薬のスポンサーだったので、フト興味を感じたのである。しかし、スポンサー自身にはそんなことを思う余裕なんか有る筈もない。自分とこの商品を宣伝するのに懸命なのである。それを思うと又おかしくなつたのである。

鼻声に勝てず百万契約し

(香林)

「ね、ねえ、いいでしょう。」
「とてもとてもそんな金なんかありやしない」
「そんなこと言わないでよ。よう」と女の勧

誘員は、食いがたつて放さない。その鼻声が遂に功を奏して凱歌をあげてゆくことを巧く詠んでいる。

骨董屋推古のものにしてしまひ

(文庫)

骨董屋家業の心理を巧みにとらえている。そうそう推古時代のものが、そこらに転がっている筈もないのに、この彫刻の具合が、どこやらの何に、そっくりだし、この古びから言っても、推古朝のものに間違いないです。コレは全く掘り出しものですよと、勝手にきめてかかるのを諷したのである。皮肉な句。

奥さん奥さんと商魂のたくましさ

(草右)

奥さん、奥さんの連発するのは呉服屋か、化粧品屋か、それとも八百屋か、その点はハッキリしないが、この場合どれだつてかまわない。奥さんと呼ばれることによって、誇りを感じて呉れることを意識する奥様であればいいのである。商人から云えば奥さん奥さんと連呼する代償がお買上げでありさえすればいいからである。

なりわいの鱗かわいた手をはたく

(水客)

魚屋のスケッチであるが、淡々たる表現のうち、男一疋を浮きたせた手腕をたたえたい。ヒラヒラヒラと散る鱗にも無限の味を感じさせられる。

平成二十六年 路郎賞

路郎賞準優秀作第一席

檀原市



居谷真理子

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

葉を刻み魚を捌いた手で祈る

目は伏せぬ鏡に何が映ろうと

椅子二脚一つに過去を座らせる

シュレッダーにかけた髪の毛も切った

老いの胸こんなやさしい音で鳴る

薄着して春を試したまでのこと
良い葉になったと言うておく火傷
結び目の固さは母の愛だった

路郎賞準優秀作第二席

堺市 矢倉 五月

約束の太い小指が温かい

洗濯のどれを畳めどみなわたし

今蓋を取れば火柱また上る

舌下錠含みサヨナラ言うつもり

大方の事はケリつけ沙羅の花

柳 歴

「おかげさま」という言葉をかみしめております。『川柳塔』誌を始め、さまざまな勉強の場と

与えて下さっている皆様に、心からお礼申し上げます。また、ご指導下さる諸先輩や柳友の皆様にも感謝するばかりです。

これからの蝸牛の歩み、どうぞよろしくお見守り下さいますように。

平成10年 川柳塔なら 入会

平成12年 川柳塔社 同人

平成14年 路郎賞準優秀作第二席受賞

平成18年 愛染帖賞受賞

平成21年 檸檬賞受賞

平成25年 路郎賞準優秀作第一席受賞

平成二十六年 川柳塔賞

川柳塔賞準優秀作第一席

貝塚市 吉道 あかね

甘えると風はするりと裏返る

未使用の笑顔を一とつ持っている

白黒をつけたりしないのも夫婦

ここだけの話はとてもおもしろい

色褪せて空気になった宝物

川柳塔賞準優秀作第二席

松山市 栗田 忠士

ひらめかぬ時は歩幅を変えてみる

その先をぐっと呑み込む喉仏

さびしいないつでも鬼の役回り

加減乗除四捨五入して生きている

人は皆寡黙な石を抱いている



大阪市

析尾 奏子

神様の死角で赤い実をかじる
悲しみを映し無口になる鏡
部屋干しに共働きの息づかい
膨らんだ不満脱水機に入れる
思い出になつたら許しますかしこ

柳 歴

平成4年(16歳) 祖母から川柳を習いはじめる。

平成8年 句会初出席

平成11年 富田林富柳会 入会

平成23年 川柳塔社 入会(誌友)

平成26年9月 川柳塔社 同人

ベビーカーを押して、句会へ通った日々を思い出しています。あの日の道がまさか川柳塔賞へ続いていたとは。人生にはなんと素敵なプレゼントがあるのでしょいか。母親業との両立難しく悩んでいた時に頂いた「川柳はいつかあなたを救う」という言葉を胸に、これからも大好きな川柳と歩いて行きます。今日の日に心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。

路 郎 賞 得 点 表 (応募総数 124名)

1 位 = 5 点 2 位 = 4 点 3 位 = 3 点 4 位 = 2 点 5 位 = 1 点
(表の数字は得点)

選者 \ 作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸		5		2		1		4						3	
西出 楓楽		1	4						5	3		2			
菊 地 政 勝		1				2	5		3	4					
三 浦 強 一		5	3		1				2	4					
池 森 子			5	2	1				3	4					
前 た も つ		5		3	1		4	2							
宮 西 弥 生		4	2						1	5				3	
山岡富美子		1			3		4			5	2				
西口いわゑ			4				3	2						5	1
米 田 恭 昌					1		4			5		2		3	
川崎ひかり		5		3			4					1		2	
川 本 畔		5			3			2		1			4		
鈴 木 公 弘	3	5						4	2	1					
計	3	37	18	10	10	3	24	14	16	32	2	5	4	16	1
	夏 目 一 粹	居 谷 真 理 子	渡 辺 富 子	石 橋 芳 山	水 野 黒 兎	岸 本 孝 子	矢 倉 五 月	鈴 木 い さ お	山 田 葉 子	鴨 谷 瑠 美 子	石 原 淑 子	黒 田 茂 代	吉 村 久 仁 雄	斉 尾 く に こ	白 川 淑 子

川柳塔賞得点表 (応募総数 78名)

1位 = 5点 2位 = 4点 3位 = 3点 4位 = 2点 5位 = 1点
(表の数字は得点)

選者 \ 作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸					2				1	5		3	4		
西出 楓楽		2					3			4	1		5		
菊地 政勝	2				4		5		1			3			
三浦 強一						2	3			5	1		4		
池 森子						5	4		1		3		2		
前 たもつ					3	1	5	2		4					
宮西 弥生			1				2			3			5	4	
山岡 富美子				2		4				3			5		1
西口 いわゑ				4		1	3			2			5		
米田 恭昌			3	2			5			4			1		
川崎 ひかり				4	3		1			5			2		
川 本 畔			5			1			4	3			2		
鈴木 公弘			4						1		3	2	5		
計	2	2	13	12	12	14	31	2	8	38	8	8	40	4	1
	花岡 順子	田中 恵	木田 比呂朗	神野 千恵子	池田 たか子	中村 恵	栗田 忠士	藤田 武人	菅田 かつ子	吉道 あかね	東横 ますみ	森下 よりこ	栃尾 奏子	松井 文香	六田 半徳

受賞作品

大阪市 太田 としお



太田としお

抱きしめていいか二十歳の孫娘
バカヤロウ声を出さずに言いました
偉い人には偉い母親偉い妻
歴史認識大事な友を遠くする
勝ちたいと強く思ったほうが勝つ

評 太田としお：孫娘に対する想い、無礼な人に対する
想いなど、いずれも対象を見詰める目が鋭い。また「偉人」
「隣国」「勝負魂」など、素材の広さも際立っていた。
藤井則彦：他人のことではなく、自分を冷静に見詰め、
軽いユーモアに包んで提出している姿勢を評価する。
前田楓花：分かりやすく述べてはいるが、その内容は哲
学的ともいえる味わいがある。格言臭くならぬよう要注意。
緒方美津子：「入れ歯」「改札機」「夫」などを分析する
力は抜群。今後はもう少し自分を対象に。（新家完司・記）

御礼
とにかく嬉しいです。私を選んで下さったことを心から
感謝申し上げます。何故私なのか、この賞に値するのか悩
みますが、川柳を続けていて良かった、感謝、感謝の一語
です。これを励みに自分らしい川柳を追い求め心に沁みる
愉快な作品が出来ればと願っています。本当にありがとうございます。

準賞作品

豊中市 藤井 則彦

筆順の通りに書く文字が歪む
無欲になるほどには老化していない
もう少しなのに覗けぬ袋綴じ

鳥取市 前田 楓花

どこで咲き何処で散るかは子に任せ
しぼんではいけない此処はこの世です
いっぺんも命を賭けたことがない

西宮市 緒方 美津子

長寿国陰で支えている入れ歯
改札機左利きには不親切
楽しんできたという顔せぬ夫

柳 歴
平成15年 社会人川柳会
平成17年 早柳会（シャープ）
平成18年 番傘川柳本社
平成19年 堺番傘川柳会
平成20年 川柳塔さかい
平成21年 川柳塔本社
平成22年 堺番傘川柳会
番傘川柳本社
同人 同人 同人

平成二十六年 檸檬賞

受賞作品

佐賀県 真島 久美子

どんぐりの中から顔を出すファイト

評 久美子さま檸檬賞受賞、おめでとうございます。種子の中から芽を出す素晴らしさは、まさしく生命のファイトだと思います。とかく共選は一致しないものと聞いていましたけれど、朝子さまとの共選では多くの句が秀句、入選句で重なり、佳句は佳句のだと意を強く致しました。(竹治ちかし)

評 久美子さんの句は一見どんぐりの背競べのように見えても人それぞれに努力するファイトさえあれば、どんな可能性もあると言う前向きな句。集一さんの句は素直な実感句であり、私もこの思いを抱いて生きております。美恵子さんの句は神に人生の明暗を握られていると言う悟りの句。無慈悲な賽を振られても人は立ち上がる力を秘めています。候補作品にも共感しました。



真島久美子

檸檬賞受賞の知らせを受け、佐賀の夏の暑さが吹き飛んでしまいました。
嬉しい気持ちはもちろんですが、正直、私は去年の川柳塔賞につづいてラッキーだと思います。このラッキーを、これからもしっかりと大切に磨いていくつもりです。本当にありがとうございます。

準賞作品

大阪市 小谷 集一

二度と来ぬ今日をしつかり生きておく

鳥取県 石谷 美恵子

明暗へ神は無慈悲な賽を振る

候補作品

弘前市 福士 慕情

原発神話ガラリ崩れた核の門

長岡京市 山田 葉子

取り出して心見せたいひとがいる

柳歴

両親の影響で5歳より川柳を作り始める。

平成8年 番傘本社 同人

平成15年 川柳 港 同人

平成19年 川柳 葦群 同人

平成24年 川柳 塔 誌友

平成24年7月 卑弥呼の里川柳会を立ち上げる

平成25年 川柳塔賞 受賞

受賞作品

池田市 上山 堅坊

難題が解けてピアノがボンと鳴る

評 堅坊さんの授賞句から、暫く心に蟠っていたものが解けてホッとした気持ちで、ピアノのボンと言う軽い音で表現されたことに共感と巧みさを覚えました。

準賞のかつ子さんからは気の置けない楽しい仲間との雰囲気を感じました。

いつかは割れて消える夢・現実に予告がありませんが、七色の玉は次々に現れます。……五月さんの身辺？（北野 哲男）

評 ピアノがボンと鳴る。

この軽やかな響きに共感しました。

難題から解き放たれた心の叫びを感じ取れます。

準賞のかつ子さんの句、座の空気が淀んでいる時、タイミングよくジョークで笑いを誘う。

雰囲気がかつと変わるから不思議です。

五月さんの句、太陽の彩を写しふわふわ、割れる予告がないと言っているのがいいですね。

どの作品も優秀つけがたい佳作でした。

（小川てるみ）



上山 堅坊

作句に自信の持てぬままの私です。一路賞受賞のお知らせを西出理事長から頂いたとき、とんちんかんなことを言うほど驚きました。選考委員の方々に感謝致します。誌友は少し古いのですが、句会出席や誌上投句など本格的に取り組み始めたのは七三歳と遅かったので、百歳の川柳を目指して頑張りたいと思って居ます。ご指導のほど宜しくお願い致します。

準賞作品

タイミンクうまいジョークに座が和み
シャボン玉割れる予告はせずに飛ぶ
関本かつ子
矢倉 五月

候補作品

どつしりと裾野が広い富士の山
青テントにも一流の哲学者
富永 恭子
気がつけば神輿の上にただ一人
徳山みつこ
北国の人は無言で力貸す
居谷真理子
高瀬 霜石

柳 歴

平成11年 川柳塔社 誌友
平成18年 川柳展望社 誌友
平成19年 川柳塔誌 投句開始
平成20年 川柳塔社 句会出席開始
平成21年 川柳展望社 会員

受賞作品

大阪市 神夏磯 典子

真つ白な明日があるから生きられる

評 昨日の心は傷つき涙で汚れようと、今日もまだその痛みから抜けられないとしても、典子さんには明るい明日がある。希望を与えてくれる句だ。川柳塔に埋蔵されている宝の多さに驚いた。
(松本 文子)

評 真つ白な画布に明日は何を描こうか。明日への期待と希望を真つ白い明日と表現して、明日もまた元気に生きていこうと言う作者ご自身の気持ちを素直に表しておられます。

準賞一句目は人間関係で腹立たしいことや、思うようにいかないイライラも許す心を持つのが一番の薬と言う。二句目、今の世の父権の低下を嘆くのは作者ばかりではありません。
(村上 玄也)



神夏磯典子

この度は私ごときに各地柳壇賞を頂くことになり有難くこの上ない幸せをかみしめています。

これも城北の皆様の後押しのお蔭と感謝しています。これからも一句一句いい句が作れるよう頑張ります。今回は身に余る幸せ有難うございました。

準賞作品

許すのが妙薬らしい胃の痛み

関本かつ子

卓袱台をなぜかひっくり返せない

石橋 芳山

候補作品

呼ばれてもここは降りてはならぬ駅

鴨谷瑠美子

陽炎と過ごす旗振りつらからう

黒岩 靖博

酒ちびり今夜も砂を吐き乍ら

高瀬 霜石

胸奥の温度は書いてないカルテ

安土 理恵

柳 歴

昭和50年より川柳を始める

城北に入り川口弘生先生のすすめで川柳塔誌に投句するようになり現在に致る。

受賞者の皆さまおめでとう

小島 蘭 幸

平成26年度の六賞を受賞される皆さまに、心からお喜びを申し上げます。

猛暑の中、今年も8月12日に、川柳塔社事務所で開催しました。私を含めた第一次選考委員が、それぞれ路郎賞、川柳塔賞の応募作品の中から佳句をチェック、その中から佳句の多い順に私が最終の15名を選んで第二次選考委員の皆様にお願ひしました。

路郎賞の居谷真理子さんは、昨年度、準優秀作一席の実力者です。自選の目も素晴らしいです。準賞のお二人も好作家です。

川柳塔賞の栃尾奏子さんは、今年同人になられたばかりの若い作家です。ご夫婦でご活躍されています。準賞のお二人もまた、好作家です。

愛染帖賞の太田としおさん、檸檬賞の真島久美子さん、一路賞の上山堅坊さん、各地柳壇賞の神夏磯典子さん、おめでとうございます。今回の六賞も昨年に続いて女性の活躍が顕著でした。次年度は、男性の活躍を心から願っています。

今回、第一次選考をして一番感じたことは、もつと多くの人に応募していただきたいという事です。これは昨年を感じた事です。自選の目、力を期待しています。

受賞者の皆さまおめでとう。

二賞選考経緯

木本 朱 夏

台風十一号十二号の余波さめやらぬ八月十二日、例年通り第一次選考委員（蘭幸主幹・楓楽理事長・大輪副主幹・完司副主幹と木本）が事務所集合。応募者は路郎賞には二四名、川柳塔賞には七十八名。第一次選考通過作品から、蘭幸主幹が十五名を決定。この第一次選考の蘭幸主幹選十五名に残ることは、大変名誉あることと認識して頂きたい。

二十三日に山岡富美子さんと集計。路郎賞・川柳塔賞ともに僅差であつた。

路郎賞は昨年惜しくも逃した居谷真理子さんがみごとに獲得。準優勝作一席、二席も女流である。次回は男性陣の奮起を望みたいものです。

川柳塔賞は栃尾奏子さん。このたび同人にも推薦され、川柳塔の将来を担って頂ける三十八歳の若さがまぶしい。

毎年思うことは自選の難しさ。自作品を冷静に距離置いて見ることが大切であろう。そのためにも良質の作品をたくさん読み、川柳眼を鍛えたいものだ。

二賞候補者在住地

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
路郎賞	鳥取市	橿原市	奈良県	島根県	豊中市	鳥取県	堺市	藤井寺市	長岡京市	藤井寺市	竹原市	西予市	羽曳野市	鳥取県	神戸市
川柳塔賞	大洲市	岡山県	塩竈市	大阪府	岡山県	富田林市	松山市	大阪市	雲南市	貝塚市	瀬戸内市	和歌山県	大阪市	神戸市	竹原市

六賞のあゆみ

川柳塔社には現在、**「川柳塔」**（同人吟）を対象とする**「路郎賞」**、**「水煙抄」**（誌友吟）を対象とする**「川柳塔賞」**、**「愛染帖」**の作品群から選ばれる**「愛染帖賞」**、**「檸檬抄」**の作品群から選ばれる**「檸檬賞」**、**「一路集」**（課題吟）の各題天位句を対象とする**「一路賞」**、各地柳壇の**「各地十選」**から選ばれた**「各地柳壇賞」**の六つの賞があります。

それぞれ創設の年度が異なり、選考方法も違いますが、いずれも優れた作家の顕彰と新人の発掘に大きな役割を果たしています。

八〇〇号を記念して平成六年一月号に、「川柳塔社各賞の受賞句一覽」として、本賞・準賞をふくめて受賞句と作家名を年度順に掲載しています。今回はその後の二〇年間の受賞句を収録しています。

路郎賞・川柳塔賞の選考方法は、公平を期すために紆余曲折を経て今日の方法に変わっています。現在の路郎賞・川柳塔賞は応募・五句が対象になっておりますが、誌面整理の都合上、一句のみ採録したことをお断りします。

昭和四十一年度（一九六六）

路郎賞 内藤きさ子

内職に藤色があるたのしさよ

昭和四十二年度（一九六七）

路郎賞 森田 布堂

身よりなき老婆いくさのことにふれ

川柳塔賞 三宅 不朽

雲の峰あるけばあるくほどひとり

昭和四十三年度（一九六八）

路郎賞 木山 遠二

似て居ない父に足音だけが似る

川柳塔賞 高杉 鬼遊

消えるから雪は利那を淨く舞い

昭和四十四年度（一九六九）

路郎賞 本田恵三郎

足跡を残そう砂のある限り

川柳塔賞 王 紫

宝石の悲哀永住権がなし

昭和四十五年度（一九七〇）

路郎賞 浜田久米雄

握手した手が離れないまま坐り

川柳塔賞 小出 智子

倅せな女にふだん着が似合う

昭和四十六年度（一九七一）

路郎賞 尼 緑之助

灯台の夕陽神話を抱きよせる

川柳塔賞 生信 笑子

モナリザの笑いへ私も笑うてみる

昭和四十七年度（一九七二）

路郎賞 堀江 正朗

験閉ず耐える苦痛が洩れぬよう

川柳塔賞 谷岡 芳枝

飾り壺一枝さされた事もなし

昭和四十八年度（一九七三）

路 郎 賞 小浜 牧人

揚つても揚がつても雲雀に空がある

川 柳 塔 賞 堀江 芳子

めでためだてでひとり娘をもつてかれ

昭和四十九年度（一九七四）

路 郎 賞 藤井 春日

楢山へ背負うて呉れる子もおらず

川 柳 塔 賞 小谷 葉子

小出しする愛田周をかけている

昭和五十年（一九七五）

路 郎 賞 林 瑞枝

悔いのない汗千金の夢追わず

川 柳 塔 賞 安藤寿美子

末法の世の新聞をたたみけり

昭和五十一年度（一九七六）

路 郎 賞 岩田 美代

染め替えて羽織は過去を喋らない

川 柳 塔 賞 安達 潮音

お早ようと豚が正しくささやいた

昭和五十二年（一九七七）

路 郎 賞 森井 菁居

生き方の違いを敵のように言う

川 柳 塔 賞 西山 幸

咲いて散るただそれだけの世に疲れ

昭和五十三年（一九七八）

路 郎 賞 香川 酔々

満開の花に誘われ修羅出土

川 柳 塔 賞 古谷 節夫

デッサンのままで成長して女

昭和五十四年度（一九七九）

路 郎 賞 松原 寿子

ペンシルの芯は脇道など知らぬ

川 柳 塔 賞 岩田 三和

一匹がはねればみんな跳ねる魚籠

昭和五十五年（一九八〇）

路 郎 賞 小出 智子

女と妻のあいだで好きな彩を着る

川 柳 塔 賞 該当作なし

昭和五十六年度（一九八一）

路 郎 賞 大矢 十郎

順々に嫁くそれだけを羨まれ

川 柳 塔 賞 西村美佐女

この街の機械の音を愛す父

昭和五十七年度（一九八二）

路 郎 賞 市場没食子

来る人が来て去に元日黄昏れる

川 柳 塔 賞 奥山美智子

太陽の笑顔を独り占めにする

昭和五十八年度（一九八三）

路 郎 賞 西山 幸

歳月やゆるし合うより他はなし

川 柳 塔 賞 澤田 千春

渡し舟みんないい顔して渡る

昭和五十九年度（一九八四）

路 郎 賞 林 はつ絵

エトランゼ前もうしろも風が吹く

川 柳 塔 賞 吉川 寿美

不器用な夫婦で植える柿の種

昭和六十年（一九八五）

路 郎 賞 谷垣 史好

春ざわさわ一級河川まだ眠り

川 柳 塔 賞 赤木 和子

順番に咲いて散るなら事もなし

昭和六十一年度（一九八六）

路 郎 賞 高橋千万子

聞かせとこ九官鳥が喋るから

川柳塔賞 永田 俊子

鶴の瞑想或は人より深からん

昭和六十二年度(一九八七)

路郎賞 松川 杜的

この夫に草書のかすがちと欲しい

川柳塔賞 河瀬 芳子

裁かれているのだろうか寒すぎる

愛染帖賞 木山 遠二

呼び鈴に妻よりも猫速く来る

茴香の花賞 西山 幸

許せないものは許さず秋を待つ

昭和六十三年度(一九八八)

路郎賞 高橋 操子

アトリエのみかんころんだものでない

川柳塔賞 土居ひでの

思いきり眠つてみたいねむり草

愛染帖賞 工藤 甲吉

三界の万霊雪となつて舞い

茴香の花賞 後藤 正子

子守柿 刻を飾ろうかと思ふ

平成元年度(一九八九)

路郎賞 宮崎シマ子

さくらさくら今年も皆に逢えました

川柳塔賞 池 森子

もたれ合う人と喧嘩をしています

愛染帖賞 八木 千代

書きすぎぬように大事なひとへ書く

茴香の花賞 西口いわゑ

蓋をしておけば誰かが開けにくる

一路賞 牛尾 緑良

山ほどを語り尽くして夫婦かな

各地柳壇賞 吉岡 美房

菊活けて心変りを追いかけず

平成二年度(一九九〇)

路郎賞 奥田みつ子

ああ夫婦おんなじ時に胃が痛む

川柳塔賞 野村 京子

泣きに來た海が他人の顔をする

銀河系賞 新家 完司

きのうより重いバットを振ってみる

茴香の花賞 佐藤 奏月

蝶になるまでのプロセスたのしもう

一路賞 田中 正坊

幸せはじつくりがよし豆を煮る

各地柳壇賞 春城武庫坊

森を抜けると風は無色になって吹く

平成三年度(一九九一)

路郎賞 斉藤 島

千本を伐り一本の植樹祭

川柳塔賞 高杉 千歩

桜咲く放浪癖はまだやまず

銀河系賞 土橋はるお

風船同士重さを比べあっている

茴香の花賞 松本 文子

五十五歳柱の傷も深くなる

一路賞 西原 艶子

ほつれてはならぬ絆だ深く縫う

各地柳壇賞 井崎ミサ子

青空を見ると洗濯したくなる

平成四年度(一九九二)

路郎賞 矢野 佳雲

頂点に立つといくつも影が出来

川柳塔賞 松浦登志子

嫁ぐ娘に正座で話すこともなし

銀河系賞 藤田 泰子

幸福が続きますよう腹八分

茴香の花賞 田中 輝子

一気に書いた便り一気にポストまで

一路賞 椎江 清芳

花束を投げると海の喪があける

各地柳壇賞 池永 正雄

一生をスベアで終る鍵もある

平成五年度(一九九三)

路郎賞 永田 俊子

ああ余生つるべ落しに日が暮れる

川柳塔賞 児玉 歌子

したたかに生きる女の返し縫い

銀河系賞 高橋千万子

紙コップ ビールの重さ手にこたえ

茴香の花賞 木本 朱夏

失った時間を抱いているたまご

一路賞 川島諷云児

百の修羅越えて静かな夫婦の絵

各地柳壇賞 柿花紀美女

頭打つ度に男の顔になる

平成六年度(一九九四)

路郎賞 菱田 満秋

季の移ろいを追うていて歳をとり

川柳塔賞 永田 暁風

疑えば海の碧さも空の蒼さも

銀河系賞 藤田 芳郎

熱いお茶久しく妻に礼言わぬ

茴香の花賞 西出 楓楽

敵持たぬ人を信じてよいものか

一路賞 本田 忠男

少年のいびつな穴に合った鍵

各地柳壇賞 野瀬 昌子

野次馬の中に我が子がまじってる

平成七年度(一九九五)

路郎賞 平田 実男

本番になると小さく見える的

川柳塔賞 渡辺 南奉

貧乏は気楽泣きたい時に泣く

渺湖賞 林 荒介

生かされた時間の中の焚火跡

茴香の花賞 古久保和子

種を蒔く話をせねば始まらぬ

一路賞 玉置 重人

一喝がとどろきそうな父の墓

各地柳壇賞 小林 一夫

一月十七日 晴 街がつぶれた

平成八年度(一九九六)

路郎賞 舟渡 杏花

うたかたの世や晩学の手暗がり

川柳塔賞 倉垣 恵美

洗うてもまた洗うても軍手なり

渺湖賞 斉藤 昶

朝の電車で青春に囲まれる

茴香の花賞 牧渕富喜子

沈黙の箱に乗り込む地階まで

一路賞 山根めぐみ

遅れても我が道をゆく蝸牛

各地柳壇賞 新家 完司

安いのでいいよ最後に入る箱

平成九年度(一九九七)

路郎賞 政岡日枝子

母乳呑むまるで太鼓を打つように

川柳塔賞 篠原いつふみ

仲のよい夫婦で通すバスツアー

渺湖賞 古久保和子

合鍵を売りに行こうか朧月

茴香の花賞 石垣 花子

ゆっくりと回る地球に住んでいる

一路賞 海老池 洋

縄文の蕾で咲く日待った種

各地柳壇賞 梅田 宣司

片方の靴が昭和を脱ぎきれぬ

平成十年度（一九九八）

路郎賞 山海 友照

大文字亡夫が好きな位置にいる

川柳塔賞 長谷川 淳

社説書く人大臣になつて欲し

渺湖賞 池 森子

罪状もなく身の丈ほどの我が塔よ

茴香の花賞 小野 克枝

結び目の中に答があるだろう

一路賞 高田美代子

仲直りパンがふくら焼けました

各地柳壇賞 長浜 澄子

断ち切ったはずの心が揺れて秋

平成十一年度（一九九九）

路郎賞 川上 富湖

プロポーズ君を終身刑に処す

川柳塔賞 和泉あかり

歯を磨く美味しいものが食べたくて

渺湖賞 佐藤 季顯

水仙の目線たどると海に着く

茴香の花賞 藤田 泰子

咲く前の庭でいちばん美しい

一路賞 三宅 保州

器より大きな欲を盛りたがる

各地柳壇賞 西出 楓葉

古傷は何度なめてもほろ苦し

平成十二年度（二〇〇〇）

路郎賞 大石あすなろ

四面楚歌壁にもあつた非常口

川柳塔賞 田中 笑子

嫁来たら隠居どころか動かされ

愛染帖賞 木本 朱夏

能面の裏に三つの寒い穴

茴香の花賞 福井 桂香

人間の子供が育たなくなつた

一路賞 川上 大輪

訪ねれば風は知つてるかもしれぬ

各地柳壇賞 原 章峰

かさかさに乾いた宇宙人になる

平成十三年度（二〇〇一）

路郎賞 片岡智恵子

やかましい妻だが逝かれては困る

路郎賞 三宅 保州

身長が縮んだことは内緒です

川柳塔賞 塩路よしみ

何気ない会話の中で拾う知恵

愛染帖賞 奥田みつ子

歩いてても歩いてても追いつけぬ影

茴香の花賞 太田扶美代

百円シヨップで毎日祭りやっている

一路賞 神夏磯典子

百年の計より今日の夕ごはん

各地柳壇賞 神保坊太郎

背がこうも曲つてたのか影法師

平成十四年度（二〇〇二）

路郎賞 田辺 鹿太

振り向けば吾人生はつづら折

路郎賞 中居 善信

一匹になれぬ弱さを持っている

川柳塔賞 三島 湊丘

激流に打たれた石の面構え

愛染帖賞 西山 幸

ひとり芝居にまだ喝采がもらえない

茴香の花賞 中井 アキ

晩学にまだまだ涸れぬ海がある

一路賞 政岡日枝子

鏡からはらはら満ちてくる哀よ

各地柳壇賞 石堂 潤子

喝采を浴びて未来が狂い出す

平成十五年度 (二〇〇三)

路郎賞 高瀬 霜石

手の中の虹を時々舐めている

川柳塔賞 小川てるみ

きつかけが欲しい火種は抱いている

愛染帖賞 福井 桂香

燃えながら紅はおずきは淋しがり

茴香の花賞 山本希久子

友達を数えて森へ来てしまふ

一路賞 前 たもつ

人の話しっかり聞けと耳二つ

各地柳壇賞 原 苑子

手相には出ない幸せ持っている

平成十六年度 (二〇〇四)

路郎賞 新家 完司

気分良く腹減ってゆく日曜日

川柳塔賞 黒田 茂代

お茶室の二畳小さな大宇宙

愛染帖賞 高瀬 霜石

背広からぼろりこぼれるとっこいしょ

茴香の花賞 鴨谷瑠美子

幻にならんいち面ラベンダー

一路賞 北野 哲男

愛というガラス細工が美しい

各地柳壇賞 奥谷 彩子

スランブを抜け出た毬がよく弾む

平成十七年度 (二〇〇五)

路郎賞 上地登美代

太陽を描いて涙と縁を切る

川柳塔賞 三浦千津子

大泣きをするには空が青すぎる

愛染帖賞 安土 理恵

子を産めぬ女に柘榴熟れてくる

茴香の花賞 白根 ふみ

わたくしを産まんと炬燵ちらかして

一路賞 宮西 弥生

生き恥を重ねちゃっかり生きている

各地柳壇賞 今 愁女

満ち足りた生涯でした木の葉舞う

平成十八年度 (二〇〇六)

路郎賞 米澤 俣子

平和ほど贅沢は無し花の下

川柳塔賞 森田 明子

芸のない犬で我が家に合っている

愛染帖賞 居谷真理子

わが子だがその半分は時代の血

檸檬賞 永田 俊子

命抱く土ほんのりと暖かい

一路賞 鍛原 千里

変わらねば明日の夢が見えてこぬ

各地柳壇賞 大橋 鐘造

気負わずに生きる風花舞うように

平成十九年度 (二〇〇七)

路郎賞 穴吹 尚士

本当の事を言うから嫌われる

川柳塔賞 柏原 夕胡

明日からがあつて決心つかぬ今日

愛染帖賞 牧渕富喜子

なる程と聞いている間に貧富の差

檸檬賞 高瀬 霜石

ミルクから骨壺までの消費税

一路賞 福士 慕情

一本の藁だが友が息をつく

各地柳壇賞 木本 朱夏

よく弾む毬がときどき憎くなる

平成二十年度 (二〇〇八)

路郎賞 西内 朋月

胃袋がないのに腹が空いてくる

川柳塔賞 小林 わこ

誰よりも日傘欲しいと泣く地球

愛染帖賞 吉田あずき

この道を来たから会えた人ばかり

檸檬賞 高田美代子

ため息の長さはわたくしのすべて

一路賞 福本 英子

編みかけたままセーターも歳をとる

各地柳壇賞 太田 昭

組の上で通した黙秘権

平成二十一年(二〇〇〇九)

路郎賞 福西 茶子

一日一笑ネタは身近にたとある

川柳壇賞 小沢 淳

咲いて散るそんな自然に僕もいる

愛染帖賞 奥 時雄

死んだなら酒のせいだと言われそう

檸檬賞 居谷真理子

許しますもう愛していいから

一路賞 白根 ふみ

美しい地球を雲間から念ず

各地柳壇賞 米田 恭昌

節くれた指が一途に鶴を折る

平成二十二年(二〇〇一〇)

路郎賞 吉村 一風

湧き水の神に折りの手を洗う

川柳壇賞 桑名 孝雄

一年の計に若しもを入れておく

川柳壇賞 藤原ほか

歳月が全てを包み込んでゆく

愛染帖賞 谷口 義

女らしく水を飲むのはむつかしい

檸檬賞 片山かずお

物差しの違いを認め合い夫婦

一路賞 今 愁女

湯呑み二ついつもの場所に置いてある

各地柳壇賞 古今堂蕉子

大の字に寝てもローンの音がする

平成二十三年(二〇〇一一)

路郎賞 牧野 芳光

お辞儀する釘の頭は叩けない

川柳壇賞 大久保真澄

紅一点誰も気にせぬ歳となり

愛染帖賞 片山かずお

自惚れの耳にお世辞が心地よい

檸檬賞 山岡富美子

背伸びした日々が外反母趾にある

一路賞 宇野 幹子

前向きな花は大きな実を結ぶ

各地柳壇賞 藤井 寿代

日向はこ誰のものでもない自由

平成二十四年度(二〇〇一二)

路郎賞 牛尾 緑良

お座りもお手もしたのに笑われる

川柳壇賞 辻内 次根

味噌ラーメン男ひとりの封を切る

愛染帖賞 上田ひとみ

おこった泣いたりとても忙しい

檸檬賞 古久保和子

鳩尾のざわめくものが裁けない

一路賞 西谷 悦子

一番もビリもみな汗かいている

各地柳壇賞 浅野 房子

しんがりを行くわたくしに敵はない

平成二十五年度(二〇〇一三)

路郎賞 山岡富美子

自然体それがわたしの処方箋

川柳壇賞 真島久美子

コンバクトあとは尻尾を隠すだけ

愛染帖賞 工藤千代子

ゴメンネの代わりに「リンゴ剥きますか」

檸檬賞 守田 啓子

哀しみの対角線に紙おむつ

一路賞 福田 好文

妻の背の丸さに気付くフルムーン

各地柳壇賞 太田扶美代

友達をいっばい持っている桜

誹風柳多留一二篇研究 16

細井龍夫・伊吹和男

山田昭夫・石川道子

小栗清吾

清博美

見破られてしまう。一皮向けば女であることは明白だ。 六五34

大門でわれハ化たと思へども

やさおのお待テと四郎兵衛ひとつらへ 一九2

四郎兵衛に女之介はとつかまり 一六18

清賛。

118 かいぐいが過るからだと下女がはゝ

115 おふくろもおふくろかぎを釘へかけ

細井「お袋もお袋だ、こんなわかりやすい所にある釘に金箱の鍵を掛けて置くなんて。罠かな」と、ドラ息子はちよつぱり心配しながらも心中喜んで甘い母親を評している。

ざつくりとつかんだ所を母おさへ二〇16
盗人を捕らへ母親声を下け 二六38

伊吹 賛。第三者の評とも解せる。

小栗 伊吹説賛。息子も息子だが、お袋も

お袋。甘やかすからいかんのだ。

清同。

116 先きへいつたやら廿けん中ウに居す

細井 浅草寺境内にある二十軒茶屋で落ち

合つて吉原へ繰り込もうと約束したのに、友達の姿が見当たらない。先に行つてしまつたのだらうか。それとも、何処かで足止めをくらつているのだらうか。参つたなあ。

貴公をまつこと久しと二十軒 二四16乙
御つれ衆かおそひで茶見世日か暮ル

明四義3

小栗 賛。先に行つたのです。遅れる奴が悪い。

清 賛。気持がはやつているものだから。

117 もゝ引とづきんを取と女郎なり

細井 吉原大門には遊女の脱廓防止が主要任務である四郎兵衛と称する番人が配置されていた。この句は脱廓失敗の情景で、股引と頭巾で男装をしても、骨格から簡単に

伊吹 小使いが溜まらぬとか、または妊娠してしまつた下女へ、その母親からの注意。間食を買つて食い過ぎるとか、浮気性だからだと母は叱っている。両意を利かせているのかも知れない。

子守りの買喰春中から尻が割レ 一三94

へのこの買喰をしたのが越度也 三三24

山田 賛。身持ちが悪い娘なのでしょう。

小栗 賛。妊娠してしまつては「買い食いが過ぎる」などと脳天気なことは言つておられまい。文字通りの買い食いの句だと思

う。「箆三」の句は、下女は買い食いが好きだという前提があつて「へのこの買い食い」と洒落たのであつて、「買い食い」の語だけ

では妊娠までいかないのではないか。

細井 妊娠したのではなく、肥えて太つた

ぐらに思ったのかも。「買い食いばかりするからデブになっちゃうんだよ」と。
清 同。小遣いもたまらないし。

119 通りものまさかの為にぶつかさね

伊吹 この句の場合の通り者は、ばくち打ち。勝ち敗けの次第によつては、借金のかたに着物を置いて行かねばならないこともある。そのまさかの時に備えて、ばくち打ちに重ね着をするのである。

ある時ハころぶ程着る通りもの
通りの小袖の下へゆかたを着
清 賛。 拾九 25

120 けんどんやこの盃だかといひ

伊吹 慳食は、蕎麦やうどん、飯、酒などを売るとき、一杯ずつ盛切りにしたもの。出前で頼むことが多く、その食べ終った食器を岡持ちに入れた持ち帰ると、お客の間違いで余分なものが入っている場合がある。この句は盃で、例句は基石。

けんどん屋どこの基石か二ツ三ツ 昌四 29
小栗 賛。基石はバクチ場から紛れてきたものだろうが、盃はさて？

清 賛。

121 世が世なれハとおとり子を母しかり

伊吹 いろんな状況が考えられ、はっきりしない句であるが、あえて限定すると、物事が順調に行つていれば留守居役なんかではなかつた武士に対して、踊り子があまりに無礼な態度を取るので、その母親が叱っている。おしよくさんなど、おとり子なめ過る

山田 礎も一考ですが、踊り子について行く母親が、世が世なればこんな稼業などせず済んだのに、とヤツ当たりしている図とも思えますが……。

小栗 わかりません。あえて駄旁解を言えば、「世が世なれば」は武張つた言い方だから、留守居役がよく口にするのではなからうか。それを聞きなれてる母が、よく意味もわからぬままに、娘を叱る時に使つてみると。清 留守居役を馬鹿にしている踊り子に対し、母が「世が世なれば、斬られても仕方がないことだ。少しは礼をつくしなさい」と叱つてゐる、では……。

122 それさもみちのある寺と母わずれ

伊吹 紅葉狩りを口実に遊里へ行つた、どら息子（？）の行き先を誰かに尋ねられて、正灯寺や海晏寺の名を忘れた母親は、「それさ何だつたかな、とにかく紅葉のある寺だよ」と答えた。

女房ハせいでもミちの寺とい、 安四 信 3
小栗 賛。ではあるが何がおもしろいか。まさか、母親の記憶力の悪さを言いたい句ではあるまい。ドラ息子と母親というパターンの一句と思うのだが、適切な解説ができない。清 怒つて意気込んでゐるから、トツサに名前が出てこないのでしょう。

123 あんこつにきんちゃく切が三人

伊吹 魚屋の店先で吊るし切りで鯪鱈を捌いていると、鮮やかで珍しいものだから、見物の人たち大勢が我を忘れて見とれてゐる。それらの人の懐の巾着を狙う掬りが、その中に三人はいるというのである。大ぜいに見せてあんこう喰ふさかな

小栗 賛。「吊切り」と「巾着切り」ということですか？ 安九 松 2
清 小栗説が含まれるでしょう。

英語 de Senryu ③④

麻生路郎句集『旅 人』

英訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

いつのほどにか ブックエンドに似てわれも

*I am like
the bookends
without notice*

死はゆらぐ 文楽人形に死はゆらぐ

*death is swaying
around me---
flickering to Bunraku Dolls*

～リバーウィローのため息～(川柳の国際化 9: *Senryu:Haiku Reflections of the Times* 英訳時事川柳 translated by Matthew Spellman, Mangajin, USA 1997) 英文 118頁。

アメリカで日本文化を紹介する出版社(漫画人)から出された本書の副題が、“時代を映す俳句”というのも、川柳を (*witty haiku-style poems*) と決めつけているのも気になります。しかし俳句がすでにアメリカに浸透していることから、アメリカ人購読者を意識した戦略から付けられたタイトルとして理解しておきましょう。1990年代後半になって、やっと素人の時事川柳がアメリカで出版されたということは画期的な出来事です。読売新聞で、人気「時事川柳」欄に掲載された素人の川柳愛好家の作品から、尾藤三柳が100句を選び、マッシュ・スペルマンが英訳・編集をしました。市井の人々の感性を、つまり、日本人の感覚をアメリカ人が知るための優れた読本です。尾藤三柳は時事川柳について、「時代の表面にまったき姿を現し、一斉に開花したのは第二次大戦後、日本が全ての呪縛から解き放たれた時に始まる。戦後の混乱と不安定な状況の中で、時事川柳流行の火付け役となったのは、読売新聞が連日、一面に掲載開始したくよみうり時事川柳」であった。昭和25年(1950)4月1日に始まる、この小さなコラムには、あらゆる憂鬱、あらゆる不満、あらゆる怒り、あらゆる願望が吐き出され、地震計のごとく社会の揺れや動きを反映した。」と本書の中で記しています。まさにこれらの時事川柳を通して、アメリカ人の心に日本の庶民の感性が響いたと言えるでしょう。

校長の耳は素通りするいじめ(後藤 育弘 1994)

The principal's ears/don't pick up the sounds/of kids being teased
パチンコが親をさらって子を捨てる(元木 優 1996)

Pachinko/abducts the parent/throws away the child

亭主は吉原、女房は間男

小栗清吾

夫婦生活が長くなると、亭主も女房も浮気が出てきます。

亭主の方は、吉原へ行くのが定番です。吉原は幕府公認の遊廓ですから、現代の「風俗業」とは少々ニュアンスが違いますが、それでも「悪所」には違いなく、女房に対して堂々と「行ってくる」と言える場所ではありません。

そこで、亭主はいろいろ工夫します。

女房の聞くように読むにせ手紙 六五

悪友に頼んで、「寄合の招集」などの偽手紙を書いてもらい、それを女房に聞かせるように読みあげるのです。

大ぶりに咳には女房油断せず 傍二七

友だちとの間で「吉原へ行くときには、表を大きな咳払いを二つして通る」などと打ち合わせをしておいたりします。しかし、この句の女房は「油断せず」ですから、薄々

感づいているかもしれません。

女房の顔を見い見に着替えて出 明三宮三

よそ行きの着物に着替える間も、よくよく女房の様子をうかがって、ばれていないか確かめます。そして念のため、

方角を違えて内を出て見せる 襲二六

吉原とは反対の方角へ向かって、家を出て見せたりします。

しかし、いくら努力をしたところで、女房の洞察力に勝てるはずありません。

二つ目の咳で女房にがんづかれ 一七18
合図の咳払いは二つ目で感づかれ、
鞆でなし謡でなしと女房言い 一七14

「蹴鞠の会だの謡の練習だのはみんな嘘」と見破られ、

あの義理のこの義理のとて出られやす 三二27

「男の義理だから行ってくるなどとうまいこと言って出ていくわねえ」と喝破されては、勝負あったというところでしょう。

亭主の吉原行きは簡単に見破られるのに、女房の浮気はなかなかバレません。

江戸時代、間男（姦通）をすれば死罪です。また現場を押さえた亭主が重ねて置いて四つに斬っても、お咎めはありません。いわ

ば命がけの浮気ですから、周到に行動するのが露見しない理由の一つでしょう。

口止めに内儀下女のも知らぬ顔 安六55会

間男を御用百にて他言せず 一三9

下女の色事を見逃してやる条件で口止めしたり、おしやべりの御用聞きには百文やって黙らせたりします。

しかし、それより大きな理由は、亭主が大甘で、注意力が足りないことです。

間男をせぬは手前の妻ばかり 安九梅三

「うちの女房に限ってそんなことは……」という認識が間違っています。

この頃は作るに亭主気が付かず 八21

最近、女房がおめかしをするようになったのに、亭主は気づかない。日頃の無関心が墓穴を掘ります。

意見せぬ筈よ女房もござえたり 安二松4

急に女房が、亭主の吉原行きに文句を言わなくなった。これは何かあるなと思わなければいけません。

間男と別懇にする気の毒さ 一九ス6

そうなると、いつも来る特別仲のいい男が間男だと気が付かなかつたりして、結局、町内で知らぬは亭主ばかりなり 末四17
という醜態をさらすことになります。

愛染帖

新家 完司 選

(投句 2559名)

初恋のひとと夫もいる彼岸

八尾市 村上ミツ子

(評) いずれは誰もが行かねばならない向こう岸。ちょっと恐ろしい気もするが、初恋の彼も夫も待つてくれていると思えば心強い。

暑いからプラトニックな恋にする

三田市 堀 正和

(評) ということは、涼しくなったらプラトニックでは済まないということか。熱烈が悪くはないが、火傷にはくれぐれも注意を。

星を見た御馳走食べたさあ寝よか

河内長野市 大島 友子

(評) 久しぶりに目も口も楽しんで、充実した佳き日であった。いつまでも元気で、このような毎日が続くようにしたいものである。

することがあつてガバツと起きられる

田辺市 岡本 昇

(評) 庭の草取りでも目的を持ってやるのといやいやでは大違い。目的や意欲は心の栄養剤。毎朝「ガバツ！」と元氣よく起きよう。

鰻の日ひねくれ者の冷奴

三田市 尾崎 一子

(評) 土用の丑の日が近づくともメディア揃つて鰻ウナギ鰻。「そんなものに乗せられる猫や杓子と違うわい」。その心意気や良し!

味噌醬油人間の知恵黴の知恵

富田林市 山野 寿之

(評) ついでに言えば漬物・納豆・チーズ。それぞれの奥深い味は発酵のおかげ。黴も偉いが、それを発見して生かした人も偉い。

オスブレイ四股踏む型で着陸す

鳥取県 山下 節子

(評) すっかり悪名を売ったオスブレイ。着陸姿勢は確かに四股を踏んでいるスタイル。あの轟音は「どすこい、どすこい」か。

納得に多少時間のかかる没

河内長野市 梶原 弘光

(評) なかなか出てこないのに「ひよつとしたら天位か?」と期待したが、あえなく没。生みの親として納得できないのは当然。

使途不明金など我が家では当たり前

神戸市 能勢 利子

(評) 号泣議員から始まった使途不明金騒ぎ。血税の浪費はもつてのほかだが、お小遣いには報告義務も領収証も不要なのが有り難い。

乾杯は大好きお開きは嫌い

弘前市 高瀬 霜石

(評) 愉快な時間はアツという間に過ぎ去つ

て、「お開きの時間」という幹事の非情な声。かくて乾杯が好きな連中は二次会三次会。

河内長野市 松岡 篤

自宅では限度いっぱい脱ぐ猛暑

海南市 小谷 小雪

暑くても脱げる限度は知っている

防府市 坂本 加代

正直に畑の野菜うなだれる

松山市 栗田 忠士

ヒグラシの今しかないと鳴いている

大阪市 藤原千恵子

蝉しぐれ嫌なニュースの声も消せ

茨木市 藤井 正雄

乱れ飛ぶ蛍に頼む村おこし

河内長野市 谷 久美子

素っぴんで顔も一日クールビズ

大阪市 藤田 武人

クーラーをギンギン効かし鍋料理

和歌山県 森下よりこ

焼きギョーザ夏を乗り切る心意気

三田市 石原 歳子

台風が去って涼風置土産

和歌山市 古久保和子

台風一過街に銀杏ばら撒いて

三田市 北野 哲男

バタバタと寺の廊下も夏休み

胸にある疎開の寺は今無住

古里に蜩拾った川がない

弘前市 吉川ひとし
熱帯夜月もホタルも眠れない

東京都 川本真理子
席ゆずる資格はすでにないらしい

神戸市 奥澤洋次郎
人間という厄介もののいる地球

松山市 神野きつこ
鬼瓦笑って見えるうれしい日

明石市 桃谷 和郎
人間をちよいと忘れて大欠伸

倉吉市 岡崎美知江
週一の息子の電話今日も待つ

長野県 丸山 健三
軟膏をすり込む場所にとどこかぬ手

豊中市 松尾美智代
無重力深夜ひとりで飲むビール

堺市 村上 玄也
誰も笑わないエレベーターに乗る

松尾美智代
窓開けて寝てますマンシヨンの五階

体形が老人風になってきた
オンリーワン自分励ます呪文です

夏が来る前に夏バテしてしまふ
西宮市 福島 弘子

メダカの子汲み置き水がお気に入り
和・洋・中まだ迷う胃に感謝する

大阪市 笠嶋 恵美
怖がりもゴキブリだけは叩けます

大阪府 榎本日の出
心配は無くなったのに不眠症

奈良市 辻内げんえい
時計捨ててお日様に沿い起きて寝る

長岡京市 日置みどり
レシートを集めて悟る無駄遣い

鳥取県 竹信 照彦
二次会は汽車の時刻で切り上げる

藤井寺市 太田扶美代
八つ当たりできる相手はひとりだけ

香南市 桑名 孝雄
十人を切った化石のクラス会

寝屋川市 籠島 恵子
ロスタイムもうじき神のホイッスル

ひらがなにルビふるようになりがとう
河内長野市 村上 直樹

生きているしどろもどろになりながら
薄味に慣れたら酒も美味くなり

奈良市 大久保真澄
ケータイもスマホも持たず武士気取り

嘘八百三つぐらいは覚えてる
コロッケも乗ってる夕方の車輛

目隠しをしても飲み屋へは行ける
ビジネスホテルでコンビニのおにぎり

鳥取市 前田 楓花
人間も奇妙な生き物の一つ

朝の陽にもらう勇氣と鳥の声

佐賀県 真島久美子
チーターの速度で逃げて行く男

倉吉市 牧野 芳光
入道雲の中には猫の喉がある

青森市 守田 啓子
今逢えば雷鳴が轟くだろう

松江市 石橋 芳山
雨が降る誰かのせいにせにやならん

大阪府 栃尾 奏子
横顔は母ころには父が住む

大阪府 平井美智子
じいちゃんに会いに行く日に着るピンク

名作も一〇〇円で売るブックオフ
大阪府 古今堂蕉子

ハンバーガーお国はどちら父は誰
焼いて良し煮て良し揚げて良しナスビ

広島市 岸本 清
第三のビールが口に合ってきた

名は優しいがやつかいなエルニーニョ
貝塚市 吉道あかね

補整下着私をしゃんとしてくれる
バイキンを散り蒔いている無言劇

岡山県 田中 恵
張り切った分だけ付けが来る身体

食卓にでっかく座る茄子トマト
三田市 今西 廣子

とりあえず一勝一敗の平和
神様にいただいた方向音痴

水族館魚の腹を見るところ

鳥取県

斉尾くにこ

取扱注意プライド持ち歩く

札幌市

三浦 強一

加齢とは顔がだんだん恐くなる

横濱市

居谷真理子

ヒマラヤを越えねばならぬアネハヅル

弘前市

福士 慕情

手も口も出さぬバセリの威圧感

岡山市

工藤千代子

クイックとスローで円満な夫婦

三原市

鴨田 昭紀

喜寿にしてまだ花柄に手がのびる

横濱市

安土 理恵

囲碁将棋つよい男になれなんだ

大阪市

江島谷勝弘

こっそりと映画見ながら手をつなぐ

堺市

近藤 治子

好きですと口がなかなか喋らない

小野市

藤原 泰宏

迷惑をかけず長生きするつもり

芦屋市

黒田 能子

中国産は買うなと妻に言っている

鳥取市

近藤 秋星

歩けるうちと遊びまくって膝にきた

堺市

矢倉 五月

権力がしゃべりクロシロばやけだす

唐津市

仁部 四郎

夫婦でもとても大事な車間距離

大阪市

太田としお

焼きもちもやかないわたし変ですか

三田市

上田ひとみ

呆けてなお母は心配ばかりする

米子市

生田 和之

成るようになるよといつも通りの日

東大阪市

北村 賢子

ゴミ箱を蹴るタイガース二連敗

堺市

内藤 憲彦

ご近所の謎めく人に車間距離

京都市

榊本 宏子

戦死した父に今でも見守られ

鳥取市

春木圭一郎

願いはひとつ今日を元気に遊びたい

長岡京市

山田 葉子

コピペでは納得しない原爆忌

八尾市

前田 紀雄

つつがなし季節が来ると梨とどく

西宮市

牧渕富喜子

記憶にはないけど財布空っぽや

大阪市

井丸 昌紀

酔っぱらいちゃんと帰ってくる不思議

西宮市

緒方美津子

善人と言われる人のそのの無さ

堺市

奥 時雄

郵便局も中元セール抜きがない

鳥取県

平木 公子

目覚ましが不用品な坂に差しかかる

弘前市

稲見 則彦

霊園がひとつ空きましたと電話

香芝市

大内 朝子

熱中症罹るもんかと舐める塩

高槻市

初代 正彦

百引く七散歩しながら脳鍛え

羽曳野市

宇都宮ちづる

地下鉄に涼感求めメモ持参

大阪市

佐藤 忠昭

風水を信じ就活ままならず

日高市

根岸 方子

足腰も弱いが美人にも弱い

堺市

加島 由一

四食昼寝していた夫徴ていた

大阪市

柴本ぼつは

韓ドラで妻がリモコン離さない

河内長野市

渡邊 修

ふる里にゴジラのような店が来た

三田市

上垣キヨミ

日銀の短観はくと食い違う

鳥取市

岸本 宏章

料理していますと換気扇まわす

羽曳野市

徳山みつこ

押し入れの半分ほどは無駄な物

豊中市

水野 黒兎

根拠のない自信もあって生きられる

三田市

野口 晶子

奈良県 安福 和夫
利便性追うたび失くすよき昔

岡山市 永見 心咲
ふたりして性同一となる傘寿

川西市 山口 不動
あの車ハーブ吸ってるスピードだ

宝塚市 田中 章子
鳥猫の糞はおかまいないらしい

鳥取市 鈴木 一弘
隣組わきあいあいのどぶさらい

神戸市 山根 弘子
ころころとコース外れて生きてます

和歌山市 平田 元三
潮時は日付変わりと決めて飲む

箕面市 広島 巴子
眠れぬ夜なぜか川柳ひねってる

松江市 三島 湊丘
もう余白ないとカルテに嘔われる

大阪市 大川 桃花
自分でも持て余してる人見知り

尼崎市 市坪 武臣
お身体を大事にと書き風邪に伏す

鳥取市 倉益 一瑠
やさしさがときには欲しい炊事の手

河内長野市 坂上 淳司
ワイフから家計任すと脅かされ

奈良市 尾畑なを江
ヒナ段のテレビ番組安作り

八尾市 宮崎シマ子
どこまでが老いでどこまでが病氣

横浜市 川島 良子
これ以上老いてゆくのが怖いです

堺市 澤井 敏治
ニュータウンを老化させてる一人です

鳥取県 西谷 悦子
老人会70歳がまだ若い

塩竈市 木田比呂朗
日記には合格点と今日も書く

大洲市 花岡 順子
生きているウナギ私の手に負えぬ

吹田市 野下 之男
女房の機嫌直しに鰻井

米子市 中原 章子
次世代においしい鰻残したい

和歌山市 福井 菜摘
外されてほっとしているイヤリング

鳥取市 夏目 一粹
ゆとりある財布を持ったことがない

海南市 堂上 泰女
クーラーに続きガスレンジも故障

四条市 吉岡 修
似た顔がまた寄っている吹きだまり

和歌山市 武本 碧
年重ねおおらかになる地獄耳

米子市 後藤美恵子
重圧に耐える座布団真似できぬ

高槻市 富田 美義
我が長寿祈るでも無く鐘を打つ

藤井寺市 若松 雅枝
口出さず手出さず金は出してやる

瀬戸内市 東横ますみ
孫たちのパワーに負けている財布

横浜市 菊地 政勝
借金をなくしなんとかなる余生

寝屋川市 富山ルイ子
今もまだ娘に残そうと貯金する

枚方市 松原 保
譲られてそんな歳かと鏡見る

高槻市 富田 保子
何着ても何か足らぬと言う鏡

鳥取市 田中 天翔
納涼祭子供が増えてやる気出る

羽曳野市 吉村久仁雄
暑さボケ社会の窓が開いていた

三田市 足立つな子
ピクルスにして友に届ける夏野菜

熊本市 杉野 羅天
無になって浸る露天に癒される

大阪府 野田 栄呼
欲しかった暇が退屈へと変わる

神戸市 大島まさる
むずかしい会議あるので麻スーツ

奈良県 渡辺 富子
ずぶ濡れの子猫の瞳に残る

共選欄

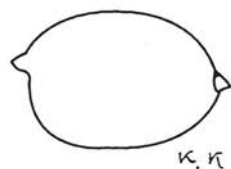
檸檬

檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 375名)



「パ」の牧野芳光選

仏様今日もパン食ごめんなさい
マンネリの朝こんがりとパンが焼け
コッペパン脱脂粉乳から巣立ち
戦争を知らない甘いメロンパン
年金で暮らしてパンの耳レシビ
米売って高いパン買う米農家
飢餓忘れ賞味期限が捨てるパン
パンの耳かじって今を生きている
発酵中パンも私もまだ蕾
食パンの端で過ごした新所帯
食パンがまた薄切りになりました
コンビニのパン年金の胃に馴染む
幸せとパンの匂いのする家庭
早弁のあとは主役のコッペパン
初恋のほんのり甘いメロンパン

岡山県	池田たか子
米子市	吉田 陽子
三田市	北野 哲男
大阪府	若本 安代
堺市	加島 由一
大阪府	小栢こずえ
三田市	上垣キヨミ
大洲市	花岡 順子
富田林市	山野 寿之
河内長野市	坂上 淳司
三田市	堀 正和
茨木市	藤井 正雄
高槻市	杉本 義昭
米子市	竹村紀の治
芦屋市	黒田 能子

「パ」の古久保和子選

米余る筈だ我家も朝はパン
日本の朝食パンに乗っ取られ
トースターボンで始まる平和な日
まだパンはお八つと思うご飯党
電化したくらしでパンが焦げている
昼の客サンドイッチでよく喋り
こだわりのパンの言い分聞き飽きる
パンとコーヒー同じリズムの朝がある
イースト菌今日一日を膨らます
パンにジャムたっぷり塗って出直そう
クロワッサンと一日座りたいベンチ
会話好きフランスパンの鼻を折る
誘われてクロワッサンに口説かれる
パン焼器買って一度も焼いてない
パン食べて御飯も食べる戦中派

東かがわ市	川崎ひかり
奈良市	加門 萌子
松江市	藤井 寿代
八尾市	中岡 妙
八尾市	宮西 弥生
大阪府	榎本日の出
和歌山市	武本 碧
泉大津市	助川 和美
富田林市	関 よしみ
三田市	久保田千代
藤井寺市	鴨谷瑞美子
三田市	今西 廣子
大和郡山市	坊農 柳弘
大阪府	米澤 俣子
鳥取市	谷口回春子

アニメならここへアンパンマンが来る
人生を凝縮すればコッペパン
仕方なく嫁に合わせた朝のパン
ハンバーガー品よく食べることは無理
アンパンが好きで出世に遠くいる
パンのみに生きる私がいとおしい
クリニク出ると焼きたてパン笑う
贅沢な話はないパンの耳
国破れ米からパンへ置きかわる
日に黒パン一つのシベリア抑留記
パン食うて大和魂置き忘れ
パン食に育ちサムライ揺れている
十人に十の想い出語るパン
手作りのパンに釣られて五十年
食パンの耳に溜まっている不満
リストラの気持ちも分かるパンの耳
パンの耳好きな男で潔癖症
被災地を思えば捨てぬパンの耳
飢えて死ぬ子を嘆いてるコッペパン
バゲットを手づかみにしてバリ気分
トースターボンで始まる平和な日
やりくりのスリル知ってるコッペパン
昭和残像兄とかじったコッペパン

日置市	前田	洋子
枚方市	寺川	弘一
藤井寺市	若松	雅枝
倉吉市	中村	毅
貝塚市	吉道あかね	
河内長野市	水谷	正子
西宮市	牧淵富喜子	
吹田市	須磨	活恵
青森県	松山	芳生
札幌市	小沢	淳
鳥取市	加藤	茶人
八尾市	宮西	弥生
出雲市	竹治	かし
堺市	柿花	和夫
松江市	石橋	芳山
豊中市	藤井	則彦
横浜市	川島	良子
枚方市	伊達	郁夫
橋本市	石田	隆彦
豊中市	水野	黒兎
松江市	藤井	寿代
高槻市	原	洋志
紀の川市	宇野	幹子

やりくりのスリル知ってるコッペパン
自画像の仕上げアンパンマンになる
朝は耳昼はへそあるパンを食べ
なよなよのパン食べてては働けぬ
パンのため信念曲げたこともある
あのパンはジャンバルジャンも食べていた
リストラの気持ちも分かるパンの耳
団塊の世代育てたコッペパン
王様はアンパンマンに尽きるだろう
アンパンの味が変わった日から晴れ
半分こしたのはパンとやさしさと
折り合ってパンに味噌汁俺と嫁
朝食はパンと御飯の差向い
パンの耳だから私は強い
ほどほどに茹いて膨らむパンの味
あんパンのへソに見つけた根性
朝はパン感謝はしても無宗教
パンとコーヒーこれで天下は語れない
ごはんだってパンだって好きママが好き
仏飯の代わりにパンですみません
パン焼ける匂い胃袋から目覚め
トーストを食べて田圃の見回りに
飢えた子が銃よりパンを待っている

高槻市	原	洋志
松江市	三島	崧丘
南あわじ市	萩原	狸月
倉吉市	田中紀美恵	
奈良市	岩本	浩二
弘前市	高森	一吞
豊中市	藤井	則彦
川崎市	成田せいじ	
大阪市	江島谷勝弘	
和歌山市	福本	英子
富田林市	中村	恵
河内長野市	穂口	正子
大阪市	榎本	舞夢
佐賀県	真島久美子	
雲南市	菅田かつ子	
枚方市	伊達	郁夫
篠山市	酒井	健二
札幌市	小沢	淳
四條畷市	吉岡	修
堺市	梅木	澄空
大阪市	伏見	雅明
橿原市	居谷真理子	
大阪市	川端	一步

朝パンが今日のかたちで焼き上がる
 気持ちいい音でトースト跳び上がる
 パンのみにて生きるおばあさんになった
 沈みこむ胸へこっぴりはまるパン
 パンのため信念曲げたこともある
 アンパンの丸さに負けている心
 血糖値あんパン一つだませない
 パンの屑こぼして父は平和説く
 あんパンを分けて痛みを分かち合う
 半分こしたのはパンとやさしさと
 コッペパン脱脂粉乳くじら肉
 母さんの味噌汁よりも嫁のパン
 アンパンの味が変わった日から晴れ
 フランスパンそろそろ結婚に飽きる
 パンのみに生きている日がふえました
 言いたいこと言ってもどうせパンの耳
 自画像の仕上げアンパンマンになる
 クロワッサン歳を取るのも悪くない
 アンパンのゴマボロボロと紙オムツ

秀句

大阪府	栃尾	奏子
弘前市	福士	慕情
奈良市	大久保真澄	
鳥取県	斉尾くにこ	
奈良市	岩本	浩二
三田市	尾崎	一子
瀬戸内市	東横ますみ	
神戸市	山崎	武彦
和歌山市	上田	紀子
富田林市	中村	恵
羽曳野市	吉村久二雄	
海南市	堂上	泰女
和歌山市	福本	英子
京都市	高島	啓子
橿原市	安土	理恵
三田市	久保田千代	
松江市	三島	淞丘
大阪市	谷口	義
東京都	伊勢田	毅
神戸市	白川	淑子
松江市	川本	畔
佐賀県	真島久美子	

手作りのパンに釣られて五十年
 気持ちいい音でトースト跳び上がる
 贅沢な話はないパンの耳
 腹の虫黙らせているコッペパン
 元気ですフランスパンが噛み切れる
 譲れませんかトーストの焼け具合
 手作りの無骨なパンを噛みしめる
 卓袱台で宿題してたコッペパン
 コンビニのパン年金の胃に馴染む
 沈みこむ胸へこっぴりはまるパン
 あんパンのへそが老舗の顔してる
 第三のビールに似合うコッペパン
 パン一枚企業戦士になれるのか
 あんぱんのような娘のいるパン屋
 カッポカッポ昭和史を行くロバのパン
 あんパンのへそが平和の要です
 もやもやを飛ばすパン生地たたきつけ
 人生を凝縮すればコッペパン
 パンくずで平和の鳩が寄ってくる

秀句

堺市	柿花	和夫
弘前市	福士	慕情
吹田市	須磨	活恵
和歌山市	磯部	義雄
大阪市	大西	晴雄
弘前市	高瀬	霜石
神戸市	富永	恭子
貝塚市	石田ひろ子	
茨木市	藤井	正雄
鳥取県	斉尾くにこ	
大阪市	柴本ばつは	
西宮市	片山	忠
大洲市	中居	善信
神戸市	奥澤洋次郎	
藤井寺市	太田扶美代	
松江市	石橋	芳山
大山市	金子美千代	
枚方市	寺川	弘一
鳥取県	松川	行男
大阪市	近藤	正
富田林市	山野	寿之
鳥取市	福西	茶子

「斜め」

(投句 195名)

松本 知恵子 選



ライバルは斜めに限度超えてゆく
爽やかに斜めに切ったキューリ盛る
妻の機嫌斜めと分かる皿の音
酒二合斜め歩きはお手のもの
ちゃっかりと影も斜めについて来る
斜陽にもめげぬなにわの町工場
お入りと斜めにさした傘が呼ぶ
大樹の影斜めうしろで様子見る
公約を見る方だつて斜に構え
ひょいと虹登って行けそうな斜め
切手貼るウサギは今日も傾いて
嫁姑斜め視線はもう古い
縦斜め何処から見ても丸は丸
九条の角度がじわり傾斜する
窓際で斜めから社を眺め見る
斜めから撮ると名城月に冴え
おぼろ月貴方に傾斜する情緒
縁側に日差しが入り夏終る
斜めから物を見るなど亡父の声
斜めから見るとなるほどピカソの絵

海南市	小谷 小雪	大阪市	藤原千恵子	奈良県	渡辺 富子	大阪市	伏見 雅明	米子市	吉田 陽子	藤井寺市	鈴木いさお	高槻市	島田千鶴子	鳥取市	池澤 大鯨	横浜市	菊地 政勝	香芝市	大内 朝子	松江市	錦織 禮子	米子市	後藤美恵子	河内長野市	谷 久美子	三原市	鴨田 昭紀	堺市	村上 玄也	今治市	渡邊伊津志	茨木市	藤井 正雄	河内長野市	坂上 淳司	宝塚市	田中 章子	松山市	栗田 忠士
-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-------	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-------	-------	-----	-------	-----	-------

陽の角度斜めになってからの鬱
老いの意地地球と同じ斜め向き
斜めから見るとやっぱり男だな
検討が過ぎて意見が傾斜する
斜め目線で番犬が吠えている
斜塔から見れば世間が傾いてる
斜線引くお世話になった人だった
のれん継ぐ今日も斜陽のペダル漕ぐ
遺産分け斜めから目が光ってる
傾いた羅漢を撫でてゆく晩夏
斜めからメロン見上げている西瓜
陽は斜め病室の鶴あす光れ
安売りのポスター斜めに貼ってある

佳作

地蔵さんのお袈裟斜めになっている
斜め読み情報詰める出社前
人生を斜に構える年齢も過ぎ
棄代だけが右肩上がりなり
ざれことを斜め座りで言ってみる

人

斜めから見れば何でもない話

地

斜めから切れぬ迷いを抱いている

天

反骨のペンは斜めに斬りたがる

軸

水捌けに少し斜めの暮し向き

出雲市	竹治ちかし	和歌山市	福井 菜摘	紀の川市	宇野 幹子	樺原市	居谷真理子	長野県	丸山 健三	大阪府	高杉 力	鳥取市	土橋 螢	横浜市	川島 良子	箕面市	出口セツ子	堺市	内藤 憲彦	鳥取市	大前 安子	神戸市	白川 淑子	堺市	遠山 唯教	鳥取市	夏目 一粋
-----	-------	------	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	-----	------	-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------

「コピー」

(投句 187名)

岡 本 花 匠 選



そっくりを生んだコピーにある野心
朝ドラの録画夫婦で観る至福
ブランド好きでもコピーには騙されぬ
ブランドのコピーで我慢まだ若い
アロハシャツ同じ柄だけ二枚買う
コピー賀状余白に自筆五七五
ブランドのコピーを皆に褒められる
いい人だころりコピーに騙される
外見はコピーのような双子です
電話から亡夫そっくり声がする
写経して背筋がのびた数時間
母さんのコピーのような自慢の子
絵手紙のコピー真心欠けている
名乗らなくても判つてますよ生き写し
父母の菩提弔う写経する
そっくりにまだまだできぬ母の味
ほほえみを忘れたモナリザのコピー
似てほしくないところだけ似る親子
清貧も熱い血潮もDNA
コピーしたよな顔並ぶ子沢山

豊橋市 藤田 千休
横濱市 菊地 政勝
東大阪市 北村 賢子
唐津市 北村 松風
弘前市 吉川ひとし
三田市 尾崎 一子
札幌市 三浦 強一
弘前市 高瀬 霜石
加西市 金川 宣子
米子市 中原 章子
紀の川市 楠原 富香
和歌山県 森下よりこ
米子市 吉田 陽子
香南市 桑名 孝雄
大阪市 寺井 弘子
大阪市 奥村 五月
青森県 松山 芳生
鳥取市 岸本 宏章
箕面市 出口セツ子
大阪府 米澤 俣子

大と小そっくりさんが浮ぶ風呂
自分似を五百羅漢で探し出す
コピー用紙になって嬉しい再生紙
ご遺影のコピーが並ぶ通夜の席
DNAコピーのような子がひとり
じいちゃんとそっくり同じ団子鼻
のぞまれて妻のコピーを嫁に出す
まるでコピーしたかのような親子連れ
若作りコピーしたよな母娘づれ
私をコピーしたよな娘です
父親をコピーしたよな子の育ち
拗ねる孫親のコピーと苦笑い

佳 句

孫ひ孫えんえん続くだんご鼻
大切な言葉心にコピーする
父親にそっくりだから娘が嫌う
親子孫コピーの様な顔かたち
遺影抱く生れ変りの様な喪主

人

子は親のコピー丸ごとDNA

地

なるほどね遺影の顔が並ぶ通夜

天

DNA仕草まで似ている親子

軸

良い笑顔四つ切判に替え写す

三田市 福田 好文
三田市 堀 正和
弘前市 福士 慕情
河内長野市 坂上 淳司
奈良市 米田 恭昌
大阪市 伏見 雅明
堺市 遠山 唯教
弘前市 稲見 則彦
奈良市 岩本 浩二
豊中市 松尾美智代
横浜市 川島 良子
鳥取市 谷口回春子
奈良県 渡辺 富子
今治市 渡邊伊津志
和歌山市 磯部 義雄
河内長野市 谷 久美子
三田市 北野 哲男
鳥取市 永原 昌鼓
奈良市 大久保真澄
松山市 神野きつこ

「管 理」

(投句 192名)

野 口 節 子 選



出来るのは健康管理だけと知る
野放しの管理雑草生い茂る
ルビー婚妻は端から管理人
自分史に自己陶醉の危機管理
管理して下さい心はぐれそう
エンディング済ませ気楽になる命
管理職肩書きつけて四苦八苦
昼は鞭夜は酒場で飴使う
センサーに職奪われた管理人
頂点が視野に入った管理職
人脈の厚さ管理にそつがない
薄味に慣れたよ妻よありがとう
甘くなる隙間だらけの自己管理
家計簿の管理は妻の匙加減
日本の恥部は空家の管理です
風呂トイレ掃除担当わたしです
離れていても老母の六感怖いほど
コントロール出来ぬ自然と生きている
平和です金庫の鍵は妻握る
管理職しつかり管理されている

和歌山市	武本	碧
富田林市	関	よしみ
弘前市	稲見	則彦
大和郡山市	坊農	柳弘
米子市	吉田	陽子
三田市	尾崎	一子
鳥取県	山下	節子
和歌山市	平田	元三
高槻市	原	洋志
鳥取市	吉田	弘子
青森県	松山	芳生
香芝市	大内	朝子
和歌山市	北原	昭枝
富田林市	山野	寿之
鳥取市	夏目	一粋
大阪市	江島谷勝弘	
羽曳野市	徳山みつこ	
西予市	黒田	茂代
江南市	脇田	雅美
三田市	堀	正和

猿山のボスも辛かる管理職
通帳もカードも妻に握られる
管理社会に居て憶れるアウトロー
賞味期限切れた夫婦の遊び癖
暇人に一投足を管理され

G8地球管理をする驕り
もうやめようよ勝ったとか負けたとか
熟練の部下が煙たい管理職
今いまは銭の管理はまだ確か
妻の持つ紐の長さで管理され
危機管理夫婦仲とて気を抜かず
鍵の束妻に任せて恙無い

佳 句

管理などされてたまるか我が人生
胃ぐすりに頼る中間管理職
じゃじゃ馬の管理任せられ胃かいよう
人生の後半妻のたなごころ
悪妻にあやつられてるやっこ風
人

管理などされるものかと汚染水

地

管理者と同じ白さの飯を食う

天

放蕩の俺に首輪がつけられる

軸

管理下を抜けて桃源郷へ行く

倉吉市	中村	毅
弘前市	吉川ひとし	
和歌山市	柏原	夕胡
松江市	三島	湊丘
鳥取市	福西	茶子
出雲市	竹治ちかし	
弘前市	高瀬	霜石
可見市	板山まみ子	
倉吉市	山中	康子
大洲市	中居	善信
高槻市	富田	美義
和歌山市	福井	菜摘
倉吉市	田中紀美恵	
大阪府	米澤	俣子
西宮市	足立	茂
鳥取県	竹信	照彦
紀の川市	宇野	幹子
池田市	上山	堅坊
長野県	丸山	健三
松江市	石橋	芳山

初歩教室

題一 沈黙

山口 光久

皆さんの中に題を句に詠み込んでいる方と詠みこんでいない方がおられます。勿論、第詠みこむか否かは作者の自由です。

一般的には、題が名詞の場合は詠み込み、動詞、形容詞の場合は詠み込まず表現する傾向があるようです。

詠み込むか否かは地域によって差があるようで、関西では詠み込むのが普通ですが、関東では詠み込まない方が多いようです。

初心者の方は素直に、率直に詠み込んだ方がいいかも知れません。でも作者には個人差があるようです。詠み込まない場合、句意から題が読み取れない、感じ取れない時は句として佳い句と思われても没になります。

なお、題の否定形の場合や同音異義語を使った場合の句の可否はどうでしょうか。例えば、「立つ」という題で「立たない」という否定形の句や「絶つ」という同音異義語を

使った句についてどう判断するかです。絶対に採らないという選者がおられます。

【添削】

原人の道誇りをもてる終えんに
マユミ
題を間違えておられます。一二月の題がブライドですが。

添人の道達えぬ自尊終の章

原ロボットは沈黙のま、今日を終え まさる
最近のロボットはよく喋りますが、産業用のものは喋りません。

添黙々と働くロボが今日を終え

原バスター沈黙寝るか食べてるか 澄空
句がぎくしゃくして、リズムが悪いです。

他に適当な言葉はないか、また句の上中下を入れ替えてリズムを整えましょう。

添バスター寝るか食べるか黙り込む

次の九句は「沈黙は金」という諺を使って
作句されています。これは「沈黙は金 雄弁は銀」のことで、沈黙の方が雄弁よりも説得力がある、という事です。ちよつと意味を履き違えての句もあるようです。諺や四字熟語は出来るだけ避けるようにしましょう。

原沈黙は金も時々銀になる
道子

添沈黙は金雄弁は銀である

原沈黙は金というのはいかがかな
登子

添沈黙は金というののも時による
秋星

原「沈黙は金」とか言ったのは昔

添沈黙はやはり雄弁には勝る
(齊) 宏子

原沈黙は金とはいまや死語となる
律子

添沈黙を守り静かに策を練る

原沈黙は金と言うから黙秘する

添沈黙して今は静かに見届ける
英男

原沈黙は金人の噂はほどほどに

添沈黙は金人の噂は気にしない
(前) 洋子

原沈黙は金というけど損もした

添沈黙をしてたら損がふくらんだ
心咲

原沈黙は金と知りつつ言い分ける

添沈黙は金と知りつつ不覚とる
とも湖

原沈黙は金です不倫には触れぬ

添沈黙に耐えぬき不倫には触れぬ
忠貞

原沈黙が一日もたず仲直り

中八になっています。助詞の「に」を取つても全体の意味は変わりません。

添沈黙が一日もたず仲直り

原だんまりの一言波がうねりだす
忠士

「一言」を取り違えています。

添黙りの一事に波が荒れてくる

原子の帰り待ち長い沈黙続く
きっこ

添子の帰り沈黙もなか待ちわびる

原 沈黙がいやで道化の役まわり

添 沈黙に耐え切れないで道化方

原 沈黙を恐れるようにしゃべりたて

添 沈黙が重苦しくて喋りだす

原 沈黙し互いに腹を見すかされ

添 沈黙にお互いの腹の探りあい

原 沈黙のわがまま通す日は重い

添 わがままを通し沈黙やって来る

原 沈黙し嵐過ぎるのを待っている

添 沈黙して嵐が過ぎるのを待とう

原 甘い汁吸って沈黙守らせる

添 甘い汁吸って他言を戒める

原 けんか後は沈黙破るいつも妻

添 喧嘩後の沈黙破るのは私

原 沈黙も攻撃となる夫婦間

添 沈黙が仲を取り持つ老夫婦

原 叱られて黙っていると又叱る

添 叱っても黙っているとまた叱る

【少しの修正で良くなる句】

原 黙りが耐えられないのもう折れる

添 黙りが耐えられないですぐ折れる

原 会議中沈黙破りどなりだし

添 会議中沈黙破り怒鳴りだす

原 喧嘩あと沈黙つく老い二人

添 喧嘩後は沈黙つく老い二人

原 沈黙を噛みしめて知る人の和を

添 沈黙を噛みしめて知る人の道

原 沈黙を続ける苦痛耐えている

添 沈黙を続け苦痛に耐えている

原 沈黙が黙秘権だと勘違い

添 沈黙が黙秘権だと誤解する

原 このことは心のひだに納めよう

添 このことは心のひだに納めよう

【入選句】

沈黙を破り小泉立ち上がる

沈黙は心の揺れの影法師

沈黙を破る勇気のひとしづく

惨敗を恥じたか以後は口利かず

筆に墨含ませ息を整える

通夜の席死因聞かざる顔と顔

定年後沈黙してる無為徒食

沈黙の中を噂が駆けめぐる

沈黙が辛く感じて仲直り

帰国まで黙ったままの拉致の人

沈黙を破る一声孫が来る

沈黙を破り末席手を挙げる

沈黙を貫き通すのは苦行

沈黙は雄弁よりも物を言う

おしゃべりが黙りこんでる何かある

沈黙でノーと分かったプロポーズ

沈黙の中で赤ちゃん放屁する

沈黙を守ってくれた母の愛

豪雨くる沈黙守る蟬しぐれ

父ちゃんが黙っていればうまく行く

ばあちゃんが黙り出したよ危ないぞ

ときどきは沈黙してはいかがです?

知られたくない事そとと蓋をする

【佳句】

元兵士沈黙破り語り出す

夕食の沈黙破る孫が来る

腹の虫なだめ黙って皿洗う

今はただ黙って明日の夢を着る

沈黙に耐えて花咲く時をまつ

【今月の推せん句】

沈黙を破った妻の離縁状

耐えてたえて、耐えぬいてきた奥様の堪忍

袋の緒が切れたのです。

沈黙も我慢比べだ倦怠期

倦怠期にはいろんなことが起きるでしょう。

その時はやはり「沈黙は金」です。

痴話喧嘩パントマイムはまだ続く

パントマイムとは上手い表現ですね。早く

終わらせて下さい。

【私の句】

沈黙の中でじっくり策を練る

(富) 恵子

天 翔

勝 治

狸 月

紀美恵

加 代

のり子

(市) 恵子

国 和

(見) 温子

恭 子

晶 子

昭 枝

楠原 富香

山下 凱柳

吉川ひとし

早く

早く

早く

早く

早く

早く

早く

早く

早く

早く

川柳塔鑑賞

同人吟 川端 一步

— 9月号から

神様が絡んでござるむこいテロ

吉岡 修

「引き分けは神様のおぼしめし」という外国のことわざがありますが、本来神様は平和主義のはず。テロの神様は「おらが絶対」おそろしい限りです。

お隣もその隣もお年寄り

村上 玄也

吹き出しそうになりましたが、笑っちゃいられません。ある統計によると「2050年には65歳以上の高齢者は3586万人になり、人口は2050年には1億59万人になる」と。少子化・高齢社会問題は党派を超えた緊急課題です。

台風の進路は著先でつまむ

古久保 和子

台風と箸先、二物衝撃の妙、さすがベテランの味。安倍暴走なにか料理の方途はないでしょうか。つまみ出したいが。

間違いの二二三つは胡麻和えに

高島 啓子

だれにも間違いはありますが、それをどう料理するかがむつかしい。胡麻和えとはさすがのセンス。下手な言い訳で傷を深くしている自分が情けない。

六月川柳塔定例会のお話で、『鬼百句』の紹介をした時、菊澤小松園さんの川柳

に対する姿勢や大先輩藤原さんの「川柳塔誌が着いたらどうするか」を紹介しました。私自身お二人の教えをまだ実践できていないのに、この欄を担当するとは誠に心苦しい限りですがご勘弁お願いします。

選句はユーモアと穿ちを中心に選びました。

強いよりやさしい国に総理殿

岸本 清

安倍総理は口をひらけば「強い日本」を言われますが、国民が望んでいるのはやさしい政治の国です。アメリカには弱くて国民に強権では困ります。

憲法の解釈変えてトテチテタ

三浦 強一

いま焦点になっている集団的自衛権。「何故そんなに急ぐのか」充分な説明が

あったとは思いません。「トテチテタ」はこれでいいのかの訴えかと。

赤紙がまた出まわらぬよう叫ぶ

板山 まみ子

八月十五日、街頭で赤紙を配った人の話によると、今年は特に若い人たちの受け取りが良かったそうです。喜んでいいのかどうか。

大方はパートで支えてる社運

岸野 あやめ

大企業の内部保留がここ数年で大きく増えています。その基盤を支えているのはパート労働者です。太った分は労働者に還元すれば良いのですけれど。

拉致家族ぬかよろこびにさせまいぞ

岸本 孝子

平和論では国民の意見が分れても、この課題では、国民の意見は一致します。どんな交渉で解決をはかるかはともかく、全員無事の帰国を願うばかりです。

知らん顔少しは出来るようになる

坂 裕之

人にもよるのでしょうけれど「知らん顔」できるのは何歳ぐらいからでしょう。「少しはできる」この辺の心得をぜひご教示願いたいものです。

体重の半分ほどは恥である

原 洋志

凡人は褒められることより、恥の方が多いのが常だと思いますが、「体重の半分」という表現はお見事。ご本人は極めて真面目で粗相などないと思いますが。

全没だ落ち込まないぞ連れも居る

福 島 弘子

この句を読んでどれだけ多くの共感者が生まれたことでしょう。よく聞く「選者と合わない」より「連れもいる」がいい。作者の人間性が彷彿とうかぶ。

雑草と蔑視をするな名があるぞ

升 成 好

宮武外骨は宛名に外骨と書いていない手紙は封を切らなかつたと言います。雑草も当然プライドを持っていることでしょう。蔑視はしていませんが、多くの雑草名を知りません。ごめんなさい。

出る喋る食べるが仕事老い楽し

亀 岡 哲子

そうです。それが出来る健康体と環境を喜びましょう。相棒に「まだですか」と送られ、「飲む」が追加するものですか「家を忘れないでね」の人も。

借金はあるな金持ちにはなるな

小 澤 幸 泉

国民の大多数は句のとおりつましく勤勉に生きています。この精神をそっくり、国の責任者に言いたい。国民一人当り一千万円近い借金。大方は私たち国民が知らないうちに。

遊び過ぎこむら返りに叱られる

竹 村 紀の治

専門家に聞けばこむら返りは疲労した時になることが多いとか。「遊び過ぎ」がおもしろい。実は川柳行脚でお疲れではないでしょうか。

母の手がきれいになって老いてゆく

尾 崎 一 子

武者小路実篤の小説。友人に女性の手の美しさを話す場面を思い出しました。へきれいになってゝその様子が目に浮んで来るようで清々しい気持です。

札束で揺れる程度の真面目です

大久保 眞 澄

札束に揺れるのは反語だと思えますが、作者の真面目さは、まわりの人がよく知っています。友人も知人も家族も。

泥足でおやつした早乙女をした

吉 田 孔美子

身内の話で恐縮ですが、妻の出身はお百姓。毎日朝早く起きて学校に行くまでに農作業一つ終えて出たとか。早乙女という言葉いつまでも残したい。死語にならなければ良いのですが。

常識を跨いだ足が腫れている

石 橋 芳 山

この句にふれて、ペンが止まりました。何でもないような表現ですがとても奥が深いと思いました。路郎語録を借用して鑑賞に変えたいと思います。『寒さや空腹が せまって来る迄に わたしたちは一句を遺しておかねばならぬ』

ずばりではすねるやんわりでは効かぬ

江 見 見 清

お湯全部抜いて朝刊待っている

谷 口 義

水煙抄鑑賞

—9月号から

石橋 芳山

後悔を入れるポケット追加する

大和 峯二

良く分かる。いくら後悔しても次から次と増える。忘れることも捨てることができずに後悔はずーっと尾を引いて残る。仕方なくポケットを追加してしばらく後悔を持って歩くことにする。

脱水が効かなくなつたのか涙

真島 久美子

涙は女の武器と思っていましたが、この表現はさらっとしていてそれを感じさせない。こんな涙もあって良いのだろう。

ムーミンのおなかになつて旅終わる

吉道 あかね

そうなのです、大概の人はこうなるのです。旅先の郷土料理についていい気が緩んで食べ過ぎてしまう。でもそれが楽しい旅行ですよ。ガンガン食べましょう。

行数で温度差気付くEメール

高杉 力

熱い気持を伝えようとするといついつい長文になって送信キーを押す。そして返信の文は「あっそう」とかの短い文だったりすると、気が抜けて自分が送った長文メールは何なの？である。

三日月をあやして海はピアノソロ

栃尾 奏子

静かな夜の海を見てみると、空には三日月がでている。そんなシチュエーションではあるが、海を男性・三日月を女性との妄想を抱かせる。

夕食はいらんと言われほくそ笑む

山崎 早苗

五作品全てがユーモアに満ちていて最高に面白い。日頃の家事からの解放に対する喜びが「ほくそ笑む」に全て表現されている。

宝石を買いもせぬのにゼロ数え

助川 和美

買える金額でない事は百も承知。到底手が出ない金額。どこの金持ちが買うのか、正札のゼロを数えてしまうのは、やはり人情ではないか。

アメリカの窓から世界見せたがる

荒川 純甲

世界の警察を自任している超大国のアメリカは自国が正義であって、自国の考え方物の見方を世界各国に押し付けてきたようにも思える。最近はその力も弱くなって来ているようだ。

音ほどのスピードでなしオートバイ

平田 元三

50CCバイクに多いようだが、音だけを甲高く響かせているのを見るが、あれは何を目的としているのか意味不明、とにかく迷惑なことは確かだ。

はつらつと見える様にと派手な色

前田 恵美子

心当たり有り。そして最近では歩く姿勢まで気にしている。背中を伸ばして、若さを意識している。この時点ですでに老人なのだろうか。

やさしさが妖しさとなる三代会

肥後 和香子

三代会ともなれば酔いも回って時間も遅くなる。男の本生もチラチラ見えるころかも知れないが、こんな男と女の駆け引きを楽しんでいる様にも思える。

民族の詩歌 (28)

― 時事川柳

三 好 專 平

時事とは、現代社会の事象全般をいう。だからほかの事象とその境目はあいまいであるといえる。ここでは大まかに（社会のあれこれ）としておくことにする。

地球は今どうなっているのだろうか。地球紛争・温暖化・人口増加・ＩＴ革命・核開発、あげればきりが無い。不安は募るばかりである。効率のみを求める現代の風潮は、弱者を蹴落とし続けている。

封建制の時代から、資本主義の時代、さらには一部共産主義の時代を経て、人類は崩壊の危機にあるのではないかと、悲観的観測をする。理想とした『すべての人間が

しあわせになる』という社会がくずれ、戦争や弾圧や虐殺、政治家や官僚や企業の汚職・腐敗と隠蔽。カネ・カネ・カネ。

制度的退廃とともに、人間の内面の崩壊も進んでいるように思われる。映画『闇の子供たち』（阪本順次監督）はそういう人間の心に潜むエゴを描く。

動物が本来持っていると思われる、思いやりが完全になくなったわけではない。たとえば、「国境なき医師団」のように、人類の危機に立ち向かっている人たちもいる。声は小さいが、文学や映画で真実を伝えようとすると人々がいる、しかし、マスコミで良心的発言をするとすぐに封殺されてしまふ現実がある。

どんなことにも驚かなくなった人間の群。命は鴻毛より軽く、心は星屑よりも遠くなってしまう。伝統的社会は軋み、少数民族や弱者は、弊履のように打ち捨てられ、未来に絶望し、『自己責任』のみが押し付けられ、臭気の漂う環境の中で、孤独

に喘ぐ。敢然と川柳はペンでいどむのだ。

川柳塔 1035号より。

アベノミクスいい事ばかり続かない
乱高下アベノミクスの涙雨
祝日も疊んだままの日章旗
少子化を喰う枇杷の実子沢山
消費者にじわじわ円高が迫る
しかたなく活断層の上にいる
コンビニとヘルパー村の命綱
百均で心ゆくまで浪費する
小選挙区司法の壁が許さない
家計簿がグツとこらえる徳俵
原発の不安と猛暑聞き合い
物置の一等席に防災具
耳向ける方に流れるスキヤンダル
原発もダムもいずれば負の遺産
外交はもつとわいわい言うてくれ
改憲して孫戦場へ遣りますか
右左器用な舌を持つてはる
長生きを祝う陰には泣く介護
ご先祖の墓地に少年兵眠る
トタン屋根に降る雨音にある昭和

弘子
光弘
礎石
巴子
かすみ
唯教
時雄
弘子
正
五月
満子
かつ子
政良
善信
修
光
ダン吉
郁夫
富美子
朱夏

『麻生路郎読本』余滴 (23)

「矢車」と路郎作品 ⑤

楽原道夫

「矢車」二五号(明治44年4月)に初めて、作品「街の色」(一七句)を寄せた路郎は、同号の課題吟「離散」藤村青明選にも五句入選している。

黄昏の花の白さの離れ行かず

何からも離れて今は金を戀ふ

別れ来て海の匂ひにあくがれぬ

家を離れて若かりし日をなつかしむ

次の句を青明がこのように評している。

とり散した心に街のけだるさ

(評) やるせない作者のムードがよく出て居ると思ふ。此作者にはまた「黄昏の」といふ句がある。これ等の句を読んで、私は、若い作家の官能のデリケートな心持を慕はずには居られない。矢つ張り若い人は若い人らしくきび／＼した作を見せて欲しいと思ふ。私は此作者のこれが最初の試みであるという處に最も自由な態度を認むると同

時に、私は此作者の前途を注視することを興味深いことに思つて居る。此作者及び*「散る花に」「逃れ行く」「音も無く」の作者に私は向後の努力を怠らざることを切望する。

*散る花に我がそことなき死の意識

中川 絮柳

離れゆく暮雲を崖に見て在る日

浅野 空介

音も無く散る花に似し戀の果て

今岡 芳仙

また、水府の句も評しているのので、参考に挙げておく。

すれ違ふをんなの傘の骨が泣く

(評) この作は氣分を巧みにシンボライズした處がとり柄である。此作者の取材は多方面で、どんな事件でも詩にして見せると

いふ傾向が眼につく。また、それを巧みに取扱つては居るが時には材料の撰擇を誤つて居やしないかと思はれることがある。要するに此作者は「器用」の二字にあてはまるらしい。これがやがて此作者の長所であつて、また、短所とも成つて居る。作者は今少し取材を精撰して少年のみづ／＼しい心持を味はせるやうにして欲しい。この外*「なつかしい」などの作もい。

*なつかしい夜といふ名に離れ得ず

「矢車」二六号(明治44年5月)で筆者がチェックした句を挙げておく。荷十、五葉、青明は、一頁二段組みで三〇数句、三郎、龍郎、幾二は、半頁で一五句程度掲載されている。

朝と夜にかすかにわれのあるを知り

荷十

遠き日の淋しさ離れ行く心

*三郎

猫に唇ふれしが如き朝の日さし

*龍郎

晝の湯に蠅のなげきのうらさびし

*幾二

懸けてある僕の帽子が僕を見る

五葉

葉櫻にはれがましくも夏帽子

青明

*「三郎」は半文銭の本名。「龍郎」は

水府の本名。「幾二」は三太郎(當時

・眉愁)の本名「幾次郎」からの命名

だが、前号（二五号）から使用。なお、路郎（前名・千松）も本名の幸二郎から命名した「路郎」を前号から使用。

明治43年に短詩社を青明が復活させ、同44年7月に「轍」を創刊。多くの人は雅号を用いず本名で作品を発表した。「轍」はまだ発刊する前だが、青明の影響で「矢車」にも本名で発表したのだと思われる。青明も「矢車」二八号（明治44年8月）から本名の「一」を使っている。

「新川柳」（大正2年5月）の「雅號の由緒」で、青明は次のように述べている。（小生の號には由緒といふ程のものなし數年前川上日車等と共に川柳家が不眞面目なる號を使用するは自己は勿論川柳の前途に必ずや悪影響を及すべきを悟り慨然改號せしものなり（筆者註）觀面坊から青明に変えたことを言っている）しかれども小生は向後短詩の爲めに出來得る限り本名を使用する考へなり、然れども此際を利用して小生は向後の短詩家によろしく不眞面目なる雅號は勿論月並的な雅號をも廢し本姓本名にて吾が短詩の爲めに懸

命に努力を注がんと希望するものなり。

「矢車」二六号の路郎作品は、「矢車創作」欄に、次の九句が掲載されている。

自畫像に淋しき自己と知りにけり

草に寝てたゞ白日をなつかしむ

獨居れば隣にはでな三昧が鳴る

四月の夜どこでかへたか淋しき下駄よ

街に入りて物の匂ひに疲れ倦む

* 芝居裏へ曲る女の眼のうるみ

酒ものまず歸りて叩く淋しき音よ

淡い灯に思ひ／＼に向ひた影

留守に來たといふ丸刈りの友を思ふ

* 道頓堀旧角座裏から堺筋までの東西の通り。遊郭より安価で女性が春をひさぐ場所であった。「川柳塔」の編集をしていた不二田一三夫氏が「芝居裏」の思い出話を書いていたように思うが、未調査。

これらの句に共通して感じられるのは、やるせない気分である。近代化を推し進めてきた明治末の青年（路郎は満二二歳）が抱いていたであろう倦怠感がうかがえる点

では興味深いが、現代の目から見ると、古い映画のワンシーンでも見ているような気がするものも否めない。筆者がチェックしたのは、一句目の「自畫像に」の句。この句の自己凝視の確かさは古びていないように思った。

また、この号には、短詩社の「六厘坊追悼詩會詠草」が紹介されているが、路郎の句を挙げておく。

君在らば我等が詩をば如何に見ん

逝きし君の句を拾ひ讀む淋しさよ

よく話す君より二年生きのびし

荷十が、自分達の新傾向について、同号の「斷片語」で、次のように述べている。

《吾々の川柳の新傾向は今や第二期に這入てゐる、或る事件を傍觀して、専ら事件の推移を叙し、人物の氣分を描いた時代は過ぎ去つて、目下の吾々の作句の態度は、正直に自己の感情を叙して氣分を表はすのに努めてゐるのである。吾々は皆正直である、又正直でありたい、嘘らしい作品を嫌（あきら）まなく思つてゐる。》

「矢車」二七号（明治44年6月）の表紙

のみ「川柳詩 矢車」となる。「矢車」の表紙は、創刊号（明治42年4月）から二一號（明治43年12月）までは「矢車」。二二號（明治44年1月）から二六號（明治44年5月）までは「川柳 矢車」。二八號（明治44年8月）は「やぐるま」。二九號（明治44年9月）から終刊の三二號（明治44年11月）まで「矢車」に戻る。

二七號の表紙のみ「川柳詩 矢車」であるが、同號の「柳壇月評」で、弓之介（紫痴郎の別号）が、次のように述べている。

（我等は、穿ち、輕味、おかしみの含まれて居ないものは川柳ではないと云つた狭い意味に川柳を解したくない。又字數も必ず十七字でなければならぬと云つた事にきめたくない。昔からも字餘りや字足らずは免してある。そこで私共は、十七字内外で人事趣味を謳つたものを川柳の主なるものと心得へ、更に明治の川柳詩は十七字以外に内心描寫をしたものと心得て居る。よし夫れが純客主觀であれ、主觀を通じての客觀又は客觀を通じての主觀であれ、又其方法も夢幻的に又は象徴的に若くは直情的にあれば、吾人の内心を描寫し表す其技巧の巧拙に依て價值は定まるものと思ふのである。

る。のみならず表し方こそ異なれ、句の裏面には諷刺もあり、矛盾の滑稽もあり、戀あり、無情もある。イヤ夫れは川柳ではない、川柳と云ふものは什うしても古句の取材又は形式に據らなくてはならぬと云ふ人があつたとすれば、私共は言下に仰せのものは模川柳で我等の川柳詩ではないと、お答へする。）

同号「編輯室より」で、荷十はこう述べている。

（川柳界では矢車の詩に惡罵を放つてゐる人もあるが文壇の一部では矢車を評して一般詩界と比肩すべき創作を出さんと努力してゐる。中には近代人の氣分とか情緒とかいつたやうなものゝ閃いてゐる面白い句もある。とか「遊び」的作品は皆無で若き人々の偽はらざる聲をうたつた面白いものだとか云はれてゐる。

私は川柳界の人々が徒らに惡罵をしてゐるのを止めて冷靜な眼で見て貰ひたいと思ふ。）

「矢車」二七號で筆者がチェックした句を挙げておく。

こころただおたやかならず解剖圖 青明
殘像の赤よ綠よ若き日よ 同

汽車中に生きてるといふ意識のみ 五葉
淺草の林檎の匂ひ夜の底 破魔杖
よく笑ふ男よと言はれ淋しみぬ 龍郎
ぬけし毛の手にまつはるるものうき日

*とよ子
倦みはてて乳のおもみをおほゆる日 同
ホト／＼ものに倦み果て、風呂へ行く

*由三

とある街の明るさにフト立止り 三郎
君のめでし水仙はわが部屋に在り 荷十

*菅とよ子。藤村青明と同棲していた女性（川柳総合大事典「第一巻人物編」の「青明」の項による）。青明が明治44年7月に出した「轍」にも参加。由三は、馬場緑天の本名。

「矢車」二七號の路郎作品は、「このごろのさびしさ」の題で、一三句掲載されている。

このごろのさびしさ

櫻散るころよりふみの來すなりぬ

よりかゝる鐵柵に湧く淋しさよ

辛じて動く時計の我に似し

逝きし甥を懷ふ

あの太き眼の淋しけれうかび来る

苦しさに嘔くボイラーみてありき

想ふべく泣くべく来れば葉櫻よ

僕は立つている煙突は煙吐いている

ハンカチフの隅ににじみぬちさき詩

Push This End 銀紙^マだけがのこる淋し

さ

ひしごきが靜に壁にたれてゐる

思ひ倦みぬ酒が命の愚な男

バカにして友とはいりし江州音頭

なげやりの其の日その日を淋しみぬ

全句について寸評しておく。

「櫻散る」の句。この「ふみ」は恋文で

はなくて親友からの手紙だと思った。桜が

散つて世界が活動的になる時期に、その流

れに着いていけない感じ。自分の存在を忘

れられたような憂愁。

「よりかゝる」の句。凭りかかった鉄柵

のひんやりとした感触に淋しさが湧いてく

る。鋭い感性の句。

「辛じて」の句。辛うじて動いている時

計と自分との対比が平凡。

「あの太き」の句。事実を報告しただけ

の句。

「苦しさに」の句。「ありき」を「歩き」

ととると、事実を報告しただけの句になっ

てしまう。「あり」+過去の助動詞「き」で、

苦しうに嘔くボイラーを見ていた自分の

気分を表そうとしたのだらう。

「想ふべく」「ハンカチフ」の句。葉

櫻よ」「にじみぬちさき詩」のどちらの言

葉も作為があらわである。頭で作った句。

「僕は」の句。「僕」と「煙突」の様子

を対句のように並べた句。新興川柳の中に

混じっていてもおかしくはない句。

「Push This End」の句。「Push This

End」を直訳すると、この最後を押してく

ださい。煙草の箱のことを詠んだ句だらう

か。御教示を乞う。

「ひしごきが」の句。「ひしごき」は「緋

扱き」。女性と一夜を共にしたときのけだ

るさを詠んだ句か。

「思ひ倦みぬ」「バカにして」「なげやり

の」の句。三句とも自嘲の句だが、思いを

そのまま述べただけの句。「江州音頭」は、

漫才の寄席が出来る前のころ、大阪の千日

前で興行されていたものだらう。インテリ

層が観るものではなかった。

全句寸評したが、筆者がよいと思つて

チェックした句は、「櫻散る」「よりかゝる」

「僕は立つている」の三句である。

また、課題吟「黄昏の感覺。眼」藤村青

明選に、路郎の次の六句が入選している。

暮淋し浴衣をちよつと着てみたり

傷めるころ今日も暮れけり

タオル提げて 昏の街出て行きぬ

二階にひとり、嬢が来て灯をつける

倦みはてぬ家をおもふてベンをおく

戀無くて寂しきもよし夕のころ

他の人の入選作を抄出しておく。

櫻坊に戀人の眼をおもふかな 絮柳

眼をそらしほほ笑む君のにくかりし とよ子

ひとりの夜の指に臉のやはらかみ 由三

心ゆくばかり泣きたるのちの夕日 龍郎

天地のなかに一人は暮れ残り 三郎

「矢車」は毎月二〇日発行が原則で、遅

れることもあったが、これまでは毎月出て

いた。が、七月号は編集兼発行者の森井荷

十が病気で休刊となった。二八号は、日を

繰り上げて八月一〇日に発行された。

(次回に続く)



時事を詠う

時事吟の価値

私たちが取り組んでいる川柳は、自分を含めた「人間を詠う」ことを主としていますので、その営みの中で大きな比重を占めている政治経済を無視することはできません。今回はこの「時事吟」について考えてみます。

時事吟は政治や経済のみならず、最近では「事件・事故」「科学技術」「芸能・スポーツ」「旬の食材」等々、今の私たちを取り巻くすべての事象を対象としています。左の作品は最近の川柳塔誌からピックアップしたものです。

知日派という言葉聞きホッとする

梶原 弘光

自衛権どこに着くやら日本丸

野下 之男

餓死の字と親子をずっと思いけり

牧淵富喜子

細胞がどうのこうのとサイエンス

平松かすみ

小保方さんの名前は覚えにくかった

谷口 義

芸術や文芸に興味を持っている人は、政治や経済には関心が薄いようです。逆もまた然りで、選挙のことばかり考えている代議士や、金儲けにいそしんでいる人は、芸術や文芸の価値を低く見ているフシがあります。しかし、いかに俗から超越した芸術家でもカスミを食って生きてゆけません。我が国の現状と自分が理想とする社会の乖離などの意識は持ち、「つぶやき」程度でも意見を述べるべきでしょう。そのような小さな声が集まって政権の暴走を防ぐこともできます。時事吟は意見を述べる機会の少ない弱者の代弁でもあります。

一過性と継続性

ただ、事件や事故を詠った時事吟は一過性であり、時が経てばインパクトが薄れ、素材によっては何を言っているのか分からなくなることさえあります。それが「旬」を詠う時事吟の宿命でもあります。現代社会の矛盾や問題点に鋭く切り込む短詩文芸は川柳において他にはありません。最近短歌でも時事を詠うことが多くなっていますが、やはり寸鉄人を刺す鋭さは川柳の方に分が有るようです。

神武以来食えぬ人あり放つとかれ

石原青竜刀

天高く閣僚の名も知らぬ秋

田中 文時

勝馬に改憲論を乗せてくる

柄沢 経男

君が代を歌えとでかい声がする

岩佐ダン吉

金持った人の集まる場所がある

喜田 准一

右に挙げた句は、それぞれ何年も前に発表されたものですが今日の時事吟としても通じます。問題が解決されない間はそれを扱った作品も色褪せることはありません。一朝一夕には解決できない社会問題などは継続性がありますので、時事吟に慣れない人はそのような素材から取り組めば良いでしょう。時事を詠う場合に心得るべき要点を挙げておきますので、折にふれて参考にしてください。

- ・ アンテナを磨いて、旬をキャッチする。
- ・ 一過性など気にせず、一瞬の花火の心意気で向かう。
- ・ 社会的弱者の立場で考え、現代社会の矛盾を追及する。
- ・ 一党一派に偏らず、公平無私を身上とする。
- ・ 権威を恐れず、言いたいことを言う。
- ・ 新聞の見出しにならぬよう、自分の想いを込める。

本社 九月句会

◇九月九日(火) 午後一時
ア ウ イ ー ナ 大 阪

朝夕に秋の気配を感じる九日、九月句会は百十九名(投句九名)の参加で開催。

句会に先立ち、先ごろ亡くなられた同人山本蛙城さんに黙祷を捧げた。

今月のお話は坂上淳司さん「吟行の愉しみ」。まず長柳会とブラザ川柳で作る河内長野川柳協会の活動に触れた。秋の文化祭で川柳展を開催。応募者にはジュニアの参加も多く、小学生向けに夏休み子供川柳教室や、出前川柳など積極的に行っているとのこと。吟行は日帰りとお泊も交え年に二回。吟行の心掛けとして、クルーの中で足腰の弱い人に合せて行程を練るなど、数点の留意点を挙げられた。中でも六泊七日のシドニーへの吟行は思い出が深いとのこと。笑いのある句会に吟行が役立ったのではと締め括られた。

月間賞は、今井万紗子(八幡市)(司会)蕉子・真理子(協取)美美代・勝弘(受付)敏治・すみ子(清記)勝弘

席題「芸」 黒田 能子 選

芸術を説くたこやきを食べながら
天高く芸術の秋さんま焼く
芸のない犬でも飼主は護る
腹芸が冴えて本音が掴めない
何処でもすぐに眠れるのも芸の内
聞こえないふりをするのも芸の内
核心に触れると妻の黙秘権
哀愁を演じて老いていくピエロ
子供まで酔わす蛭は芸術家
芸術を爆発させた夫です
ぱっくりと死ぬのも芸の内である
一晩で蜘蛛は作品つくり上げ
猫真似てピンチを抜けたことがある
一芸にたけた男にある油断
七癖と一芸誰も持っている
芸術家なつた気出る美術展
無器用な手でもおにぎりなら出来る
笑顔こそ無類の芸と心得る
幹事役芸が細かい気の配り
一芸が老いの余白を埋めてくれ
ともすれば独り善がりのか隠し芸
ジョークボン笑顔の花を咲かす芸
あの世まで踊りながらの芸の虫
わびさびのお家芸ですおもてなし
芸術か和食の味も盛り付けも

楓 楽 国宝と言われるまでの芸の道
悲しくもないのに涙流す芸
芸ひとつ赤ん坊ビタリ泣き止まず
芸積んで主役光らす斬られ役
いざと言う時は出番の隠し芸
楽屋での鬼が舞台で笑わせる
馬鹿になる芸も覚えた宮仕え
一筋を通し悔いない馬の足
いさお 武彦 いるだけで微笑むだけでも芸の内
自信ある芸ですボクのウイנקは
蠅牛いつ辿り着く芸の道
芸達者後姿に魅せられる
芸術の秋だが焼き芋がウマイ
よしみ 義 佳
鍋だけは焦がさぬ主婦の光る芸
曲げて伸ばして芸のかたちになつてきた
計を隠し千秋楽を飾る芸
叱る時抱きしめるのが母の芸
秋夜長虫も奏でるコンチエルト
人 一級の芸術品だ茜雲
地 泣きたいのに笑顔をつくる芸がある
天 一芸を極め世間を遠く生き
軸 身につけた芸に助けられました

扶美代 いたお 希久子 たもつ 光久 見清 保州 宏子 唯教 千代 奏子 弥生 希久子 正雄 五月 靖博 完司 理恵 玄也

兼題「軸」 樹本 宏子 選

軸になる言葉が未だ見つからず
軸ぶれも時折なおした夫婦独楽
軸吟が秀句を越えたことはない
遠路来て軸吟だけで会終わる
座標軸異なる人の自衛権
車椅子軸に笑いの絶えぬ家
価値観が違って狂う座標軸
敗因は主軸が機能せぬ打線
軸足がまだぬかるみにある野心
平和主義という軸足は外せない
軸となる投手に賭けた日の勝利
やじろべえ美人の方へ倒れがち
由緒ある掛軸みせる高い鼻
食うために働く軸は変らない
まだ軸に侍根性残す祖父
軸足が右に寄り過ぎです総理
体力と預金で決まる座標軸
軸足の置き場迷っている弱気
フーテンに見せてぶれない軸を持つ
すごい男だ生き方の軸ブレてない
軸足を少しずらして見る情け
結局はぶれない軸が生き残る
言訳はしない男だ軸におく
掛軸を学費のたしに鑑定を
床の間の掛け軸に見るおもてなし

幸 泉 一 歩 まつお 正 子 扶美代 富 子 克 己 千 代 保 州 寿 子 宣 子 なぎさ 唯 教 ばっは かずお すみ子 大 子 楓 楽 かずお 加お里 朝 子 紀 義 忠 子

地球軸ずれたまんまにテロ続く
健康の軸はバランス取る食事
不戦への軸足揺らいではならぬ
論争の軸は集団自衛権
軸足を九条に置く心意気
母ちゃんを軸に我が家の子沢山
掛軸も鶴亀にして明日を待つ
達筆の読めないままに軸をほめ
X軸に余命Y軸には預金残
軸ぶれない程の甘さで自己管理
起き上がりこぼしぶれない軸がある
軸足はいつも酒場に置いている
住
座標軸変えると私美人化かも
水金地火木みな太陽軸にして
スランプの兆し軸足ぶれ出した
ぶれぬ軸どんと据わった尾骶骨
スイートコーン鳥に軸だけにされる
人
軸右にぶれ危なっかしい日本
地
九条の軸が守っている平和
天
軸足を地につけ老舗守り抜く
軸
志功の軸贋作知らず逝った父

黒 兎 美智代 富美子 ルイ子 敏 治 あや子 真理子 いわゑ いさお 葉 子 由 一 完 司 洋 ばっは 弘 光 昌 代 淳 司 玄 也 朝 子 克 己

見送りの母へ一言有難う
朝採りの野菜近所に御裾分け
見送って事故はないかと見るニュース
終電車送るところおろぎが跳ねた
安倍さんに蛍の光歌いたい
先送りするから足をすくわれる
振り向くとまだ見送っている小さい母
松茸はとて無無理だと梨送る
見送りの母へ何度も振り返る
好ブレイ敵から拍手送られる
ライバルに送る拍手を惜しまない
行く先がまだ決まらない送別会
言いくい事はメールで送りつけ
送られた手紙の覇気にホッとする
離婚したおとこに送る感謝状
花で埋め母を銀河へ送ります
あるがまま送る日ですどこいしょ
見送りの母の温みが手に残る
白無垢へ送る言葉に詰まる父
気持良い見送りにまた足が向く
野辺送りシヤネル五番を入れました
着払いちゃっかり届く息子の荷
神の手と言われた医師に見送られ
胸元で小さく手を振る発車ベル
日に万歩続けて老いを先送り

兼題「送る」 山口 光久 選

雅 枝 紀 雄 堅 坊 一 歩 勝 弘 葉 子 哲 子 忠 昭 能 子 桃 花 いわゑ 弥 生 まつお みつ子 宏 子 富 子 千 枝子 哲 男 武 彦 わ こ 千 代 克 己 日 出 耕 治 好

見送つて肩の荷少し軽くなる

完次

兼題 「コスト」

西口いわゑ 選

その場しのぎ難題いつも先送り

玄也

コストダウン歩こう空が澄んでいる

キヨミ

コスト削減いっそ二人で住みましょか
お買い得なのに私が売れ残る

耕治

田の草も混じり届いた茄子キュウリ

武彦

ポイントよりコストで勝負大阪人

紀雄

コストダウン主婦のバートが担つてる
年金暮らしジリジリ責めるコスト高

葉子

送り火も銀光目玉おいでやす

隆彦

安いコストで料理上手な母の膳

たもつ

一人息子物心ともにコスト高

すみ子

正しい折り目つけて娘を送り出す

理恵

在庫一掃コストには目をつむる

正雄

素人にとでも読めない株コスト

隆彦

振り向けば送り狼だった恋

柳弘

コスト割れ看板にして続く店

妙子

コスト度外視回り泣かせた者作り

隆彦

内定の祝いは矢張りキャッシュかな

忠昭

コスト高ビールの泡もすぐ消える

恵

食費節減かえつてお腹調子良い

義子

荒れた夏送つて秋よこんにちは

一歩

妻の帯コストの割に似合わない

一文

半額セールふと原価など考える

眞澄

頑張つてる自分に送る応援歌

いわゑ

コストダウン絶対しない老舗です

良子

扇風機の実顔助かる電気代

武臣

クール便送つてくれる人が好き

勝弘

コスト等しいわぬ最後老いの旅

舞夢

出世払いコストを掛ける塾カバン

寿之

閻魔のミスで僕極楽へ送られる

洋州

8パーがじわりコストにはね返る

いさお

高ワインはずんで妻の誕生日

千代

行つてらっしゃいゴミと一緒に送り出す

佳

年金のコストにめげないよ笑顔

朝子

手作りのバッグに値段つけられず

希久子

仕送りのたびに白髪が増えるよな

すみ子

食材のコストを下げて生き延びる

賢子

コストなど気にせずに咲く野のすみれ

美智代

母からの宅配便にある田舎

かずお

閉店の憂き目にあったコスト割れ

宣子

企業秘密ですとコストは言いません

かずお

栄典を見送る陰で泣く一人

則彦

俄か主夫水道代をはね上げる

完次

核つくるコストと人間の重み

ダン吉

「いつてらっしゃい」あとは私のパラダイス

理恵

手作り町の豆腐屋姿消し

たもつ

コスト割れしてもこの場はおもてなし

保州

もう二度と子を戦場へ送るまい

富子

原価割れですと泣き泣き儲けてる

光久

自家菜園手間暇かけて高コスト

裕之

残暑見舞い二円足りぬで夏終る

行兵衛

コスト上の都合とうまく躲かれる

すみ子

コスト割れしても守っている誇り

弘光

土石流送る言葉が見当たらず

正雄

安全にかかる途方もないコスト

美智代

コストダウン庶民の五感打つことは

好

照明が揺れて五山の夏が行く

哲夫

コスト無視母の小包温い風

弘光

ソロバンに合わぬ話に虹を見る

好

兼題「赤い」 村上 玄也 選

心にもないことを言う赤ワイン
 ケータイが食ってしまった赤電話
 天下る仕組みで赤字垂れ流す
 一人分赤飯を買う誕生日
 赤チンが勲章だった良き時代
 赤い顔してるが酒は呑んでない
 叶わない夢を叶える赤い汗
 主だけがお嫁に行った赤い靴
 赤っ恥かせてフォローする目線
 ダイエット達磨片目のまま五年
 赤トンボ母の話がしたくなる
 浮く心縛りつけてる赤い糸
 地味ずくめ小物一つは赤にする
 おっとつと赤い鳥居が貼ってある
 色褪せているけどもとは赤い糸
 赤いウソ吐いて座禅から降りる
 赤い血がたぎる寂しい人だけ
 廃屋の赤いカンナが凜と咲き
 真つ赤かネイルが不義理な爪にする
 割り箸を裂く赤い爪赤い口
 赤い血が流れる限り恋はする
 一心になると嘘にも血が通う
 赤紙をレッドカードという平和
 今日もまた地球を汚す血が流れ
 慎みはどうあれバラはやはり赤

寂子 雅明 准一 耕治 武彦 月子 敏治 見清 弘光 キヨミ 扶美代 隆彦 扶美代 勝弘 弥生 朱夏 桃花 求芽 眞澄 すみ子 完次 敏治 としお 保州

母さんたまには赤を着て吠える
 近道の真ん中にある赤信号
 飲んでます赤い気炎を吐いてます
 添削の赤が私を掘り起こす
 へそくりも赤字補填に駆り出され
 謝罪会見え隠れする赤い舌
 行間の赤い血潮を汲むレター
 チグハグに引いてもつれる赤い糸
 夕焼けの戯れに酔う赤とんぼ
 肩の荷がおりて夕日に手を合わす
 神様がときどき赤い舌を出す
 刺だけは隠しきれない赤いバラ
 佳
 赤札を大阪弁はまだ値切る
 じりじりと赤信号で進む人
 一行の余白炎やして締めくくる
 赤ペンで修正ばかりして余生
 セピア色の赤い記憶と遊んでる
 人
 あげた血のお返しですかデング熱
 地
 朱が足りぬまま老いてゆく私の絵
 天
 しんみりと友ひとり消す赤いペン
 軸
 スタンドを赤で彩るカーブ女子

富美子 文代 かずお 恵 恭昌 弘風 靖鬼 誠一 柳弘 柳弘 楓月 朋月 正雄 妙子 寿子 朱夏 楠和夫 哲夫 希久子 矢五月

俺は幹お前は花が咲く梢
 大空へ背伸びが仕合っている梢
 成功の鍵は梢の先にある
 梢から飛び立つ鳥は塔の色
 梢まで届く日本のおもてなし
 木守柿の梢に夕日落ちる里
 サヨナラは梢の先に書いてある
 梢から梢へ秋のシンフォニー
 宇宙まで伸びてゆきたいな梢
 愛は勝つ百舌鳥が梢で叫んでる
 三日月の顎が梢に引つ掛かる
 昆虫を梢に差したのは百舌だ
 一羽には一羽の重さ知る梢
 百舌啼いて梢は冬の準備する
 神宿る梢となった笛の音
 風の音あれば梢の話し声
 ゆさゆさゆさ梢揺さぶる 母だろか
 ひとときを梢と風になつて
 樅の木の梢に吊るす愛平和
 名月とおとき話をする梢
 梢から神のぬり絵が山は秋
 さよならを言いにあなたが来た梢
 鳥の愚痴やさしく聞いている梢
 一度だけとまった鳥を恋う梢
 尺取虫梢に化けて生きのびる

英旺 隆彦 蕉子 みつ子 としお 黒兎 義 朝子 由一 克己 靖博 とーな 扶美代 完次 好 万紗子 いわゑ 恵 柳伸 寿之 奏子 富美子 真理子 恭昌

兼題「梢」 小島 蘭幸 選

ゲリラ豪雨に耐えた梢の武者震い
梢から発信してるのは希望

梢には夢のかげらを吊るしとく
お日様と風の言葉を知る梢

散歩道の梢も秋を告げている
梢さらさらやさしい母の声がする

思い出し笑いしているのは梢
梢ざわざわ剪定の音近くなる

渡り鳥心の駅になる梢
水墨画の梢の先が揺れている

揺すらないで梢に秋が止まるまで
睥睨のカラスがジツという梢

住

満月の梢に集うのはニンフ

縄文杉の梢哲学持っている

梢はしたたか太い幹が折れた

ブナの木を揺らして風蘭が匂う

盆栽の梢よ寂しくはないか

人

野放図な梢で夜も眠らない

地

梢にはいけばん澄んだ水がゆく

天

余命表ひよいと梢に掛けたまま 今井万紗子

軸

何を見たのか梢の揺れが止まらない

哲子

富美子

葉子

希久子

瑠美子

美智代

義

理恵

あや子

見清

朱夏

まつお

千枝子

楓楽

蕉子

よしみ

楓楽

朱夏

完司

句会 燦 燦

8月句会を読む

岩崎 眞里子

句会の題を全部、くるくるっと巻いて鑑賞してしまった。作

品内意からはズレているかも知れませんが、お許しを…。

聞き役の位置で小銭が胡座掻き

平凡な夫婦小銭のように生き

どうしようもなく心惹かれた作品。澄んだ想いからは嘘のな

い暮らしが伝わってきて、あらためて平凡の大切さを持った。

入院中頼むはトマトナスの世話

そんな事を頼める友を指折ってみて、川柳の有り難さに突き

当たった。そして「頼むから寝てよ絵本はみな読んだ」を目に

した途端、今も児童文学を食べている五感がニタツトとなった。

見守って欲しい私も孵化さなか

「私がこけたら十円玉の音」がする単調な暮らしたが、私達

は違う毎日を生きている。それは日々孵化しているともいえる。

わたくしの一揆を飾る大ジョッキ

「鉄の汗」の表現に立ち止まり、「琵琶湖がビールだったら」

に体が笑った。それ以上に「私の一揆」を、しかも「飾る」と

いう大ジョッキに、剣を手にしたジャンヌダルクの姿が重なっ

た。

眞理子

隙間風あつて命が助かった

長雨・豪雨・竜巻等想定外が続くこの世の中、災害時僅かの

隙間が生死を分けた事もあった。そういえば日常に於いても、

親子共々「ばあちゃんの隙間」にずーっと助けられてきた。

相当な人物だろう隙だらけ

鱗が落ちた目で良く見たら、何と作者その人と思った。でも、

隙だらけの人間になるにはどうすれば良いのだろうか…。

完司

老心増

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

くり返し優しさ詰まる文を読む
やさしくてどこもかしこも丸くなる
優しいだけそんな男はすぐ飽きる
優しさで過保護で悩む母の愛
叱られてこれも優しさだと気付く
お優しいお方と言ってこき使う
花枯れて優しく散ってゆきました
過去帳に優しい人が並んでる
優しさをほんのりちよびりおすわけ
幼子に優しく教え良き家庭
水がめの底に記憶を置いたまま
うとうとと記憶の中で旅をする
職人の父の記憶は大きな背
事件事故日ごと夜ごとに悼む胸
何万年記憶されるって凄

安代 和代 蕉子 克博 かりん 半銭 シマ子 いさお 典子 公平 温子 満知子 志津子 安昭 舞夢

フルムーン二度目摩周湖今日も暗れ
記憶した百人一首の数が減り
ころころと笑う母さん大好きだ
ころころになる程着ても冬が好き
コロコロになるとは約束が違う
敬老バスコロコロ変えて有料化
コロコロと笑ってこの世やり過ぐす
家計簿がころころ変わる赤と黒
ささくれた心コロコロ丸くする
手の平で妻にコロコロ転がされ
二転三転して運命の人に会う
ころころと五匹も産んでコロ元氣
寝返りを打てばあなたの腕の中
賭けてない時は馬券も大当たり
レギュラーになれずじまいの部活動
身を賭して反戦説いた鶴彬
今一度性善説に賭けてみる
都構想目玉はカジノだけですか
故郷の夕陽に賭けている野良着
この道に一生掛けて悔いはない

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

串刺しにしても足りない電話詐欺
心の刺目には見えぬが痛からう
痛くない注射をしてくれと頼む
自衛権行使している薔薇の棘

重利 紀美恵 玲坊 完司

千人針刺した時代が見えかくれ
うっかりと握ってしまうバラの刺
竹槍で集団自衛隊を刺す
刺すような視線背中受けてとめる
すき腹の虫おさえるお茶一杯
生きる糧探し求めて本の虫
天敵に虫の本能子を守る
またたく間日暮れずるやってくる
ずるずると増えた国債無頓着
ずるずると終りの見えて来ぬイラク
ずるずると深みにはまる蜜の味
ずるずるかあつという間か人生は
ずるずると平和9条衣替え
母なれば底無し沼に身を捧ぐ
空元氣杖にたよってみぎひだり
イベントの人数占う空模様
ありがとう我が家の頭上空がある
空見上げ錯覚かしら亡母の声
定期バス空車で走り火の車
ホクの夢のせて連風空たかく
戦争の準備整う空模様
七月の空真つすぐに肩に降る
全ボツのそれがどうした青い空
何色になっただろうか僕の空
過去は過去今の私を空は見る
そろそろですかと空から声がする

美知恵 美代子 石花菜 公恵 悦子 美美子 たけ代 和子 幹啓 龍枝 清 陽之助 耕治 三津子 善江 義人 道子 貴恵 久芽代 重忠 滋 美ツ千 野蒜 芳光 久江 紀の治

にんげんの頭脳大空よりでかい
大空へ飛び立つ羽を模索中

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

和歌山三幸川柳会

武本

碧報

堀 正和 選
婿養子賞罰なしが気に入られ
愛されて怠けぐせだけつきました
干物にはなりたくないといふ飲んでいる
イヤリング外して今日は草むしり
今朝もまだ星が飛んでいる二日酔
食欲が落ちず楽しい傘寿の胃
悩み事あつても酒は喉を通る
今日急に高齢化したわけじゃない
七八月愛し続ける冷や奴
食べたことのない料理は作れない

蟹郎
日の出
紀の治
茶子
准一
堅坊
宏造
美穂
啓子

ざりざりの線できまつた嫁が来る
ざりざりを楽しんでいる肩である
ざりざりの線まで話こぎつけた
ざりざりも補欠も同じ合格者
ざりざりの補欠で入り答辞読む
同行二人前向きになつてきた夫婦
一歩前戻しつかり囁んで出す
便利さは前も後も広い道

規代
蘭幸
房子
敬子
輝恵
厚子
笑子
栄恵
幸子
節生
汎美
淑子
比呂子
栄香
静風
寛

恐竜のたまご毎日塾通い
累卵の命を抱いて手術台
自己愛のかたちに抱いているたまご
啐啄同機元氣な雛が無事生まれ
思慕恋慕肌は正しくゆでたまご
まだ知らぬキャビアの味と黄泉の国
つるりと皮剥がれて風邪を引くたまご
冷蔵庫にたまごがないと風邪を引く
たまごからランク分けてラベル貼る
托卵をされて育てた孫五人
友情は洗ひ晒しのままでよい
友情に厚い男の手は長い
親友の友人だから傘を貸す
大丈夫頼れる友と茄子の花
友情を男結びで繋ぎ止め
友情と思う愛情だと思ふ
お互いが緩めのゴムを持つている
同じ傷抱いて友情深くする
腹心の友は私の糖衣錠
友情が萎んだ毬を弾ませる
潤滑油差して友情とりもどす

章子
幹子
あきこ
義泰
みね
千鶴
八重子
富香
起世子
幸子
和子
寿彦
剛
倅子
豊
美羽
小雪
ひろ子
イセ
菜摘
当代

前方注意恋がとび込むかも知れぬ
診察のなかなか済まぬ前の人
前を行く夫に寄り添い山坂を
前向きに生きたいよと母の月
もう一歩踏み出す勇氣風がくれ
彩と香の旬の野菜の夕の膳
カラフルな色に負けない水墨画
十二色で描いた恋が消えかかる
茜色とはこれである瀬戸の海
ブラジルで祖父母暮らした色がある
天辺めざす色とりどりの立葵
古希なんて未だ未だ未熟青レモン
にんげんの色でひっそり咲いている
あーうーと何かを語る一ヶ月

くにく
節子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

忙しきは幸せなんだ髪を切る
なかなか手強い六法にとらめっこ
三男もパパにそっくり瓜四つ

千代美
あゆみ
史子

佳句地十選

(9月号から)

太田 扶美代 選

タバスコが一滴落ちたよな助言 (矢)五月
スランブだあつさりペンを休みます 幸美
結婚も離婚もサインさせられる みさ子
終電車明日に向かう人ばかり 美智子
不可解なものが潜んでいるハート 蘭
生きている間に少しルビを振る 花峯
背中押す力加減が難しい 霜石
何よりも人並という道しるべ 恵
小さめのガッツポーズで我慢する まつお
天国でいられないものを捨てましょう 耕治

捌け口を友に甘えた日の愚か
デジタルに洗脳されていくこの世
練習の時はすんなり出た台詞
毎日が練習ですと言えますか
身を粉にしいつしか習う人の道
親方のすでに背中を越えている
習うより盗めと師匠重い口
習い事増えて子供の影がない
卒寿記念習い始めたフラダンス
主義主張習わなくとも持っている
切れそうで切れぬ絆という鎖
鎖でも繋いでおけぬ自立心
どこまでも鎖が伸びてついてくる
二人三脚いつか鎖になつていく

きやらぼく川柳会(米子)竹村紀の治報

美枝子 碧 智三 保州 昭枝 次根 義雄 絹子 昇 みつ江 准一 久 英夫 純子

葬儀用若い自分を選っておく
大型の台風列島駆け巡る
星空に観光ツアー往けるかも
石仏のやさしさ跪くたびに
私の事は他人が評価する
持ち歌の昭和の唄が飽きられる
町中がトライアスロン大騒ぎ
好きな子に好きだと言える子だったら
上から目線で人を見てるキリン

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目一粹報

壽々子 初枝 多美子 千代 恵子 紀の治 宏之 雨奇 未延子 洋々 一瑤 地佳平 回春子 麗 無限 野蒜 凱柳 みゆき とも湖 綴 節子 薫 主一郎 善夫

キャンペーンビッグなノルマ与えられ
くされ縁切る包丁が錆びてくる
いざ行かん互角の敵へ武者震い
ありのまま陰の努力を惜しまない
泥仕合隣の村に負けられぬ
ビッグカップル目出度い筈がすぐ別れ
甲子園目指すは一ついざ行かん
いざ行かん勝つて来るぞは歌うまい
溜めていた本番酒も酌ぎこぼす
介護したせいで遺産の泥仕合
泥仕合逃げるが勝ちと決めている
泥仕合して両方が傷ついた
何よりもビッグな愛がほしいのよ
冥土にはいざと言う氣にまだなれぬ
謝りに重い腰あげいざ行かん
化粧して秘密の園にいざ行かん
泥仕合させて通れぬ拉致の海
異常気象只今地球反抗期
泥仕合制し派兵の道拓く
売られた喧嘩なら買っていざ行かん
※方言「びしゃんこ」はすぶ濡れの意

川柳大阪 森松まつお報

千枝子 昌鼓 美恵子 金祥 蟹郎 由美子 房江 秋月 妻子 茶人 天翔 雅女 菊乃 清信 行男 美佐枝 孝二 清帆 隆浩 一歩 温子 公平

あんたとは一緒の墓に入らない

ほどほどに恋していますかあちゃんに

虹色に染まる雨上がりの羅漢

北新地色恋ざたも金しだい

青い空私の強い味方です

黄金色稲穂で休む赤とんぼ

退屈をしのぐ脳トレしています

退屈をとんと知らない趣味の道

退屈という贅沢をくれた雨

喧噪の街も静かな盆休み

川柳塔なら

坊農

柳弘報

ど忘れの名前を拾うあかさたな

優しさを拾って歩く遠い耳

名案を横取りしては点かせぐ

幸運を拾いそこねてシンデレラ

九条が命を拾う平和主義

落選の憂き目ポスター風に泣く

荒行を越えてとんぴが天翔る

たらちねの枕詞に母想う

ご近所のうわさを拾う伝書鳩

ブラジルでゴミを拾っているファイト

逢えそうな予感にとんぴ輪を書いた

火中の栗ひろう愚かな出来心

その先の修羅は語らぬとんぴの眼

勝弘

すがお

柳弘

信醉

善純

珠生

美籠

堅坊

まつお

照月

逆縁のむごさを悼む枕経

政治屋のはびこる選挙権のウツ

味方だと信じ切つて膝枕

人の苦を拾い明日の糧にする

成就した恋へわくわくする枕

うたかたの恋に溺れている枕

奮戦の父が自慢の出初式

信念を貫く人がいる次点

後悔に震える指で骨拾う

春以来一円玉は拾われる

納骨に拾い集めているいのち

出口調査されて実感する選挙

鷹だけを褒める鷹がツンとする

事故現場枕木にひとひらの花

手袋に隠す汚れた手を見抜け

蜜の宿ひとり瀬音をきく枕

平穩に選挙のできる国にいる

ちちははの里を拾おう天の川

とんぴの子に鷹になれよと塾カバン

百歳がしつかり果たす選挙権

何くそと枕に明日を言い聞かす

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

明日のことうつらうつらと枕抱く

一途な恋やつと通じたクラス会

老いの坂登つてやつと情を知る

完次

順啓

仁

弥生

朝子

洋子

将文

比呂志

國治

真理子

辰雄

榎子

良一

恭昌

克己

理恵

堅坊

隆子

寿之

成子

美智子

堅坊

武彦

倫子

蔓伸ばし隣の花に絡みつく

下戸なのに酔った振りして絡まれる

見栄はつてちよつと無理するのし袋

もう昔責めることない妻米寿

紆余曲折越え本物の夫婦たり

さめたない夢をうふふと見る枕

もつと鳴けたつた七日だ聞いてやる

十時間やつとお盆の里に着く

墓参りまだかと父が夢枕

八月の海に叫ぼう反戦歌

手枕で猫も昼寝の高軒

童心にかえり打ち水セミの声

世はスマホやつと携帯覚えたら

独り寝の枕の下は桃源郷

素うどんが好きで大阪離れない

婆ちゃんをお嫁にするとチューをされ

暑いねとシャツもスボンも絡みつく

日替わりで涙を誘う朝の記事

おめでどう卒寿を祝う甲子園

この道は何時か来た道八二五日

エエイもう縁起なおしに北枕

酔った振り絡んでみたい人がいる

稽古積みやつとお客の貌が読め

宝でした過去形悲し十五歳

千恵子

満作

洋志

五月

賢子

朝子

勝弘

克己

実

いさお

あさ子

杵香

榮子

懸作

とーな

直樹

かずお

和夫

一步

弘泰

修

郁夫

野鶴

たもつ

集一

美しく置かれた場所で咲きましょう
父母が逝き古里が遠くなる

かなわぬと知りつつ叱咤親心
いざこざが絡まぬ様に母の舵

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

陽子報

わかあゆ川柳界(鳥根) 松本はるみ報
ぐつとのみお互様と言ひ合つた
朝日出て沈む夕日に嘘がない
終便のホームに月のお出迎え
お互いに痛い話でうまが合い

恵美子
英子
ちよえ
かつ子

よく威張る男の顔に低い鼻
嵐寛の天狗の顔は長かつた
夏休み鳥天狗が東で来る
ビノキオは天狗に会つた日から鬱
不漁ならデバ地下に寄る釣り天狗
小天狗が幅を利かしている茶の間
耳障りな音が鼓膜をひつかいて
ヒロシマに石ひつかいた跡がある
ひつかけて破くジーンズ仕掛人
人生の轍にひっかき傷の跡
お寺さんお布施の話手短に
子の主張回りくどいが受け入れる
くどいのは百も承知と親ごころ
隠してゐる世間話が長すぎる

実
東風
克己
昌紀
和雄
志華子
ルイ子
とーな
柳伸
集一
忠昭
なぎさ
正春
修

こどもの日こんなにか遊園地
仲良しは適度の距離が長続き
優勝を逃した銀が悔しがる
なみだ色知つてる枕陽に当てる
美容室出れば背すじがしゃんと伸び
南極も俺の領土と言いかねぬ
過疎の村雄々しく泳げこいのほり
ツアー組み行つてみたい天国に
梅雨末期傘が本気を出してくる
シルバーと昔ばなしに花咲かす
待つ人もないのに急ぐ帰り道
寝たきりの父の豊富な知恵借りの
冗談が受けてスピーチ調子づく
後ろ手にパンチなだめて隠し持つ
お話にパンチがあつて聞き惚れる
腹心の友のパンチが身に染みる
金借りた時は仏に見えたのに
口コミで守る地域の店だから
子は産むな国の犠牲にせぬ為
シルバーの深さ若者には見えぬ
政治家だ誠心誠意うそをつく

真帆
あゆみ
水樹
美恵子
章子
和之
けい子
純宏
陽子
和代
信子
恵美代
三郎
慶一
華蓮
菜美
嘉子
敦子
一眸
遊子
公弘

同級生刺す高一に恐れなす
会則を破るこわさに無言劇
食欲なヒト科が神を畏れない
恐れずに中国産の肉食べる
嫁さんに不味いと言つたことがない
究極の恐怖はやはり戦争だ
お恐い天狗になつてゐる総理
鞍馬天狗は何で覆面してるのか
ボス猿が仕切る天狗の露天風呂
高い鼻バックして出るクラス会
鼻折れた天狗は家に引き籠る
職のいて妻が天狗に早変わり
鞍馬天狗今なら誰をやつつける

好栄
昌
澄子
安子
かつ子

遺書を読む回りくどいな遺産分け
ボクの故郷を君の故郷にしませんか
月や星どうでもいいの好き言うて
儲けてもボチボチですと言うナニワ

弘泰
楓楽
一步
篤

南大阪川柳会

津守

柳伸報

川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

妻の籠の中で飛べない鳥になる
早朝の海原眺め深呼吸吸
大輪を唐津の夜空六千発
防風林虹の松原くねり堪え
十代で愛想笑いの技を知り
想い出と腕組み歩くひとり旅

蜂朗
高明
實

松風
四郎
節子

富柳会(大阪)

古田 千華報

踏まないでベンベン草にある誇り

和子

瘡蓋もやがては剥がれハイジャンプ
遺産相続やがて疎遠となる姉妹よしみ
より子忘却に助けられての今を生き
さわやかな笑いを包むクラス会ちかゑ
照代

子供風の子昔語りとなりました

千華

鼻歌で影を踏み踏み登る坂
秘め事をぎつしり入れたずた袋文重
千恵

後期高齢者遠慮もなしに入り込む

美智子

下り坂踏ん張っている破れ靴

慶子

美しい誤解のままで春の音

森子

ぼたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

ステップを踏んで不安を和らげる

彦次

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

変らない暮ししてます常緑樹

桂子

リベンジを前に一瞬踏む輪

佳子

空腹で近よらぬことパン屋さん

まみ子

樹のふところ鳥の親子に貸してやり

正代

越冬の蛹にやがて甘い蜜

寿之

年取って分かった坂の多い町

廻行

樹齢百年まだまだ若い原始林

信男

愚痴ひとつ言わぬ女の乱れ髪

仁

箱代をけちって安っぽく見られ

美千代

寄らば大樹家族が頼る母の愛

幹治

好一对言われながらも水油

静子

斜め読みした感想が賞貰い

百合

千年の大樹に祀る高野山

黒兎

冷や酒と妻の小言は後で効く

正治

台風の抜け道狭くゆっくりと

雅美

丸い背に母の苦勞がつまってる

美智代

この大地蹴れば地球も逆回転

清

やっこさ好きも嫌いな夫婦

かつ子

ギリギリのところで丸く議事治め

長一

地に足をつけてスックと立つ大地

壽峰

川柳ささやま(兵庫)

北澤

稠民報

親と子が背中丸めて草むしり

正子

土踏まずから責めてくる肥満体

登子

エコ対策技の無い団扇使ってます

美緒子

若き日の麦わら帽子恋してた

柳童

懸命にやがてを抱いた日の余韻

恵

それぞれの絵なるようになれ生きる道

美紗子

緑陰のベンチを猫と分けていた

純子

曇天がずしりと落ちてくる疑心

武人

精一杯生きてこの世の花を見る

純子

空想の世界はばたく読み聞かせ

春代

バンドラになる私の好奇心

アキ

乗り越して蛭に会えた無人駅

哲男

かき氷みぞれ金時すだれ越し

守啓

地に足を踏ん張る俺の座標軸

伸雄

道草をしようあわててくことはない

稠民

ラジオ体操操朝の挨拶みな笑顔

花匠

野いちこの真んまん中で蝶と酒

欣之

蕎麦も好き素麺も好き御飯好き

真由

有精卵のいのちいたたく朝の膳

ひとし

今度こそ素直であれよと散る桜

深雪

道草をしようあわててくことはない

多美子

命綱縮んで伸びて朝ご飯

氏加子

三角の形で愛の綱わたり

信子

扇風機熱中症で首痛め

開子

朝市にきれいな空気買いに行く

ひとし

泰然と大地黙して語らない

紅紫朗

夕焼小やけお地蔵さんが過疎ひとり

可住

命綱縮んで伸びて朝ご飯

黙人

嘘八百やがて擬きの芽が生える

未知

お盆月あれこれ忙し生きてこそ

かほる

命綱縮んで伸びて朝ご飯

氏加子

お百度を踏んではかない蜘蛛の糸

七朗

お盆月あれこれ忙し生きてこそ

幸子

命綱縮んで伸びて朝ご飯

氏加子

八月のざらざらあつてこそ平和
青春のマグマ吹き出す高球児

広島の夏ざらざらと原爆忌

ざらざらの陽を背に歩む遍路旅

澄み切つて姉妹が歌う二重唱

昇格と結納重なり鬨斗の酒

重なる計妻と別別果す義理

トップの座なるまで耐えて汗を積む

胆力があると限らぬ腹回り

腹の虫おさまらぬ日は黙り込む

腹の虫押え切れない座禪堂

ほどほどのあたりで腹が座らない

昭和史に空腹ばかり下りてくる

切腹をしると言うのか青い空

飯盒の疵は空腹知つてゐる

待合室でちいさな奇跡待つてゐる

返事してくれる人いる幸せよ

此処だけの話は何故か宙を舞う

湯むきされトマト本心さらけ出す

ソーラーのタクトに合わせギター弾く

津軽平野を守り抜く岩木山

妻の留守鍋かま茶わん箸はどこ

飲む程に辛口男の卒業証書

思い込め捧げた絵馬よ空を飛べ

バツタリと逢つた小路に逃げ場なく

どなたでも入れる隙間開けてゐる

柳子

はびきの市民川柳会(大阪)永田

章司報

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

洋子

立ち眩みきのうの酒がまだ残る

いさお

初枝

道草を赦してくれぬ塾カバン

シルク

則彦

婿と飲む五年飾つたナポレオン

登志子

つとむ

大空に平和が咲いた大花火

みつこ

きよし

時価よりも性に合つてゐる寿司

ちづる

吞舟

バラよりも野にある草がいとらしい

千鶴子

隆樹

洗濯機の中で愛憎が渦を巻く

泰子

京子

生きる夢をかき消す銃を捨てなさい

雄太

慕情

ミラーボール回れば舞台華やかに

アヤ子

芳生

ひっそりと露地に雑草咲いてゐる

さくら

井蛙

くるくると帯解き主婦の顔となる

久仁子

龍馬

回り灯籠つけて迎える初の盆

ヨシ枝

五葉庵

二十八度設定いのち預けます

美喜

霜石

蛩舞う暮らしの奥まで入りくる

獺杓

ふさふ

妻の庭朝顔二つ咲きました

敏

花峯

くらくらと目まいせぬうち横になる

かつ美

美鈴

墓の草刈つて安堵に盆を待つ

喜久子

一花

雑草と呼ばれたくない自己主張

庸佑

雅城

花咲いてあとで大きなオクラの実

フジ

龍人

草を抜く墓石に話し掛けながら

光男

和香子

草魂を座右の銘の元投手

真一

小とみ

ひまな日は環状線であつた回り

美代子

一湖

祖母が笑み誕生日だと紅入れる

洋一

綾子

過疎の村水車変らず回つてゐる

章司

帳消しと言つた話を蒸し返す

飲み代では帳消しのバイト料

罪ひとつ帳消ししたら腹が減り

世話かけた分帳消しにする努力

寝たきりになる想像はしていない

想像の翼は花にまかせよう

田舎からどぶ川が消えメダカ消え

頑張ろう帰る田舎のある強み

頑張つた赤い夕日の田舎道

今に見ろ今に見てろと発つ田舎

廃屋とお一人様の多いこと

明日のことひょっこり忘れ無責任

元彼がひょっこり来ぬか空想す

想像をしたカップル離婚した

残り火が今日も想像ふくらませ

長柳会(大阪)

坂上 淳司報

重い荷も二人で担ぎ金婚譜

困つてる相手をすくう軽いうそ

少子化が暗示している国の過疎

自衛権国民の為軽く言う

困り果て生まれた知恵が灯をともし

離婚するのではないかと言う暗示
何かある前口上が長過ぎる

幸安

圭一郎

一瑤

節子

蟹郎

天翔

重忠

たぬ

葛子

一粹

弘子

清帆

敏子

雅女

美恵子

淳司

一文

和代

幸子

辰男

輝子

弘光

病室でまだ元氣だと暗示かけ
軽い嘘ついて背負った重い罪
お彼岸はお経軽めでお布施倍
稲光恋しい人の住むあたり

軽い冗談ですと笑っている本音
取調べ室で向きあうキャリア組
握る手の温みあなたについて行く
愛情と叱咤のまじる手弁当

軽口がプロボーズとは後で知り
人口減どんどん軽くなる日本

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

フラダンス東北の地で花開く
傘踊りギネスに挑戦するらしい
オレの字は踊っているがボケてない

脛皿が踊っています下山道
踊り子連減るばかりの過疎の町
猛暑にも鮮やかバカな夾竹桃

鮮やかに畳の上でグッドバイ
鮮やかな色も重なりやくどくなる
九回の裏一発のホームラン

鮮やかな筆のさばきに負けました
中国の鮮度死なない程度もの
姉の近く思い出鮮やか駆け巡る

いみじくも世辞と知りつつ舞いあがり
いみじくも一目惚れにてダイヤ婚

克三
久美子
修

(徳)正子

芳野

正博

孝代

隆彦

篤

正美

悠子

玲坊

次男

重忠

智恵子

完司

石花菜

萩江

雄大

康子

けいこ

瑞子

節子

日出子

いみじくも名付けたものだ投入堂
家計簿が日記の役目引き受ける
貴方なら飛べそうなので手を繋ぐ
この溝を一緒に飛んでくれますか
保険かけ身辺整理飛ぶハワイ

悪びれずしぶき飛ばして走りだす
シャボン玉虹の彼方へ夢運ぶ
国民をアベノミクスが踊らせる

あかつき川柳会(大阪)

山本

昌代報

爛爛とねぶた祭りをゆく眼
らんらんと太陽地球儀が日焼け
レストランへらんらんのルンルン

ストレスに負けず気分をらんらんに
好物の笹食べていますかカンカンと
ルンルンルンそしてらんらん恋してる

子はんらん親はげんなり夏休み
ダイエットもう諦めて食べている
諦めず安倍政権を追いつめる

諦めない九条はまだ死んでない
断念のあと深く風になる
人生を諦めて妖精になる

夕焼けを背に子雀の塾靴
熱中症案山子案じて来た雀
雀の子河内音頭で踊ってる

舌切り雀そしてバワハラ始まった

醉芙蓉
風露

紀美恵

美知江

由紀子

祐子

英子

照彦

穂夫

祥昭

信子

雄太

とーな

朝子

一志

直子

美智子

康信

紀乃

寿子

ひろ子

のぶ久

楽生

堅坊

一茶さんこのごろ雀減りました
公園で雀たそがれコンサート
AKBの案山子と握手する雀
酒粕を食うて雀の千鳥足
雀百羽一本の木が歌い出す

ホーホケキョと雀泣きたいときもある
女房の舌を切りたい時がある
汗光る顔が一番きれいだね
カルピスの滴に逢いにふるさとへ

一滴の水に捧げます終戦忌
嵯峨古利水琴窟にある和み
友情の声は滴になつていて

一滴も汗をかかずに平和論
一滴の酔を垂らされて解けた謎
一滴が描く波紋に宇宙見る

飲んだくれ最後の一滴紙めている
目が尖るゲリラ豪雨で眠れぬ夜
雨量計単位センチに変えましょう

母強しマリアのような代理母

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井

もう誰も叱ってくれぬ里の風
ジェラシーの炎くすぶる愛と憎
着て嬉し帰って嬉し孫四人

添えぬ人こころ汲みとる冬の月
定年は会社と離婚する如し

たもつ
哲男
見清
壽峰
すみ子

茶助

克己

和代

たかこ

廣子

忠昭

三成

敏治

哲矢

福貴子

秀夫

信二

和雄

敏子

宏造報

武彦

無限

紀華

一徳

年毎に世間と俺がズレてくる

俄雨さつと逃げ込む縄のれん

子供達の未来先食い赤字債

大粒の涙を汗と言った父

汲み上げた井戸水夏の走馬灯

手火花が仲良く包んでゆく煙

物置きに風雨に耐えた父の靴

ネズミ火花をネコのメンツが追つかける

意を汲んだ老母が根回ししてくれた

癒された煙草にやがてむしばまれ

雨水がぼたりぼたりの築五年

愛の水両手揃えて汲んでいる

養老の水汲んでいる日日平和

水を汲むアフリカの子の逞しさ

硝煙が覆う昭和の一頁

意を汲んで協力惜しみなく動く

汚染水ばかりぼたりは知らされず

完全のトマトがうまい大暑の日

鼻歌で妻のいぬ間の台所

友の気持汲んでやれずに悔い残る

酔い醒めの水汲む妻に詫びている

カレンダーにばかり許せぬ跡がある

線香の煙目に沁む親不孝

白色に赤一滴を落とす役

汲み交す里の地酒や父老いる

手抜きする自分だんだん怖くなる

盛夫

宏造

浩司

美津子

文香

求芽

千賀子

茂

弘子

りこ

光久

朋月

キヨミ

歳子

秋果

紀乃

直

正和

哲夫

じろう

敏夫

忠

哲男

恭子

比ろ志

わこ

女優さんこらえてこらえひとしづく

調子に乗ってぼたり汚点となる台詞

煙突が消え生活臭かわる

姑の辛口汲んで年重ね

川柳塔まつえ吟社(島根)相見

すき焼もミルクも飲んで港発つ

初対面港で待っているの誰

港には漁火という花が咲く

八月に降るとするなら反戦歌

にわか雨走って並ぶ軒の下

雨ふるなてるてるぼうず40コ

降って湧く話を風が持参する

雨が降る仲良く休む農作業

大雨が湖都の花火を裏返す

降るような縁談断って今孤独

アンパンを食べて重たい話聞くと

カミさんの体重未確認のまま

ダンベルで筋トレしたら腰痛だ

重石に母の哲学浸みている

一本の葦の重さで夕焼ける

気が重い世界の平和くるだろか

地球の重さを測りに旅にでる

自分でも呆れてしまう物忘れ

原発の近さほとほと嫌になる

ほとほとと水をかけ合ういい話

伯備

嘉代子

美籠

みよし

柳歩報

とも子

柳歩

桂子

芳山

注湖

さき

久枝

たけし

久絵

幸

寿代

弘充

輝山

雪代

博子

俊子

青帆

昌枝

知恵子

幹啓

物忘れほとほと嘆く脳の錆

腕白な子にはほとほと手を焼いた

ほとほとにしつべ返しのリモン汁

ほとほととさ単細胞で突っ走り

ゼロの時間そんな一刻暑氣払い

暑い暑いとけないようにラップ巻く

暑いから金平糖も角がとれ

認知症? いやいやこれは暑さ呆け

暑い暑い生きる証のぐちでしょう

灼熱の太陽を抱く大宇宙

京都塔の会

樹本 宏子報

病癒え生きる喜びかみしめる

次世代に遺恨を残す自衛権

五欲忘れ美しく生きる認知症

レシートに主婦の戦さの日が暮れる

どう生きる残る命に聞いて見る

ブランドのレシートこっそり破り捨て

生き方を変えたくものは丸く見る

レシートの束は私の人生譜

この猛暑次から次へ注意報

蝉しぐれ平和日本を守りたい

レシートは三パーセント分重い

次は京都そこで記憶はブツツンと

レシートもちよつと贅沢年金日

レシートに日常生活垣間見る

澄子

孝亮

哲子

禮子

美智子

ゆき

ちえこ

千里

左余

淞丘

宏子報

忠子

勉子

宏子

牛延

保子

弘子

文代

則彦

益子

泰夫

啓子

弘之

朝子

弥生

冷奴打つレシートもクールビズ

悔しさをバネに次回の打開策

次の世もお酒の好きな人の側

ありもしない次の機会を言う言葉

三世代一緒に住んだ世もあった

生きているふりかえらないこれでいい

悪党はやりとりしない領収証

俺たちも生きているぞと草も伸び

次世代に借金ばかり残しすぎ

自衛権騒ぎの中へ蟬は羽化

ローズ川柳会(兵庫)

龜岡

哲子報

乱視眼鏡をさぐるきれいに老いる道

怒らない怒るにや気力要ると知る

ちりめんちゃこの集団でとるカルシウム

至らぬことが夜のしじまに責めてくる

三才児金魚の墓に手を合わす

人魚ならぬ人も泳いでいる浮世

川柳さんだ(兵庫)

田中

章子報

オーロラの神秘にかられバスポート

糺の森千年杉に問う神秘

母体さへ知らぬ生命の小宇宙

幾千の星の一つに君と縁

紙の質わたしのペンも美しい

うたごころ添えて子に継ぐ和紙の里

赤紙を出さぬ願ひに語り継ぐ

欣之

ふりこ

美津子

福子

篤子

悦子

英旺

かずお

葉子

求芽

この恋は金魚すくいの紙のよう

意見され白紙の心色変わる

坊さんも医者もレンタル出来る国

レンタル移籍チャンス逃がさず赴任地へ

レンタルであつても花嫁美しい

レンタルの衣裳で仲人無事務め

孫抱いて許さないとはい難い

許し合う心が絆深くする

も一人のわたしが別腹を許す

ごめんとは言わず遺憾と言われても

高齢者いじめの政治許せない

箱入りを貰つたらしい義父の顔

ゆるやかにとことん生きて花になる

荒波をとことん生きて悔がない

初盆はとことん母に尽します

都構想ととことんやるか大阪都

持ち金をとことん盗むバチンコ屋

ジョギングをとことんやつて身をこわす

拉致の海ととことんじらす二枚舌

暑くても寒くても行く喫茶店

オハヨーのハイタッチ来る夏休み

ごめんなさい亡妻の衣服に別れつけ

暑いのは貴方の所為じやありません

血糖値今日は騒ぐな孫集う

熱いうち打たれとつたらよかったわ

旅先で自転車借りて行くロマン

人の道ちよつと外して息を抜く

見

富夫

好文

つな子

忠

俊昭

美龍

光久

耕治

美智子

隆

茂山

一子

幸香

武彦

ちあき

朋月

健二

淑子

歳子

正和

雄太郎

野薫

雅司

恭子

雅尚

哲男

物語次へ次へと眠れない

川柳ねやがわ(大阪)

籠島

恵子報

ママチャリで逃げる予報の俄雨

歯車のひとつで終えた定年日

拙さが鎮座上手のド真ん中

つたないが母のちぎり絵愛がある

気配りをされて嬉しい老いの足

言い訳に3枚下ろし上手くなる

疲れた国で未来社会を語り合う

稚拙な亡母の手紙懐かし盆供養

疲れたら戻っておいで母の海

被災者へ笑顔で配るボランティア

子の為に疲れを知らぬ母の愛

捨てたけどやはり要るわと拾うくせ

信念を貫きとおし疲れ果て

真実はくもりガラスの向こう側

母からの便り拙い文字ながら

いらだちへするつるつと心太

同じ話相槌打って聞いている

よく喋り聞く耳もたぬ妻の口

目配せをしてから会議動きだす

倅せは配ってもらうものでない

気配りの上手な友を楯にする

折り合いのつかない内に矢を放つ

遊び呆けて仕事になつてるので不思議

ビジネスと割り切れなくて続く仲

ひとみ

かすみ

仁

壽峰

高鷲

あさ子

寿子

鈍甲

麗

朝子

賢子

美江

銀杏

忠央

洋

仁清

茜

博

薫

祥昭

弘一

美智子

博泉

亜成

ルイ子

クラス会楽しい話配ります

配ったら一つ余ったでしょう

白寿だと拙い文字で来るハガキ

ビジネスは後からついてきた誠意

豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦報

こんなものでも食べてくればはるほけ様

何につけまだまだ言うた夢の祖母

鉛筆を削りテストへ身構える

脇役を徹せよという処世術

傘寿ではまだまだ乗れん霊柩車

一円玉論吉の脇で生きている

御神木ハグして神の声を聞く

確実に地底汚れていく地球

削りぶし旨みがかもす和風味

脇役を勤めて飽きぬロゼワイン

モアイ像の胴にくびれを入れてやる

設計図まだまだ見えぬ津波跡

猛暑日も決して笑顔絶やさない

暑い日に電気でまわる扇風機

脇役さすがが目立たぬ燐し銀

削られるムンクになって菌の治療

脇役も思いは同じ甲子園

削られたやはりずばりと書きすぎた

ゴジラ出現する程地球病んでいる

削除キー叩いてふりだしに戻る

現金をチャリ見せられついで油断

さち子

弘風

穂夫

恵子

則彦報

とーな

郁子

庸佑

武彦

幹治

美佐子

千恵子

美津子

健二

(水)玲子

きらり

堅坊

舞

夢草

則彦

紀華

武臣

見清

求芽

葉子

正彦

鏡見てどこを削るかハイおなか

賑やかについてもぎりぎり現れる

他のものは何も望まぬ胡蝶蘭

定年になって酒代削られる

脇役で一生終える嫉妬

ふっと初心が鉛筆を削るとき

敗戦日偲ぶ平和な現在地

脇役も一緒に浴びる紙吹雪

煙突が消えて稀薄になった情

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

ズボンゆるゆる夏バテ寒細り

メタボ引きうけますとベルト穴

ゆるゆると歩いてみたい雲の上

だんじりも夜は提灯ゆるゆると

ゆるゆるがいい命のびるかも

クールビズ私がすれば干涸びる

ありのままゆるゆる登る古稀の坂

次の世は僕のおこがれなまけもの

ゆるゆると蜚はかない恋終る

玉手箱まだゆるゆると夢を見る

ゆるゆると行こうぜ友よ今平和

友人はあいつ以外はありえない

わたし以外みんな知っていた話

ウォシュレットしか駄目ですのあしからず

核以外探してほしいエネルギー

たくあんの尾が母さんの皿にある

(器)玲子

耕治

久子

茂

美智代

佳恵

比る志

歌留多

美籠

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

一善を積んで余生を光らせる

鏡見て肌の調子問うている

喜寿をこえまだ派手似合う母である

派手だわよその一言で仲違い

派手に泣き政務調査費知れ渡り

派手な方薦めてくれる試着室

派手な服孫がからかう子が笑う

派手好きな父の遺言家族葬

執拗な貧乏神のストーカー

友偲ぶ集いに驟雨窓たたく

ゲートボール葉嫌いの顔が寄る

子の家へ友が次々引き取られ

八月の翳り消せない鎮魂歌

つましくも心に花を飾りたい

七日目の蟬の覚悟を聞いている

夏木立から極楽の余り風

知

楓

富子

日の出

理恵

紀子

正雄

和夫

蕉子

満作

公平

千歩

桃花

昭

恭昌

舞夢

集一

尾を振ってついて行きたい人がいる

アメリカにいつまで尻尾ふるのです

月の夜影が私を尾行する

虎の尾を踏んだか周りが騒がしい

尾っぽ振りながら中立守りぬく

辛いなあ尾っぽを切って逃げましょう

特産の旗に尾を振る猫じゃらし

確信をつかれあたたまる尻尾

ヨシ枝

喜代子

トヨ子

光男

まつお

キーキー

いさお

婦美枝

尾を振って

ついて

行きたい

人がいる

句会名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 あまがさき	14日(火) 14時締切 誘う・楽屋・みっちり・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼
川 柳 塔 みちのく	18日(土) 17時締切 相手・うろうろ・植える	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 稲見則彦
川 柳 藤 井 寺	19日(日) 14時締切 数独・鯖・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川 柳 ねやがわ	19日(日) 14時締切 動く・枕・餌・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
岸 和 田 川 柳 会	19 日 (日) 岸和田川柳市民大会	9月号=155頁参照
豊 中 もくせい 川 柳 会	20日(月) 13時40分締切 度胸・入る・貧しい・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急曾根駅・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	21 日 (火) さ ん だ 川 柳 大 会	10月号=133頁参照
川 柳 塔 すみよし	25 日 (土) 吟 行 互角・コース・混む	11時 南海岸和田駅 集合 がんこ寿司
和 歌 山 三 幸 川 柳 会	25日(土) 12時30分開場 下・引く・欲	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 和歌山市役所西隣 〒640-8570 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市 民 会 川 柳 会	26日(日) 14時締切 森・嫌う・まるまる・料理	陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	26日(日) 13時30分開場 ライン・期限切れ・じゃんけん	開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	27日(月) 18時開場 竜巻・いちびる・親しい・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	27日(月) 14時締切 アドリブ・消・楽しむ	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

10月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　　ら	2日(木) 14時締切 移す・耳・音頭	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
倉吉 川柳会	4日(土) 14時締切 便利・煎じる・ヘルシー	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
あかつき 川柳会	10日(金) 14時締切 痩せる・煙・束縛・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳塔 さ　　か　　い	10日(金) 13時開場 都合・習う・折り句=あさき	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	11日(土) 14時締切 焦る・穴・強気	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
城北 川柳会	11日(土) 14時締切 魂胆・染まる・すっきり 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	11日(土) 14時締切 逆・まさか・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
川柳塔 打　　吹	11日(土) 14時締切 足・狙う・さっぱり	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
川柳塔 ま　　つ　　え　　社 吟　　社	11日(土) 13時45分締切 ブラシ・未練・返す・べたべた	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
八尾市民 川柳会	13日(日) 14時締切 寄付・味・澄む・雑詠	八尾市洪川町 安中町集会所 1F JR八尾駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟　　社	12日(日) 14時10分締切 兼題=事実・ヨガ・比べる 課題吟=天気	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8482 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桑原道夫
西宮北口 川柳会	13日(月) 14時締切 効果・揺れる・ダメージ 自由吟	ACTA西宮東館 3階(アクタ) コープこうべ組合員集會室 阪急「西宮北口」駅 北出口 東へ徒歩2分 〒662-0084 西宮市樋之池町10-18-104 福島弘子
ほたる 川柳 同好会	14日(火) 13時30分締切 学校・舞う・折り句=はわい	豊中市立蜷池公民館 阪急・モノレール 蜷池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼

柳界展望

賞」には、一〇五編の応募があり、大賞には塩釜市の丸山あずきさんに決定。準賞は高瀬霜石さん(同人・弘前市)

▽ご芳志御礼△

★第61回八尾市民川柳大会は8月24日、八尾文化会館で開催。参加者一〇六名。同人秀句次の通り。

池 森子
恋は今女らしさを研ぎ澄ます

吉岡 修

北へ来てゆつくり泣けと歌は言う

★美と川柳親月の夕べは9月4日に開催。参加者六十八名。同人秀句次の通り。

西出 楓楽
百冊を積んでわたしの岩とす

西内 朋月
蛸焼を楽屋で食つてい
るスター

★第3回「東北川柳文学

○八木千代さん(参与・米子市)より、90周年お祝いとしてご芳志を拝受。○栃尾奏子さん(同人・大阪市)よりご厚志拝受。

▼柳界動向▲

■山本蛙城さん(同人・泉佐野市)は8月28日逝去。享年94。ご家葬にて見送られた。

▽新誌友紹介△

大阪市 中島 栄子
紹介者 川柳塔すみよし
大阪市 宮村満寿恵
紹介者 川柳塔すみよし
大阪市 土井 舞蹴
紹介者 川柳塔すみよし
大阪市 磯島福貴子
紹介者 川柳塔すみよし
常任理事会 9月9日(火)

平成26年度(第26回) 川柳塔碑合祀祭実施要領

本年度川柳塔碑合祀祭を下記の通り行いますので、ご参列賜りますようご案内申し上げます。

合祀祭日 平成26年11月8日(土) 雨天でも行います。
集合場所 南海電車 難波駅 3階中央改札前
集合時間 午前9時30分

(川柳塔の茶色の旗をあげておきます)
乗車時間 特急「高野」午前10時発に乗車します。
事前申込者には割引周遊券月特急券(サービック)を購入しておきます。

会 費 4,600円(往復乗車券および往きの特急券、昼食費)
帰路の特急券は各自でご購入願います。

合祀祭会場 〒648-0211 和歌山県伊都郡高野町高野山17
高野山霊園内 川柳塔碑前

(奥の院下車 徒歩5分)
大霊園事務所 電話 0736-56-2966
到着後すぐに法要を営みます
(午後12時15分頃より約30分の予定)

合祀予定者(敬称略)

(平成25年8月～26年7月までにご逝去された同人で
高野山基金に参加されている方)

津川 紫見 田中 亜弥 徳田ひろこ
大石あすなろ

新同人紹介

中 なか

村 むら

恵 けい

森子・楓楽推薦

①第20回川柳塔まつり関連
②同人総会関連
③新常任理事・新理事
④6賞選考結果
⑤大阪川柳大会
⑥定例確認事項
⑦各部報告
次回 9月26日(金) PM 13時

第18回 大阪弁NAMBA 川柳コンテスト作品募集

大阪弁を盛り込んだ川柳なら何でも。

ハガキ1枚につき川柳1点。

住所・氏名・年齢・電話・職業明記のこと

宛先 〒542-0075

大阪市中央区難波千日前12-19

なんなんタウン商店街振興組合内

第18回 NAMBAなんなん

大阪弁川柳コンテスト 係

締切 10月10日(当日消印有効)

賞品 なんなん大賞 1名

(賞状と旅行券 10万円)

優秀賞 2名(賞状と旅行券 3万円)

他多数

問合せ先 06-6631-5102

角田(カクタ)まで

第65回 西宮市民文化祭川柳大会

日時 10月12日(日) 開場 12時

場所 西宮市民会館(市役所南隣)4階

会費 1500円(呈 作品集・小品)

兼題 (各題2句・欠席投句辞拝・席題なし)

当たる 辰巳 和子 選

広い 徳長 怜子 選

紙 西田 斎柳 選

ロボット 北野 哲男 選

整える 西出 楓楽 選

突然 菱木 誠 選

身体 村上 氷筆 選

出句締切 13時30分

交通案内 阪神西宮駅 市役所口 北へすぐ

JR西宮駅 南側下車～国道2号

線を西南へ約12分市役所南隣

共催 甲子園川柳社 西宮川柳会

西宮北口川柳会 瓦木川柳勉強会

連絡先 村上 氷筆 〒652-0897

神戸市兵庫区駅南通5-2-7-2609

電話 078-381-5844 携帯 080-1406-1717

第2回 さんだ川柳大会

開催日 10月21日(火)

場所 三田ゴルフクラブ(JR三田駅北口より送迎バス)

三田駅北口、神戸電鉄フラワータウン駅

で係員がお待ちしています(10時～11時)

会費 句会と懇親会参加 4,000円

(句会のみ参加は 1,000円)

時間割 11:00 三田ゴルフクラブ集合

11:30～12:30 懇親交流会(昼食・飲み物)

12:30 句会受付開始(句会のみ参加者はこの時間に)

課題 「食べる」 堀 正和 選

「曲がる」 上垣キヨミ 選

「勇気」 長川 哲夫 選

「スタート」 上田ひとみ 選

「ぬけぬけ」 長浜 美籠 選

「自由吟」 北野 哲男 選

※席題なし 出句は各題2句

※投句のみ可 10月18日

堀正和まで(82円切手5枚)

出句締切 13:00 披露 14:00

終了 16:00 三田駅へ送迎バス

主催 三田市川柳協会

連絡先 北野 哲男 TEL 079-563-4593

堀 正和 TEL 079-559-1255

第86回 奈良県川柳大会

日時 10月26日(日)

開場 11時30分 出句締切 13時

会場 生駒市コミュニティーセンター 1F

文化ホール(生駒セイセイビル内)

生駒市元町1-6-12 TEL 0743-73-0500

近鉄「生駒」駅下車 南へ徒歩5分

兼題と選者(各題2句)

「足」 土田 欣之 選

「わかる」 阪本きりり 選

「途中」 池 森子 選

「和む」 南 芳枝 選

「タプー」 笹倉 良一 選

「青い」 大西 将文 選

「まさか」 米田 恭昌 選

参加費 1500円(昼食は済ませてお越しください)

欠席投句の方は、9月30日(火)までに

投句料1000円を添えて下記まで。

問合せ・投句先 〒634-0051 橿原市白樺町5-2-2-405

居谷真理子 TEL/FAX 0744-27-6405

主催 奈良県川柳連盟

編集後記

★牛の背で笛吹く恋が
してみたし 薫風

★8月20日、広島市北部を襲った集中豪雨から発生した土砂・土石流災害は多くの人命を、平穏な暮らしを奪いました。被災地は今なお土砂・泥流との闘いが続き、不明者の捜索が行われています。今そこにある現実になすすべもなく、ただ祈るしかない我が身が哀しい。被災者の皆さまのご健康と、一日も早い復興を心よりお祈りします。

★六賞発表号をお届けします。川柳塔賞・檸檬賞の受賞者の瑞々しさ、若さが匂いたつ。各地柳壇賞のいぶし銀の冴え、路郎賞・愛染帖賞・一路賞の個性がきらりと光る作品を存分に味わって頂きたい。

★三省堂から田口麦彦

編「新現代川柳必携」(二八〇〇円＋税)が刊行された。「新鮮で句のテーマ別秀句集」を謳い文句に、全国の柳誌から集められた作品が五〇〇〇。

★震災・原発・介護・終活など現代を読み解く項目も。川柳塔同人・誌友の作品もたくさん採られている。俳句の歳時記のように手元に置きたい一冊。

★俳誌「船団」102号

優勝を果たした洛南高校俳句部顧問の方のエッセイが掲載されている。8月の番傘水府忌で木津川先生は「文学的川柳と川柳の文学」と題して講演をされた。先生は「川柳の都大阪で川柳甲子園」を、と柳社を超えた協力協同の必要性を説かれた。私たち一人一人の熱意が問われている。

★「句会燦燦」の鑑賞者の岩崎眞里子さんは青森県黒石市在。作家集団「新

ひとこと

五年後

朝刊の投句欄を読む事から始まった私の川柳入門。その内に自分自身も、その時々的心境をノートに書き込むようになり、句会に参加するようになりました。

句会に行くようになって、他の方達の様々な作品に触れるにつけ、物事の着眼点が人様々でバラエティ豊かな所に、いつも感心するやら時には小さな感動すらも頂

いております。

軽い気持ちで始めた私の川柳修業。まだまだ道半ばで勉強不足。自身の作品にはいつも不安を持ちながら、しかし少しの期待を込めて楽しく投句させて頂いています。

五年後の少し成長した私は、今の私の句を何と読むでしょうか。五年後はどんな句を作っているのだろうか。大いに楽しみです。

(藤原千恵子)

思潮」会員。フレッシュな果物のような鑑賞を楽しまたい。

★新同人に推薦された方から「同人バッジが届きました！嬉しい！」と、弾んだメールを頂きました。塔まつりでは新同人の方々をご紹介します。ぜひご参加ください。お待ちしております。

(朱夏)

◇NHK連続テレビ小説「花子とアン」が面白い。ドキュメンタリーである

ことが物語に迫力を加えているように思う。

◇ヒロインのモデルは、翻訳家で児童文学者の村岡花子。演ずる女優、吉高由里子のキリッとした知的な美貌は二十代半ばの花子の写真とそっくり。

◇花子の「腹心の友」蓮子のモデルは、歌人の柳原白蓮。こちらもまた面長で涼しい顔立ちの美人で、演ずる仲間由紀恵と甲乙つけ難い。

◇物語は、明治・大正・昭和の軍国主義、男尊女卑の世相を背景に、二人の女流文学者が自らの信念を貫いて生きてゆくというのがテーマで、原作者は、花子の養女で作家の村岡憲理さん。

◇またこの時代は、路郎・水府や鶴彬らが活躍した時代と符号し、それぞれがこの暗黒の時代をどう生きたかに思いを馳せながらドラマを楽しんでいる。

(いさお)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(12月号) 地名

市都
道府 姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「年忘れ」(10月15日締切)

12月号発表

古久保和子 選 — 共選 — 牧野 芳光 選

B		A	
地名			
市都 道府		市都 道府	
姓 雅 号		姓 雅 号	

切らないで下さい

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

初歩教室「土壇場」(3句)
一路集「狙」(3句)
「コーナー」
「枝」
山小山吉
口沢岡岡
光富美子
久淳修
担当選選選

檸檬抄「年忘れ」(2句)
古久保和子
牧野芳子
新野家光
西出楓司
小島蘭幸
水煙抄(8句)
愛染帖(3句)
川柳塔(8句)

12月号発表(10月15日締切)

1月号
檸檬抄「太い」
一路集「前向き」「忙しい」
「バチバチ」
初歩教室「わくわく」

第66回 大阪川柳大会

日時 12月11日(月) 12時20分開場
場所 大阪市立住まい情報センター
3階ホール TEL.06-6242-1160
地下鉄「天神橋筋6丁目」駅下車③号出口
JR大阪環状線「天満」駅下車 北へ660m
会費 1500円(発表誌呈)
「ニュース」立蔵 信子 選(川柳瓦版の会)
「叱る」住田英比古 選(番傘川柳本社)
「北」北田 惟圭 選(川柳文学コロキウム)
「痒い」村上 直樹 選(川柳塔社)
「一本」吉川 卓 選(川柳天守閣)
「浮く」西出 楓楽 選(川柳塔社)
「飾る」上野多恵子 選(番傘川柳本社)
出句 各題2句 席題なし 締切 13時20分
主催 番傘川柳本社・川柳塔社
川柳文学コロキウム
川柳天守閣・川柳瓦版の会
後援 大阪市

本社11月句会

7日(金) 午後1時から

兼題「季節」「省く」「こそこそ」
「釘」「訛」

第32年度 夜市川柳募集

第5回「策」岩田明子 選
ハガキに3句 10月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円(送料86円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一四年(平成二十六年)十月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)七九三九四〇番
振替〇〇九八〇一四一・九八四七九番

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔欄(本社事務所取り扱い扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しつかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本県中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>